めず、即原始にいさぎよき智は其位に居りて己の主宰を直觀したりしが、今は墮落のために耻を衣て、心の眼のくらみしにより、我等の元祖アダムが悖逆に至る以前に見たる所の光榮を見ざるなり。

二、世に種々の賢哲あり、一は哲學に秀づるをあらはし、他は詭辯學を練習して人を惑かし、或者は能辯學に力をあらはし、或者は文法家及び詩人となりて、受けたる規則により歴史をあらはせり。さりながらまた世の藝術を練習する種々の技藝者あり、一は魚鳥及び人類の體形を木に刻し、これを以て己の優秀を示さんを努め、他は偶像又は他の或物を銅にて製造せんを企て、また他者は廣大美麗なる屋宇を建築し、或者は地を掘りて敗壞すべき金銀或は寶石をこれより引出す、しかれども其他者は身體の美を有し、面貌の艶なるに誇りて、更にいよ〳〵サタナの捕ふる所となりて罪におちいりぬ。されば此等の技藝者は、すべて其内部に住む所の蛇に占領せられ、其居る所の罪を自覺せずして、凶惡なる力の捕虜奴隷となり、自己の知識と藝術とより何等の益もうけざりき。

三、もろ〳〵の殊異多樣なるものをみちみてる世界はこれを富人に比ぶべし。富人は大に美麗廣大なる家を有し、金銀又は種々なる所得ともろ〳〵の從者とに富むも、一朝病と衰弱との爲に圍まるれば、すべての親屬其前に立ち、一切の富によるも、彼を其病より救ふあたはざるべし。故に世のいかなる勉勵も、兄弟も、富も、前に歓へたる他のいかなる物も、罪に溺沒して明に見るあたはざる靈魂を罪より救ひ出す能はざるべくして、たゞハリストスの來れる一事は靈魂と身體とを清むるを得るなり。故にもろ〳〵の雜慮を脱し、日夜主を呼んで、己を彼に委托せん。此の見ゆる世界と世に於て味ふ所の安息とは一見したる所、身體に愉快なる程は、靈魂の慾を奮興して、其苦みを增大にするなり。

四、一の聰明なる人士あり、全く勉勵盡力して尋ねんとの望を起し、凡そ此世に於て交際する所の者を試みんことを勉めたり、何人よりか益をうけんと希望したるによる。彼は王にも、有權者にも、公にも至りしが、かしこに於て靈魂に適用すべき救濟の療法を見出さず、彼等と久しく交際せしに何も益する所あらざりき。其後世の賢哲と能辯者とに至りけるに、何等の得る所もあらざりき。ゆゑに同じく亦彼等をすてたり。富家と、地より金銀を取る者と、もろ〳〵の技藝者とにゆきけるが、其創痍の爲に何等の療法も求むるあたはざりき。終に彼等を離れて、靈魂の慾と病とを醫す所の神をみづから呼べり、彼は自からおのれを省察して、此事を沈思冥想するや

その才智は其既に嫌ひ憎みて現に遠ざかり居る所の物の周圍を廻轉することあらはれたり。

五、また世に富める處女あり、多くの貨財と大に美麗なる家とあるも、保護となるべきものなしに居りければ、多くの者來りて彼に害を爲し、其居住を荒らしけり、されば彼は侮に堪へず、ゆきてみづからすべてに才能ありて教育ある有力の夫を尋ねたるに、多くの盡力の後如此の人を搜し得るや、其喜はいかならん、彼はこれを有して堅城鐵壁にかへたり、靈魂もかくのごとし、犯罪の後反對なる力のために最多く苦められ、大に荒され、誠命を破りしために寡居孤立となりて、天の夫にすてられ、もろ〳〵反對なる力の玩弄する所となりぬ。彼等は靈魂の天に屬する了解を腥潮して、これを忘れしめたり、故に彼は敵のおのれに何をなしゝを知らずして却て最初よりかくの如きものと思へり。其後己が寡居孤立の身なるを風聞により探知し、己が荒されたることを神の仁慈の前に痛哭して、遂に生命と救とを得たり。これ何によるか、其同族に立歸りたるによるなり。けだし靈魂が神と共にし神も靈魂と共にする如くなる互に親密なる關係は他にあるなし。神は種々の鳥をつくりたまへり、二者をば陸に接みて、こゝにみづから食と安息とを求めしめ、他者をば水に接みてかしこに生を送らしめたり。神はまた二の世界を造れり、一は奉事の神の爲に上にありて、彼等にかしこに居住を有するを命せり、また一は下に此の天空の下にありて、人類のためなり。また天と地と、日と月と、水と、豐盛なる樹と、もろ〳〵の生物とを造りたまへり。さりながらこれらの造物の一にも主は止りたまはず。悉くの造物は其權中にあり、されども彼等に於て寶座を定め給はず、かれらと親與をなしたまはず、たゞ一の人と親與し、これにとゞまりてこれに惠を垂れ給へり。神の人と共に人の神と與にする此の如き親密なる關係を見るかゆゑに聰明にして善智なる靈魂はあらゆる造物をへめぐりて、何處にもおのれに安息を看出さず、たゞ獨り主に於て看出すべく、主も亦誰にも惠を垂れずして、たゞ獨り人に惠を垂れたまへり。

六、目をあげて太陽に向へば、太陽の圓體の天に中して、其光と其光線の地に下降するを見るべく、其光のすべての勢力と其光輝の地にそゝぐを見ん。かくの如く主も父の右に坐して、もろもろ首領權柄の上に居るといへども、其目は地に居る所の人々の心にそゝぐは、彼の助を待つ者等を其自から居る所に昇せんが爲なり。けだしいふ、『我が在る所は我に事ふる者も亦彼處にあらん』〔イオ・アン十二の廿六〕、また〔ヱフェス二の六〕、『ワェルはいへり、『復活せしめて天に己の右に坐せしめたり』と〔ヱフェス二の六〕、さりなが

ら無言なる動物は我等よりも多く伶俐なり、何となれば彼等はおの〳〵己の属類と合すればなり、野獣は野獣と共にし、羊はまた其類と共にするなり。しかれども汝は天の同族たる主に帰せず却て其思を悪者の思と和して、これにしたがひ、罪の助成者となりて、これと一たらんが爲に自己に向つてたゝかひ、かくて己を敵の食料に委すること恰も鷹に攫まれたる鳥の貪食せらるゝ如く、或は羊の狼に於る如く、或は手を蛇にのばして、彼の爲に螫されたる童子の死するに似たるあり。これらの同形類似は恰も霊神上の事を面りあらはすに似たるあり。

七、婚姻を約する富める處女は、婚姻の前にいかなる贈物をうくるあらんも、或は装飾品、或は衣服、或は貴重なる器物をうくるあらんも、婚姻の時至らずして、婚姻の契約のいまだ成らざる間は、これによりて安心せざるなり、かくの如くおのれを天の新郎の新婦たるに準備したる霊魂も、神の聘質をうけ、或は歩意の賜、或は默示の賜、或は默示の賜をうくるといへども、完全の親與に、即愛に達せざらん間は、これを以て安心せざるなり、けだし愛は變らず且蹉跌せざるものにして、これを欲願したる者を無欲なる者及び動揺せざる者となせばなり。或は真珠と貴重なる衣服とを着たる嬰兒の如し、彼もし飢うるときは、いかなる物をもあたふるも彼はすべてかへりみずして、すべての注意を己をやしなふ所の乳房に向けん、乳を求めんが爲なり、霊神的なる神の賜のこともかくの如く思ふべし。神に光榮は世々に歸す。アーメン。

第四十六　講話

神の言と世の言と、神の子と此世の子との間の差別。

一、神の言は即神にして、世の言は即世なりさりながら神の言と世の言と、神の子と世の子との間に大なる差別と距離のあるあり。けだしすべての種子は其所生に肖んぬゆゑにもし神の種子が世の言と地上の物體と此世の榮とに己を付與せんをねがふならば、彼は生命の真實なる慰安を見るを得ずして、死し且亡びん。何となれば彼の慰安は其生れたる所にあればなり。主のいひ給ふ如く（ヨハネ十三の廿二）浮世の諸慮の爲に勝たれ、地の械繫につながるゝ者は、歴せられて、神の榮の爲に無結果なる者とならん。しかれどもこれとひとしく肉に属する自由なる意志の爲に勝たるゝ者、即世に属する人も、もし神の言をきくを願ふといへども、歴せられて、或る無言なる者の如くならん。悪習の欺きに慣れたる者等は神のことを聞くときは、

不愉快なる談話に援されし者の如く、心に煩悶せん。

二、且又パウェルもいへり、『靈に屬する人は神の神の事をうけず、其彼の爲に愚たるが故なり』（コリンフ前二の十四）。また預言者もいへり、神の言は彼等の爲に嘔吐したる食物の如しと（イサイヤ廿八の十三、フェオドテオンの譯に依る）おの〳〵己の生れたる所の法に依りて生活するの外別に生活するあたはざるを見ん。然れどもまた他の一方よりもこれに注意せんこと肝要なり。もし肉に屬する人は決心して自から己を變化するに着手するならば、最初にまづ彼は死して、以前の惡なる生活の爲に無結果なる者とならん。然のみならず病に胃さるゝ者、たとへば熱病にかゝる者の如きも、其身は床上に横りて世の何事をも修むる能はずといへども、工作の爲の配慮に引かれて、心は自から安んせず、其友をつかはして醫を尋ねん。かくの如く誠命を破りて己れを情慾の病におとしいれ、無力なるものとなれる靈魂も主に就て彼を信ずるときは、彼より代保をうけん。されば從前の最惡なる生活を棄て、舊き病の爲に衰弱する靈魂は、なほ横臥して、生命のいかなる行をも眞實に成し遂ぐる力あらずといへども、しかれども生命の爲に專ら力めて慮り、主に懇願し、眞實の門を尋ねざるを得ざるべく且これを爲し得るなり。

三、僞教師の爲に詭計に引入られたる或者等主張して、人は必ず死すれば何等の善も全く爲すあたはじといふは誤れり。嬰兒は何も爲すの力あらず、或は其足にて母に至るあたはずといへども、母を尋ねて自から身を動かし呱々として泣かん。されば母はこれをあはれみ、兒の聲を勵まし、高く叫んで母を尋ぬるをよろこび、兒の來りて母に就くあたはざるがために、兒を愛するの情に勝つ能はざる母は其久しく尋ぬるがために、みづから彼に近づきて、大なる慈心を以て彼を取り、慈愛してこれに乳せんとす。人を愛する神の來りて神を尋ぬる靈魂と爲す所もこれに同じ。然のみならず其固有の愛と其の本來の慈心とに動かさるゝ彼は更にいよ〳〵自から靈魂の明悟に附きて、使徒のいへる如く靈魂と一神とならん（コリンフ前六の十七）。けだし靈魂が主に附き、主も靈魂を憐み且愛しつゝ來りて彼に附きて、靈魂の明悟は主の恩寵に最早不斷に止居るときは、靈魂と主とは同一の神となり、同一の融和、同一の智とならん。靈魂の體は地に棄てらるゝものとなりて存すれども、其の智は第三重の天に昇り、主に附きて、かしこに主につかふまつりつゝ、天のイエルサレムに全く生存せん。

四、天の都に高く尊嚴の位に坐し給ふ者は、自から靈魂と共にその體に全く居ら

ん、何となれば彼は靈魂の象を高く諸聖者の天の都なるイエルサリムに置けども、其神性の得もいはれざる光の自己の象をその體に置きたればなり。彼は體の都に於て靈魂につとめて、靈魂は天の都に於て彼につかへん。靈魂は天に於て彼の闘業者となりたれど、彼は地に於て靈魂を闘業にうけ給へり。けだし主は靈魂の闘業となりて、靈魂は主の闘業となるなり。くらまされたる罪人といへども、其思と智とは體より極めて遠く離るゝを得べく、大なる距離を瞬間に走りて、懸隔せる方面にうつる力を有するなり、されば體はしば〳〵地に棄てらるれども、思は至愛する者と共に他の方面に居るべく或は至愛する者と共にして、自己を見ること彼處に居る者の如くならん。しかれども罪人の靈魂さへかくの如く鋭敏に疾く翔りて、其智は懸隔せる方面に在るを妨ぐるあらずんば、いはんや聖神の力を以て暗黒の覆を脱したる靈魂に於ては、その智慧の眼は天の光に照されて、靈魂は汚辱の慾より全く救はれ、恩寵により潔きものとなるときは、天に於て全く神を以て主につかふべく、また體を以ても全く彼につかへて、其思は何處にも在らざる迄き程濶くなり、欲する所に隨ひ、欲するときにハリストスにつかうまつらん。

五、使徒は此事をいへり、曰く『衆聖徒と偕に濶さと長さと深さと高さとの何なるを悟り、及びハリストスの測り難き愛を知るを得んため、爾等が神の凡の充滿に滿てられんためなり』エフェス三の十八十九。得もいはれざる靈魂の奥秘を察せよ、主はこれにかゝれる暗黒をこれより排除け、これを開きて、自からこれに現はれ給ふ。其智の思を廣濶にして、凡そ見ゆると見えざる萬物の濶さと長さと深さと高さとに至らしむることいかばかりなるや。されば靈魂は實に大業、神の業にして、奇異なる業なり。これを造るに當りて神は其本性に悪癖を入れずしてつくり給へり、却て神の道德の像によりてこれを造り、これに道德の法と理性と認識と善智と信と愛と其他の德行とを神の像によりて賦與し給へり。

六、今も主は認識と善智と愛と信とに於て彼を捜し求めて、かれに現はれん、主は明悟と意念と自由と主宰する智とを彼に賦し、又或る大なる優美を彼に王たらしめ、かれを動かし易きもの、輕翼なる者、及び倦まざるものとなし、瞬間に去來して、神が欲するときは、思を以て主につとむべき才能を彼にあたへ給へり。一言を以てこれをいへば彼をして主の新婦となり隨伴者とならしめんがため、又主も彼と合併して彼も主と一神とならんがために彼をつくりたまへり、いふあり「主に附く者は主と一神となる」コリンフ前六の十七。彼に光榮は世々に歸す。アミン。

第四十七　講話

法下にありし事の譬解。

一、モイセイの面にあらはれし光榮は眞實なる光榮の象なりき。かしこにイウデヤ人はモイセイの面を仰ぎ見るあたはざりし如く、今も「パリスチアニン」が彼の光榮を靈魂にうくるときは、暗黑は此光耀に得堪へずして、眩まされたるものは逃走せん。且イウデヤ人は割禮によりて自分は神の民たるを示せり。しかれどもこゝに神に選ばれたる民は(デイト二の十四)其心の內部に割禮の表示をうく、何となれば天の劍は智の餘を裁割す、即罪の不潔なる餘を裁割すればなり。彼等には肉身を潔にするの洗禮ありたれど、我等には聖神と火とを以てするの洗禮あり。けだしイオアンはこれを傳へて言へり、『彼は聖神と火とを以て汝等に洗を授けん』(マトフェイ三の十一)。

二、かしこには內部の幕と外部の幕とありて、『第一の幕には司祭等恒に入りて奉事を行ひ、第二の幕には獨り司祭長のみ一年に一度血を携へずんばあらずして入り、此を以て聖神は、先の幕の猶存する時は、聖所に入る途の未だ啓かれざるを示す』(エウレイ九の六、八)。しかれどもこゝに入るを賜はる所の者は手の造る所にあらざる幕に入る、即『パリストスが我等のために先驅として入りし所』(エウレイ六の二十)の幕に入るなり。律法に於ては司祭に二の鳩を取るを命せられ、一を屠りて他の生者をば其血をそゝぎて、自由に飛ばしめたり。しかれども此行爲も眞實の象と影となりきゝけだしパリストスが屠られて我等にそゝぎたまひし血は、羽翼を生せしむればなり、何となれば神性の大氣に自由に飛揚する聖神の羽翼を我等にあたへ給へばなり。

三、イウデヤ人には石版にしるしたる律法をあたへられたれども、我等には心の肉版にしるさるゝ神的律法をあたへられたり。けだしいふあり、『我が律法を彼等の心に置き、其思にしるさん』(イエレミヤ三十一の三十三)。されば彼はすべて廢止せらるべき一時的の者にてありたれど、今は實にすべては內部の人に行はるゝなり、何となれば許約は內部にあればなり、一言にてこれをいへば『此の諸事は彼等に遇ひて象となれり。此等の錄されしは我等の警とならんためなり』(コリンフ前十の十一)。神はアウラアムに未來を預言していへり、『爾の子孫他人の國に旅人となりて其人

〻に事へん、彼等四百年の間之を惱まさん。(創世記十五の十三)これまた影の象たりき。民は移されて埃及人等に奴使せられ、粘土と磚とを以て苦められたり。ファラオンはイズライリ人に作事の看守者と監査とを附して、其事を必ず爲さゝるを得ざらしめたり。しかれども、イズライリの諸子が苦役の中にあり、神の前に嘆息するや、神はモイセイによりて彼等に憐を垂れ給へり。されば多くの罰を以てエヤペト人を驚かし、もはや嚴冬を過ぎて春のあらはるゝや、花の月に於て彼等を埃及より引出し給へり。

四、神はモイセイに疵なき羔を取り、これを屠りて、其血を閾と門とに塗るを命じたまへり。埃及の冢子を亡す者のこれに觸れざらんためなり。けだしつかはされたる天使は血の表示を遙に見て、自からこれを避け、表示のあらざる家に入りて、あらゆる冢子を殺したればなり。然のみならず何れの家よりも發酵する物を除かんことを命じ、屠られたる羔を無酵麵包と苦き草と併て食ふべきを誡命し給へり。而してイズライリ人はこれを食ふに腰に束帶し、足に履はき、手に杖を有せざるべからざりき。かくの如くして主に「パスカ」を晩餐に於て全く謹みて食し、羔の骨を折るべからざるを命せられたりき。

五、また彼等にはおの〳〵その隣の埃及人より金銀器物を借るを命じて、許多の金銀と共に彼等を引出せり。而して彼等は埃及人が其冢子を葬るとき、埃及より出でたり。一方には苦役より救はれたる爲の喜ありて、又一方には兒を亡ひたるの哭泣と嘆息とありき。ゆゑにモイセイは言へり、これ神が我等をすくはんことを約し給ひし夜なりと。しかれども此のすべてはまたハリストスの來るによりて救はれたる靈魂の奥秘なりき。けだしイズライリといふ言は譯すれば神を見る智慧といふ義にして、彼は闇黑の苦役と埃及の諸神とより免れて自由を得たればなり。

六、けだし人は悖逆により恐るべき靈魂の死を以て死して、祖に詛を受く、言ふあり、『地は汝のために荊棘と蒺藜とを生ず』(創世記三の十八)と。また言ふあり、地を耕すべし、汝の爲に其果を生せざらんと、ゆゑに其心の地に荊棘と蒺藜と生じて成長せり。敵は詭計を以て彼の桀をうばひ、耻を以て彼にかうむらしめたり。彼の光はうばはれて彼は暗を衣たり。彼の靈魂を殺し、彼の意思を散亂滅裂し、彼の智を高きより落して、人即イズライリは眞のファラオンの奴隷となれり。ゆゑに彼れファラオンは人の爲に看守者と監査、即惡なる諸神を置き、人をして自由と不自由とに關はらず、惡なる行事を強て爲さしめ、粘土にて磚を作らしむるなり。人を想想の天の狀態より

遠ざけたる者は人を姦惡なる、物質的なる地と泥土的なる行爲に引落し徒らなる言と思と慮とに引落せり、何となれば靈魂は高きより墮落して、人を增惡するの國と殘忍なる君とを迎へたれば、彼等は靈魂をして强て罪惡の城市を築かしめんとす。

七、しかれどももし靈魂は慨嘆して神に號ふならば、埃及の苦役より救はんとする靈界のモイセイを彼に降し賜はん。さりながら先づ呼んで嘆息すべし、さらば其時に救の始を見ん。されば靈魂は新なる花の月、良春の候、心の田が美しき花を產する義の嫩枝を發生する時に當りて、昏まされたる無智と大なる盲昧の嚴冬がすでに過ぎたる後に救をうけん、即耶ゐべき行爲と罪の結果の過ぎたる後に救を受けん。然のみならず其時神は各人の家より一切の舊酵を除き、腐敗せる舊き人の行と智と惡念と不潔なる考とを出來るだけ棄つるを命じ給はん。

八、羔を屠りて祭に獻じ、其血を以て閾を塗らんこと肝要なり、何となればハリストス眞實良善なる疵なき羔が屠られて、其血を以て心の閾を塗らるゝによる、これ十字架の上にそゝがれたるハリストスの血が靈魂の爲に生命となり、救となりて、埃及人即魔鬼の爲には哀となり又死となるを致さん爲なり。けだし疵なき羔の血は彼等のために實に哀みなれども、靈魂のためには喜びなり、又樂みなり、次にこれを塗りたる後、神は命じて腰に帶し、履を穿ち、手に杖を持ちて、羔と無酵麵包とを苦き草と共に晩餐に食せしむ。けだしもし靈魂は先づ百方盡力して出來るだけ善行を以て備ふるあらずんば、羔を食ふをゆるされざるなり。しかれども羔は旨く、無酵麵包は味好しといへども、草は苦くして澁し、何となれば靈魂は其居る所の罪の故に哀み、多くの憂愁と悲痛とを以て羔と善良なる無酵麵包とを味ふによる。

九、また晩餐に羔を食ふを命せられて、晩餐の時は光と暗との中間をなす。かくのごとく靈魂も此の救の先には光と暗との中間にあり、何となれば當時神の力は彼と共にありて、暗黑をして靈魂に入りて彼を呑むをゆるさざればなり。されば モイセイがこれ神の約束の夜なりといひし如く、ハリストスも會堂に於て惡をわたべられし時、これを名づけて主の禧年といひ、救の日といひしことは錄する所の如し〔ルカ四の十八〕。かしこに於て報復の夜は此處に於ては救の日なること是れ當然なり、何となればかしこに於てはすべては眞實の象と影とにして、奧密に豫象を以て靈魂の救を預め錄されたればなり、けだし靈魂は暗中に幽せられ縛して地獄の坑に囚はれ、銅門を以て閉されたれば、ハリストスによりて救はるゝなくんば免るゝあ

たはざりしなり。

十、ゆゑに埃及の家子を殺して出づる時に於て、靈魂を埃及より、又埃及の苦役より引出さん、何となれば眞のファラオンの力の或部分は既に衰へたればなり。囚虜の救はるゝを哀みたる埃及人は泣て嘆息せん。神は埃及人より金銀の器物を借り、これを携へて埃及より出るを命じ給ふ、何となれば靈魂は暗黑より出で來りつゝ金銀の器物、即七倍を以て燒かれたる自己の善良なる意念を自から携ふべくして、神はこれを其奉事に用ふるをゆるして、これに安んじたまふによる、しかれども先きに靈魂の隣たりし魔鬼は彼の意念を散亂し、彼を占領し、彼を費したりき。暗黑より埋ぬかれて自由を得たる靈魂は禍なり。されど彼の殘忍酷薄なる監督者より救ふを能くする者に向つて慨嘆せず號泣せざる靈魂は禍なる哉。

十一、イズライリの諸子はパスハをおこなひて、途に出發したりしが、靈魂は聖神の生命をうけ羔を食ひ、其血を塗りて、眞實の餅、即生活の言を以てやしなはれて、大に發達するなり。火柱と雲柱はイズライリ人を護衛して、かれらに先たちしが、聖神は靈魂を扶持し、これを悟覺せしめて「パリステアニン」を堅むるなり。ファラオンと埃及人は民の逃走し、イズライリ人の工作をうしなひしを聞知して、家子を殺したる後、敢て彼等を追跡せり。ファラオンは直ちに其車に駕し、衆民と共に彼等を殄滅せんと、急ぎて彼等の中間にすでに突進せんとするや、雲あり其中間にかゝりて、一を遮り暗ましして、他を照し且護りたりき。さて余は歴史を反復して說話の長くならんことを恐るゆゑにこれを靈界の事に應用することはすべて自から見出すべし。

十二、靈魂の埃及より走るや、神の力は來り助けて、これを眞理にみちびかん。靈界のファラオン、罪なる暗黑の王は靈魂の背きて其國を逃れ、その久しく占領したる意念即その所有物を奪ひ去るを偵知す、しかれども虐者は靈魂の再び歸り來らんを預想し且希望せん。されど家子を殺し、意念を奪ひ去りたるにより、靈魂が己の管轄を全く遁るを推知し、もし靈魂が遁るゝならば己の旨と行事とをおこなふ者は全く一人もあらざるべきを恐れ、いよ〳〵傲慢にして突進せん、故に彼は憂愁と誘惑と見えざる戰とを以て靈魂を窘逐せん、茲に於てか誘惑せらるべく、茲に於てか試みらるべく、茲に於てか靈魂を埃及より引出せし者に對する靈魂の愛は顯然明白となられん、何となれば彼は種々の試と誘とに付さるればなり。

十三、靈魂は敵の力が襲ふて己を殺さんとすれども、その力を有するにはあらざるを看破す、何となれば靈魂と埃及諸神との間に主は立ち給へばなり。また其己の

目前に憂愁と思難と失望の海のあるを看破す。しかれども既に備をなせる敵を見て、後に退かんことも前に進まんことも能はざるべし、何となれば死の畏懼と四方を圍繞する種々の恐ろしき患難とは其目前に死を見せしむればなり。故に靈魂は四方を圍める惡者の蜂起の故に自己に依頼せざるべし。されば神は靈魂の死を恐れて落膽すると敵の彼を呑まんとするとを認むるや、其時靈魂に降りて、果して信仰に堅く立つか、神に愛を有するかを試みて、かれに小なる助をあたへん。けだし生命に入るの途はかくの如く、憂愁と困迫と多くの試練と最慘憺たる誘惑とを以てすることは、神の定むる所なり。ゆゑにもし靈魂は猶此世に於ても死を目前に有し、限りなき憂愁の中に此旅行を成すならば、最早其時は強き手と、高き臂と、聖神の照明とを以て暗黑の力を破るべく、恐るべき場所を通過すべく、暗黑の海とすべて焼盡さゞる所なき火の海とを渡らん。

十四、眞實に人に行はるゝ心靈上の奥秘はかくの如きものにして、人は生命の約束に入らんを盡力し、死の國より救はれ神より聘質をうけて、聖神に與るものとならん。其後靈魂は敵より免れ、神の力を以て慘憺たる海を渡り、これより先に事へたる諸敵が其目前に於て亡ぶるを見て、得もいはれざる喜びを以てよろこばん、而して神の頌揚慰撫する所となりて、主に於て安息せん。其時靈魂が己れにうけたる神は竭蝎を以て、即體を以て、線琴を以て、即靈魂を以て、その有言の絃により、即最精緻なる意念により、神の恩寵の鳴響を以て新なる歌を神に歌ひ、生活を施すハリストに讃美をさゝげん。けだし呼吸は笛管を通り聲を發する如く、聖神も聖にして神通を得たる人の清き心に於て讃頌々美し、神に祈禱していはん、曰く「光榮は靈魂をフラオンの苦役より救ひ給ひし者に歸し、かれを猶此世にある間に永生の國にみちびき給ふ者に歸す」と。

十五、無言なる動物は律法により祭に献げられしかど、もし彼は屠られざるときは、其献納は善くうけられざりき。今ももし罪は屠られずんば、献納は神によろこばれずして、眞實なる献納とならざるなり。民のメルラに來りしや、かしこにありし泉は苦くして、飲に適せざる水を生せり。ゆゑに神は惑へるモイセイに命じて、苦き水に木を投せしめたるに、その投するや、水は直に甘くなり、苦味をうしなひ、神の民の爲に飲に適する甘美なるものとなりき。蛇の酒を飲み、蛇の苦き性をうけて罪あるものとなりたる靈魂もかくの如く苦し。ゆゑに神はその苦き心の泉に生命の水を入れ給ふ。されば靈魂は其苦味を脱し、ハリストスの神を以て鎔解せられて樂しま

ん、かくの如くして主宰に事ふる爲に大に必要なるものとなりて使用せられん、何となれば肉身を被むりたる神となるによる。光榮は我等が苦きを甘きに變じ、神の善良に變じ給ひし者に歸す。生命の樹を入れられざる者は禍なる哉。彼は何等の滿良なる變化もおのれに受くるあたはざるべし。

十六、モイセイの杖は二樣にあらはれたり、敵のためには噛み殺す蛇の如くあらはれたれど、イズライリ人の爲には凭るべき杖としてあらはれたり。かくの如く眞實なる十字架の木即ハリストスは諸敵の爲又凶惡の諸神の爲には死なれども、我等の靈魂のためには杖たり倚賴すべき柱石たり、又生命たり、而して靈魂はこれに安んずるなり。此等の眞實なる實體の象と影とはいにしへのすべてのものにこれありきゲだし舊約の奉神禮も今の奉神禮の影と象となればなり。されば割禮も幕屋も、約櫃も、器物も、「マンナ」も、神位も、香も、洗淨も、すべてイズライリ人とモイセイの律法と諸預言者とにありし所のものは皆此の靈魂の爲にして、神の像により造られしも、苦役の軛下におちいり、慘憺たる暗黑の國に投せられたるものゝ爲なりき。

十七、神は靈魂と親與を爲さんを欲し、王の新婦たらしめんが爲に自からかれを支度し、かれを汚穢より清め、其汚名と耻辱とを洗ひ雪ぎて清明なるものとなし、死より蘇生し、挫折を醫し、其敵を滅絶して、和睦を行ひ給ふ。彼は受造物たるも王の子の新婦たるに備へらるゝなり。神は彼をして其の自己の齡に成長せしめ、これを廣濶にし、これを高尚にして、無限無量の成長に達せしめ、無玷にして神に應ずる新婦となるに至らしめざらん間は、その自己の力を以て漸々に變化して彼をうけんとす。彼が神に對する愛の完全なる量をうくるに至らざらん間は、先づ自から彼を生みて、自から彼を成長せしむ、何となれば彼は自から完全なる新郎として、彼れ完全なる新婦をも婚姻の聖なる奧密なる、及び清潔なる親與にうけんとすればなり。其時彼は新郎と共に限りなき世に王たらん。アミン。

第四十八　講話

神における完全なる信仰。

一、主は其門徒を完全なる信仰に上せんと欲して、福音經に左の如くいへり、少なき事に於て忠ならざる者は多き事に於ても忠ならず、されども少なき事に於て忠なる者は多き事に於ても忠なり」ルカ十六の十。少なき事とは何を謂ふか。また多き

事とは何を謂ふか。少なき事とはこれ即此世の約束にして、主を信ずる者に給せんことを主の約し給ひしすべてのものを謂ふ、例へば食物、衣服及び其他身體の安息の爲、或は健康の爲になるもの、及びこれに類するものにして、此事に就ては主に希望依賴して全く虛るべからざるを命じたまひき、何故なれば主に助を乞ふ者を主はすべてに於て虛り給へばなり。さて多き者とはこれ即永遠不朽なる世の賜物にして、こは主を信ずる者にあたへんことを約したまひしものなれば、信者は不斷に此等の爲に虛りて、これを主に願はざるべからず、何となれば左の如く誡命し給へばなり、曰く『汝等は先づ神の國と其義とを求めよ、然らば此等の者は皆爾等に加はらん』（マトフェイ六の三十三）。さてかくの如く誡命したまひしは、我等もし此の少なきものに懸念せずして、來世永遠なるものを虛るならば、此の少なきものをも給したまはんことを約したる神を信ずるや否は此の少なき暫時なるものを以て試みらるゝによる。

二、もし上に言ふ所のものに關して健全の信仰を保つならば、其時人が不朽なるものを信じて、永遠の幸福を實に尋ぬることは明白なるべし。けだし眞理の言に服從する者はいかやうに神を信じて己を神に托するか、果して神の言と眞實に合致するか、或は己の稱義と己の信仰に自負するにより、たゞ自から己を信者と思ふのみなるかを或は自から試みて己れを審議し、或は神的人々の審議と試みとに付することと肝要なり。人はおの〳〵少なき事に於て、即此世暫時のものに於て忠なるや否を自から試み且證するを得るなり。如何に試み且證するか。宜しく聽くべし。汝が己を信者と名づくるは天國を賜はるによるか、上より生れて神の子となり、パリストスの同嗣者となるによるか、パリストスと共に永世王となり、得もいはれざる光の中にありて、無限にして數ふべからざる世に福樂を受ること神自からの如くならんとするによるか。汝は必ずいはん『然り、これか爲の故に我は世に遣ざかりて己を主に托せり』と。

三、然らば汝は己を試みよ、地上の虛と身體の食と衣と其他の必要物の事及び居室の事に關する大なる費心は汝を占領せざるか、また己を全く虛るなかれと汝に命ぜられたる其己の爲に汝は自己の力を以て強て求めざるか、且虛らざるか。けだしもし不死なる、永遠なる、恒存充足するものを受くべきを信ずるならば、神が不信なる人々にも、野獸にも、禽鳥にもわたへ給ふ暫時なる、地に屬するものにつきては、主は此を汝に給することはいよ〳〵信ずべきにあらずや、けだし此事を全く虛る

べからざるを誡命していへり、汝等何を食ひ或は何を飲み或は何を衣んと慮るなかれ『蓋これみな異邦人の求むる所なり』と（マトフェイ六の三十一、三十二）されどもし汝に猶此事の慮ありて、汝は己を主の言に全く托せずんば、知るべし汝は今に至るまで永遠の幸福、即天國をうくるを信せざるのみならず、少なきものと朽つるものとにさへ猶忠ならざるをあらはして、たゞ己を信者と思ふのみなるを。且それ身體は衣服より貴き如く、靈魂は身體より貴し。故に汝の靈魂は永久にして人々の癒すあたはざる創痍、即耻づべき情慾の癒をハリストスより受くべきを汝は信ずるか、けだし主の此世に來りたまひしは、忠なる靈魂が獨一眞實の醫と癒者とにより、難治の情慾をいやして、罪なる癩の汚穢を清めんがためなるによる。

四、汝は言はん『疑なく信ず、ゆゑに此事に堅く立たん、我が希望は、かくの如し』と。然ちば己を試みて察すべし、肉體の苦みは時として汝を此世の醫に引請して、汝が確信したるハリストスをば汝をいやすあたはざる者の如く思ふことわらざるか、見よ汝はいまだ眞實當然に信せず、自から己を欺きて己をたゞ信者と思ふのみなるをしかれどもし汝は不死なる靈魂の永久にしていやす能はざる創痍と異なる病とがハリストスを以ていやさるゝを信ずるならば、身體の一時の薄弱と病とをもハリストスはいやすの力あるを確信すべく、醫の助と勤勞とをかろんじて、獨り彼に趨り就かん。けだし靈魂をつくりし者は身體をも造りて、不死なる靈魂をいやす者は身體をも一時の苦みと病とよりいやすべければなり。

五、さりながら顧ふに汝は我につげて左の如くいはん『神は身體をいやすが爲に地の草と藥物とをあたへ、身體の病の爲には醫の助をそなへて、地より取られたる身體が地に屬する種々の生產物を以ていやされんやうによく處理したまへり』と。是れ如此なることは我も同意なり。さりながら善く愼思して確知すべし、神はその大なる無限の仁愛と仁慈とにより、誰に此をあたへ、誰が爲に特別なる照看を爲すか、人はそのあたへられたる誡命に背き、譴怒に觸れて、樂園の樂みより此世に放逐せられしこと、さながら四虜となりて不名譽をかうむりし如く、又は或る採鑛場に入れられし如くにして、闇黑の權に服從し、情慾の誘により不信者となりて、先には苦難も疾病も知らざりしに拘らず、終に肉體の苦難と疾病とにおちいりき。されば彼より生れたる惡くの人類も彼と同じく苦難におちいりしことは顯然たるなり。

六、ゆゑに神は病弱なる者と不信者とに於ける己の照看を此事に於てあらはし、大なる仁慈により、罪ある人間の全く亡びんことを欲し給はざりき。身體を撫恤し

且これを療する爲又其必要に充つる爲に、世の人々とすべて外部に屬する者に醫療の方法をあたへて、彼等に此方法を益用するをゆるし給へり。何となれば彼等は己を未だ全く神にまかす能はざれば なり。然れども修士よ汝はハリストスに來りし者、神の子となりて、上より神によりて生れんとの望を起し、元始の無慾の人よりも更に高尚に更に大なる約束、即主の來ることの許可をうけて、世の爲に遠ざかりし者は信仰も概念も生活も世の悪くの人に對して或る新しき非常なるものを求めざるべからざるなり。光榮は父と子と聖神に世々に歸す。アミン。

第四十九　講話

人もし他の世の福樂に與かるを得ずんば、此の世の快樂を辞する充分の理由あらず。

一、もし誰か主のために自己に屬するものを棄て、此世を絶ち、世の快樂と財産と父と母とを辭し、自から己を十字架に釘して、旅人となり、貧うして一物も有せざる者となれども、世の安寧に代へて神聖なる慰安をおのれに得ず、一時の喜樂に代へて精神上の樂みを己の心に感せず、腐るべき衣服に代へて神聖なる光の衣服を内部の人に衣ず、先の肉體の親與に代へて天に屬する者との親與を己の心に疑なく認識せず、此世の見ゆる喜びに代へて神の喜びと天の恩寵の慰めとを己の内部に有するあらずして、錄する所の如く『主の榮のあらはるゝとき』(聖詠十六の十五)神聖なる滿足を心にうけずんば、一言にてこれを言はゞ、此の暫時の喜樂に代へて、望む所の不朽なる樂みを今も猶己の心に得ずんば、彼は味を失ひし鹽たり、彼は悪くの人類よりも更に憐むべきものにして、此處にあるものをも棄はれ、神聖なるものをも樂まずして、その内部の人は神の作用によりて神聖なる奥義を認識せざらん。

二、人の世に遠ざかるは使徒の言へる如く、其靈魂が他の世界と世とに思を以て移住せん爲なり、けだしいへり『我等の居處は天にあり』(フィリッピ三の二十)、またいへり『肉にありて行へども、肉に循ひて戰はず』(コリンフ後十の三)。ゆゑに此世を辭したる者は、今も猶神の助けにより、思を以て他の世にうつり、彼處に居住して、靈界の幸福をよろこびたのしみ、内部の人に於ては神により生るゝの緊要なるを堅く信せざるべからざるなり、主のいひし如し、曰く『我を信せし者は死より生命に移れり』(イオアン五の廿四)。けだし顯然たる死の外に他の死あり、また顯然たる生命の外に他

の生命あり。聖書にいへり、「樂を縱にする者は生くるとも死せるなり」(テモテイ前五の六)、またいへり、『死者に其死者を葬むるを任せよ』(ルカ九の六十)、『主よ汝を讃め揚ぐるは死者に非ず、我等生ける者は汝を崇め讃む』(聖詠百十三の二十五、二十六)。

三、太陽は地の上に昇るならば、その悉くの光線は地の上にあらん、されど彼は西にあるときは、其家に退きて其悉くの光線を後に集中せん、かくの如く上より神を以て更生せられざる靈魂も其意念はすべて地の上にありて、其思は地の境界に及ぶのみなれど、もし天より生れて神によるの親與をうくるを賜はるときは、その悉くの意念を一に集中して、これをおのれに保留しつゝ、主に手造にあらざる天の住所に達し、そのすべての意念は神聖なる大氣に入りて、天に屬する清く聖なるものとならん、何となれば靈魂は惡君、即世の神の暗黑なる獄舍を脫して、清く神聖なる意念をうくればなり、けだし神は人を神聖なる性に與かる者と爲し給ふなり。

四、ゆゑにすべて浮世の事に遠ざかり、熱心に祈禱を務むるならば、此勞は速に安心に滿たさるゝを認むべく、小なる憂愁と勞苦とは至大の喜びと慰めとにみちみたさるゝを認識せん。況や汝の體も靈も畢生の間毎時毎刻如此の善のために費さるゝならば、これを何とかいはん。吁、得もいはれざる神の仁心なる哉。神は報酬なしに己を信者に賜ひ、須臾の間に人は神の嗣業者となり、神は人の體に居りて、主は美なる住所を、即人を己れに有するなり。神が人の居住の爲に天と地とを造りし如く、己の居住の爲に人の體と靈とをつくりしは、其體中に住みてこれに安んずること、其家に在る如くして、其像によりて造りし至愛なる靈魂を美なる新婦として有せん爲なり。使徒はいへり、『蓋我爾等を一の夫に聘定せり、淨き處女としてハリストスに獻げん爲なり』(コリンフ後十一の二)、またいへり、『我等は彼の家たるなり』(エウレイ三の六)。それ夫は勉勵してもろ〳〵の幸福を其家に集めん、かくの如く主も其家に、即靈と體とに天に屬する神の富を集め、かつ積まん。智者は其智を以てするも聰明なる者は其聰明を以てするも、心中の幾微を悟ることあたはず、或は靈魂の如何なるものたるを言ふこと能はざりき。靈魂に於けるの理解と確たる認識とはたゞ聖神の助によりて開かるべく、且求め得らるゝなり。さりながら此の時に於て其如何なるを研究し、思考し、且理會すべく、而して聽くべし。主は神なれども靈魂は神に非ず、彼は主なれども靈魂は僕なり、彼は造物主なれども、靈魂は受造物なり、彼は造成者なれども、靈魂は造成物なり、彼の性と靈魂の性とに何等の通有なるものもあるなうして、たゞ其の無限なる、得もいはれざる、及び悟るあたはざる愛により、且その

善心によりて、彼は此の造成物に、此の聰明なる受造物に、此の自から選びたる尊敬すべき己の業に居らんことを善みんせり、これ聖書にいふ如く、「我等其の造りし物の初實の果とならんためなり」（イアコフ一の十八）我等彼の智となり、親與となり、彼自己の居住となり、彼自己の淨き新婦とならんためなり。

五、けだし我等に如此の幸福をそなへられ、如此の約束をあたへられて、かくの如き主の恩惠は我等にこれあるにより、子よ、永生に急ぎて、主に悅ばるゝことに己を全く捧ぐるを怠らざるべく、又遷延せざるべし。ゆゑに主に祈願せん、その神聖なる力を以て我等を耻づべき情慾の暗獄より救ひ、其自己の像の爲、又其造成のために償をなし、これに光明を回復して、靈魂を健全潔淨なるものとなさんためなり、かくの如くして我等は父と子と聖神を世々に讃揚して、神の親與をうけん。アミン。

第五十　講話

神はその諸聖人に於て奇跡を行ふ。

一、誰か天門を閉ざしたるか、イリヤか、或はイリヤの中に居りて雨に命じたまひし神か。思ふに天の有權者は當時自からイリヤの靈に坐して、神の言は彼の舌を以て雨に地に降るを禁せしなるべし、然るに彼は再び言を發するや、天門開けて雨降れり。モイセイもかくの如し、杖を置きしに、杖は蛇となりしが、再び言を發するや、蛇は杖となれり。彼は爐より灰を取りてこれを散せしに、痂となれり。更にこれに命せしに、蝨と蟾蜍とあらはれたり。さりながら人性は此を成し得るか。モイセイ海につげたるに、海は兩分し、川につげたるに川は血に變せり。天の能力がモイセイの心に居り、彼を以て此の休徵を行ひしこと顯然たるなり。

二、いかんしてダヴィドは武器なしに彼の巨人と戰ふを得たりしか。ダヴィドの石を異族人に投せしは、ダヴィドの手を借りて神の手は石を發し、神の力は自から勝を奏して敵を慴かしたるなり、けだし身體の無力なるダヴィドはこれを爲す能はざりしなり。イエスス、ナヴィンはイエリホンに近づきて城を圍むこと七日なりしも、己の力を以ては如何ともするあたはざりき、さりながら神が命じ給ひしや、城壁はおのづから陷落せり。また彼の約地に入りしとき、主は彼に告げていへり、行きて戰に臨めと。さりながらイエススは對へていへり、主は活く、汝なくんば我行かずと。また戰の時に當り太陽に二時間止まるを命じたるは誰なるか、彼の一天性なるか或は彼に居

る力なるか。またモイセイがアマリクと戰ひしとき、手を天に神に擧ぐるや、アマリクを蹂躙したれども、手を垂るゝや、アマリク勝を得たりき。

三、さて汝は此をきゝて其智を遠きに行かしむるなかれ。これ眞實なる事件の象たり、又影子たるにより、これをおのれに應用すべし。汝も其智の實と意念とを天に擧げて、主に附くを願ふときは、サタナは汝の意念によりて貶黜せらるべし。されば

イエリホンの城壘が神の力により破壞せられし如く、今も汝の智の爲に途を杜絶する惡習の城壘とサタナの都と汝の敵とは神の力を以て滅さるべし。かくの如く神の力は法下の影に於てさへ不斷義人等に存在して、顯然たる奇跡を行はしめ、神の恩寵は彼等の內部に居れり。且神は預言者等にも作用し、彼等が心中に於て預言し且語るに助けて、要用のありしときは世に大事を告げしめたり。けだし預言者は常に語りしにあらずして、彼等に居る神がこれを欲したるとき語れり。さりながら力は常に彼等に存在せり。

四、しかれども律法の影に於てさへ聖神は如此の量を以て注がるゝならば、いはんや新約に於て、十字架の後、パリストスの來りし後に於てをや。神を注がるゝと神を以て醉はしめらるゝとは彼處にも成りぬ。けだしいふあり『われ我が神を一切の人に注がん』『イオイリ二の二十八』これ主の自からいひ給ひしものと同じきを意味す、曰く『我汝等と偕にして世の終まで在るなり』『マトフェイ二十八の二十』『蓋凡そ求むる者は得ん』。またいふあり『然らば汝等惡しき者なるも尙善き賜を其子に與ふるを知る、況や天に在す汝等の父は之に求むる者に聖神を與へざらんや』『ルカ十一の十三』使徒の言によるに『能に於てし、多くの保證に於てするなり』『フェサロニカ前一の五』といふ。ゆゑに適當にこれを得んには勞と大なる盡力と忍耐と神を愛するとを以てすべくして、錄していふ如く靈の感覺が『善惡を辨ふるを』『ヱウレイ五の十四』最早習ひたる時に得らるゝなり、即凶惡の狡猾、奸計、多樣の攻擊と埋伏とに就ても、又神の働と力とにより種々の賜と種々樣々なる助とに就ても、これを辨ふるを習ひたるときに得らるゝなり。けだし內部の人を汚すに情慾を以てする有罪なる痂をおのれに認識すれども、人の弱きを堅め、中心の喜を以て靈魂を新にする眞實の聖神よりする助をおのれに認識せざる者は、神の恩寵と神の平安との種々多樣なる攝理を知るの認識を有せず、辨別の能力をうけずして存せん。されど又一方より見れば主の助をかうむりて、すでに心神の喜びと天上の賜を有する者も、もし己を以て最早罪に屬せずと思ふならば、これ欺瞞におちいりて、惡習の巧緻なるを辨へ

す、嬰兒の齡の成長するとハリストスに於て成全するを得るとは漸を以て成るべきを理解せずして、自から誘はるゝなり、何となれば聖なる神聖なる神を以てあたへらるゝ助あるときは、これと共に信仰も成長して、大に上進するに至るべく、すべて惡なる思念の支柱は漸々に傾き始めて全滅に至るべければなり。

五、ゆゑに我等はおの〳〵寶を此の瓦器の中に見付けたるか、神の紫衣を衣たるか、王を見たるか、王に近侍する者となりて安んじたるか、或は猶外部の室に於て勤事するかを研究せざるべからざるなり。けだし靈魂には股多く其深さも大にして、これに輸入せる罪は其の惡くの組織と心の牧野とを最早占領したればなり。其後人が恩寵を尋ぬるとき、恩寵は人に來りて或は靈魂の二の組織を占領するあらん。然れども恩寵を以て慰めらるゝ無經驗なる者はその來りし恩寵が靈魂のすべての組織を占領して罪は根絶せられたりと思ふ。さりながら靈魂は太半罪の權中にありて、恩寵の下にあるものは一部分のみなり。然るに人は欺かれて此を知らず。

六、余は汝等の誠實なる愛によりて書すべき所のものを多く有すれども、怜悧の人々たる汝等に此の少許のものを以て端緒を與ふるは、汝等實行して言の旨趣を研究し、更にいよ〳〵主に於て智なる者となりて、其心の正直を主の恩寵と眞理の力とを以て增加せんためなり、また全く恐るゝなうして己の救を捉へ、すべての好奇心と敵の惡くの詭計とより免れて、我等が主イイススハリストスの審判の日に躓かざる者、及ひ定罪せられざる者としてあらはるゝを賜はらん爲なり。彼に光榮と權柄は父及び生活を施す彼の神と共に今も何時も世々限り無きに歸す。アミン。

克肖なる我等が父埃及マカリイの書翰

完全にして聖にせられたる人の爲に要用なるはたゞ自から神に居らんことのみならず、神も彼に居らんことなるは、汝が善智の明に知る所なるべし、主のいひ給ふごとし、曰く『我に居り、我も彼に居る』(イオアン十五の五)。されば神の人は神聖なる幕屋に居り、此の幕屋を至淨なる神性の聖なる山に建てざるべからず、これ暗黒なる情慾の力の占領するをゆるさゞる者の光榮を曉るのみならず、其擁する所とならんためなり。けだし適當なる者には其成聖とその彼等に屬する無慾との爲に救世主は住み給ふ、これ主の自から無慾なる如く主をうけたる者等をも無慾なる者となして如何なる風にも最早動亂漂蕩せられざる者となさん爲なり

しかれども或者は自からハリストスの機密に遠ざかるのみならず、『濁れる敗壞を以て其親友を誘ひ』(アバクム二の十五)『神を識るべきものゝ彼等に明にあらはるゝ』にも拘はらず、神の眞理を不義の中に隱さんとす。けだし『其思念は虛しくなり』『其無智の心は昧みしにより』(ロマ一の十八至二十二)、彼等は說を爲していへり、耻づべき

情慾は天性自然にして神より我等に賦與せられたるものなりと、是れ即敗壞の樂み、不正なる忿怒神の爲に發するに非ざる不適當なる怒及び凡そ此に類するものをいふなり。

ゆゑに彼等と其の言ふ所とは眞理に違ふものとしてこれを棄て、我等を造りし者を以て我等にあたへられたる自由自主の權を承認めん、善きことに進むも惡きことを止むるも我等に係らんためなり。けだし眞實なる審判者は、もし自から情慾の造物主ならば、これに占領せらるゝ我等を罰せざるべし。祈る此敬に離れ遠ざかりて、これを思にも生せしめざらんことを。けだし此の曖昧にして愚なる意見は、凡の敬虔なる裁智の爲に忌み嫌ふべきものとす。神は清くして最美しき天地萬物の造成者なることは、世界創造の際に聖神の告げ給ひし如し、けだしいへり『神は其造りたる諸の物を見たまへるに甚だ善かりき』(創世記一の三十一)されば(イエレミヤは恥づべき情慾のために哀み、かつ惑ふていへり『主の命じ給ふにあらずば、誰か事を述べんに、その事すなはち成らんや、禍も福も至高者の口より出づるにあらずや』(イエレミヤ哀歌三の三十六―三十八)。故に福音經に聰明なる天軍は、主に問ふていへり『主よ爾は美種を爾の田に播きたるに非ずや、然らば何に由りて此の稗あるか』(マトフェイ十三の二十七)。また他の所に救世主は自から彼等の事をいへり『凡そ我が天の父の植ざりし植物は其根絶されん』と(マトフェイ十五の十三)。しかれどもすべて神の植ゑしものゝ美なることは、ハリストスこれをいひ、パウェルもこれを證せり。曰く『蓋神の惡くの造物は善なり』(テモフェイ前四の四)。故に知るべし我等の中にかくるゝ情慾は本來我等に屬するに非ずして、他に屬するものなるを。けだし言ふあり『我が隱なる咎より我を淨め給へ、故犯より爾の僕を止めよ』(聖詠十八の十三、十四)。またいふあり『外人は起ちて我を攻め、强き者は我が靈を覓む』(同上五十三の五)。またいふあり『主よ我と爭ふ者と爭ひ、我と戰ふ者と戰ひ給へ』(同上三十四の一)。それ此の隱なるもの或は此の爭ふ者或は戰ふ者或は此の故犯とはこれハリストスの德行に逆ふ凶惡なる諸神を示すにあらずして何ぞや。

律法も內部の人の潔淨のことを公然と呼ぶを精密に吟味せよ。いふあり『汝の主神の名を妄に口にあぐべからず、けだし主は己の名を妄りに口にあぐる者の心を清めざるべし』(復傳律令五の十一)。ゆゑに使徒も勸めて明かにいへり『己を凡の肉と神との汚より潔くせよ』(コリンフ後七の一)。また他の處にもいふ『心は濺がれて惡しき意念を去れ』(エゥレイ十の廿二)。又いふ『汝等の神と靈と體とは全うし護られて疵な

からん』(ソルン前五の廿三)、又いふ『疵なき神の子とならん爲なり』(フィリッピ二の十五)。ゆゑに凡て子たる位地を賜はらんことを願ふ者は疵なき體を有するのみならず、疵なき靈をも有すること、左の如くいひし者の如くならざるべからず『願くは我が心爾の律に玷なからん、我が羞を得ざらん爲なり』(聖詠百十八の八十)。けだし律法の下に居る者は、たゞ肉體の稱義を遂げて、外部の潔淨を守れども、恩寵の下に居る者は、成聖により內部の平安を願ふて、左の如くいひし者にしたがふなり、曰く『もし汝等の義は學士及びファリセイ等の義に勝らずば爾等天國に入るを得ず』(マトフェイ五の二十)。何となればファリセイ等は智を旨まして、杯と皿の外を潔むればなり(マトフェイ二十三の二十五)。今も彼等に似たる新ファリセイは、未熟なる才智を以て外部の人を粉飾し、自から己を義とせんとす、しかれども聖神は彼等の神と共に彼等が神の子たるを證すること、使徒と共に證する如くせざるべし、言ふあり『此の神自から我等の神と共に我等が神の子たるを證す』(ロマ八の十六)。彼等は內部の人の聖德に成長するを自己にあらはさんことを欲せずして、たゞ肉體上の功勞に信任し『王の女の光榮は皆內部にある』(聖詠四十四の十四)を知らざるなり。我等各人は恰も心中の無花果樹の如し、主の尋ぬるは內部の果にありて、枝葉の飾にあるにあらざるなり(マトフェイ二十一の十九)。

故に恥づべき情慾を辨護して、天然自然なるものとし、偶然に人に入りしにあらずといふ者は『神の眞實を己の僞に』易ふるなり(ロマ一の二十五)。何となれば我が先にいひし如く無玷純潔なる者は其像を己に肖たるものとなしたりしが『惡鬼の猜みにより死は世に入りたればなり』(智慧書二の廿四)。ゆゑに人間は不法によりて孕まれ、罪に於て生れて(聖詠五十の七)母腹より離れ遠ざかる者となり、母胎より迷に居りて、アダムより以後ハリストスの來るに至るまで罪が王となりしにより神の羔は憐を垂れて來り給へり、これ先づ强き者を縛し、其後鹵獲せられたる器物を奪ひ回して、己の力を以て世の罪を取らん爲なり、言ふあり『擄者を擄にす』と、又いふ『獻物をうく』と(聖詠六十七の十九)。

我等は俘虜たるをまぬかれ『土に屬する者の狀を衣たる如く、天に屬する者の狀』(コリンフ前十五の四十九)を衣『我等の肢體を義の僕となして、成聖に委ぬること罪に委ねし如くせんことを』(ロマ六の十九)。我等は信ず、われら躓づかずして光の中を行く者は、神の奇跡を認めんを要するを、錄して言ふ所の如し、曰く『我が目を啓き給へ、然せば我爾が律法の奇跡を觀ん』(聖詠百十八の十九)。けだし光の

中を行く者は五感に躓きを來さゞる如く、完全なる成聖に居る者も心に奸計を思はず、惡しく慮らざるなり。けだし『光は暗と何の交ることのあらん、神の殿は偶像と何の同じきことのあらん』〔コリンフ後六の十五、十六〕故に己を神の殿と認むべく、思の偶像を心中に畫かざらんことを力めよ。けだし靈魂の中に動作する凡ての情慾は偶像なり、故に『勝たるゝ者は勝つ者の奴隷たり』とは最善く言へるなり〔ペトル後二の十九〕。もし我等は肉體の慾に勤むるならば、聖にして無慾なる神につとめざらんこと明なり、何となれば人は『二人の主に事ふるあたはず、神と財とに兼事ふること能はざればなり』〔マトフェイ六の廿四〕。神の殿は聖にして『汚或は皺或は此の如きものを有せず〔エフェス五の廿七〕、『けだし聖神は諂媚を避け、無智者の思念より遠ざかり、教へは奸猾なる靈に入らざるなり』〔智慧書一の四五〕。

ゆゑに我等が律法はすべて神の指を以て心にしるさるゝものにて、墨を以てするにあらず、神の神を以てする〔コリンフ後三の三〕ものなるを確信して、『我は眞實なり』〔イオアン十四の七〕との給ひし立法者の眞實をうけん、彼は心の割禮を行ひ、適當なる者の裁智に其仁慈の法をしるすこと、預言者のいへる如し、曰く『われ我が律法を彼等の心に置き、彼等の思にしるさん』〔イエレミヤ三十一の三十三〕。凡そ選ばれたる族と、王たる祭司班と、聖なる人民と、選ばれたる人〔ペトル前二の九〕の中に入らんことを苦心する者は、生活を施す神の効力を便利に己れにうけん。

故にパリストスに於る生活のパリストスと同形なる公正に進むを、縱ひ久しからずと雖も、我等にも賜はらんことを願ひ且祈るべし。けだし如此の靈魂は面の耻〔聖詠四十三の十六〕を脫し、最早汚れたる思に占領せられず、惡者と姦通せずして、疑なく天の新郎と親與をなさん、何となれば自から彼と同形なればなり。彼に對するの愛を以て刺戟せられたる靈魂は望みて絕入らん〔聖詠八十三の一〕。我敢ていふ、成聖を享ることの不朽なる契約により、彼とかくの如く美なる心中秘密の體合を爲すを望まん。如此の靈魂は實に幸福なり、彼は靈神上の愛に勝たれたるものとして、神言に嫁すること當然なり。故に彼は敢て言ふべし、左の如く言ふべし、曰く『我が靈はわが神をたのしまん、そは我に救の衣をきせ、義の外服をまとはせて、新郎が冠をいたゞき、新婦が玉こがねの飾をつくるが如くしたまへばなり』〔イサイヤ六十一の十〕。けだし王は彼の善良を望みて〔聖詠四十四の十二〕、彼をたゞ神の殿と名づくるのみならず、王の女及び皇后と名づくるを賜へり、神の殿と名づくるは聖神の爲に領有せられたるによる、王の女と名づくるは父より光の子たることをうけたるによる、

又皇后と名づくるは獨生者の光榮の神性と配合せしによるなり。けだし本性に於て一たる主は、いかんして人間の救の掘理の爲に多くの名を比喩的に己にうけしか。何故甲處には石（コリンフ前十の四）及び門（イオアン十の七）と名づけ、他處には斧（ルカ十五の一）及び餅と名づけしか（同六の三十五）。石と名づけしは其勢力の動かすべからざると近づくべからざるとによる、門と名づけしは彼によりて永生に入るによる、斧とは彼は惡習の根を絶つによる路とは適當なる者を眞實を識るにみちびくによる、荊蒭の幹とは人心をたのしましむる酒が彼によりて產せらるゝによる、また餅とは有言なる造物の心を堅むるによるなり。しかれどもこれと同じく神言の爲に領有せられたる非難すべからざる靈魂も、固より單純なるものなれど、神的道德に多くの進歩をなすにしたがひて、賜をもうけん。我が此事をいふは新婦の名稱も勿論たゞ三のみにあらずして、更に多かるべきによるなり。

ゆゑに神の聖所に入りて『我等が年少を樂ましむる神に』（聖詠四十二の四、希臘譯文）就かざらん間は、此の勞は我等の面前にあるを知るべし、けだし我等なほ肉體にあるも、主の無欲をたまはり、成聖を遂げんことは、救世主の悅ぶ所にして、其時には敢て左の如くいふを得ん、曰く『我等は肉に在りて行へども、肉に循ひて戰はず、我等が戰の器は肉に屬せず、乃神に由りて壘を破る能あり、我等此を以て諸〳〵の謀と凡そ神の知識に逆ふ高慢とを破る』（コリンフ後十の三至五）故に尙此處に於ても我等は罪なる慾を十字架に釘すること、預言者の祈禱の如くすべし、曰く『我が肉體を爾を畏るゝの畏れに釘す』（聖詠百十八の百二十）、けだし使徒のいはゆる『神の國を嗣ぐあたはざる』（コリンフ前十五の五十）肉と血とは、此の見ゆる體をいふにあらずして、（彼は神の造る所なり）悖逆の子（エフェス二の二）の中に行爲する兇惡の神によりて起さるゝ肉體の念慮を指す、何となれば ハリストスに於ける完全なる苦行者のために『戰は血肉に於てするに非ず、此の暗昧の世君に於てし、兇惡の諸神に於てすればなり』（エフェス六の十二）。

故にもし此の行爲は天性自然の行爲にあらずして、反對なる力の行爲なるを認むるならば、彼等に對してハリストスの全き軍備をおのれにうけ『其の奸計を禦ぐを得べし』（エフェス六の十一）何となれば救世主は『蛇蝎及び悉くの敵の力を踏む』の權を我等に賜ふによる（ルカ十の十九）我等尙肉體に居るも敢て左の如く言ふを得んが爲なり、曰く『もしわが心に不法のあるを見しならば主はわれに聽かざらん』（聖詠六十五の十八）また曰く『我尤なしといへども、彼等は趨せ集まりて武具をそなへ』（同上

五十八の五)と、これ言意は我等は、志す所に進行し、即上より召す所の褒賞に迎向しつゝ、如何なる肉體の慾もあるならして、天に生涯を送ること易からんげだし諸の慾に遠ざかりて敢て左の如く言ふことを得ればなり、曰くたゞに信を守るのみならず、馳すべき程を盡せり(テモフェイ後四の七)。

たゞハリストスを信ずるのみならず、彼と共に苦をうくることも肝要なり、錄して いへる如し、『汝等に賜はりしはたゞ彼を信ずるのみならず、亦彼の爲に苦をうくることなり』(フィリッピ一の廿九)。たゞ神を信ずるのみは地上の事を念ふ者に相應するのみならず、不潔の神にさへ相應するは我が言を俟たざるべし、いへらく『我爾が誰なるを知る、乃ち神の子なり』(マルコ一の廿四、マトフェイ八の廿九)。げだし彼も此もハリストスの十字架の敵なり、彼等が終は滅亡なり、彼等が神は腹なり、彼等が榮とする所は辱なり、彼等は地上の事を念ふ』(フィリッピ三の十八、十九)と、見るか十字架の敵はたゞ背教者の力のみにあらず、地上の事を念ふ者も亦然るを。しかれどもハリストスと共に苦みをうけて共に榮せらるゝことはたゞ此世に於て己を十字架に釘して主の疵を己の體に負ふ者のみ能し得るなり。

哲學を正しく攷究して、靈魂を惡の汚穢より救ふ者は、哲學の目的を精確に知らんこと肝要なり、進行の勞と經過の終とを確知して、高慢と功勞のことを思ふ意思とを全く斥け、聖書の誡命にしたがひ、己の靈魂と生命をすてゝ一の富に注目せん爲なり、即神が凡そ甘んじて苦行を自から任はんと決心したる者を呼びて、其愛する所の者にハリストスを愛したる爲の報賞として定め給ひしものに注目せん爲なり、此の如き苦行の經過に於て彼等に充分の路用を給するはハリストスの十字架なり、されば彼等は此を負ふて、樂みと善なる希望とを以て救世主ハリストスの跡にしたがひ、其摂理を己の爲に生命の法となし、路となさんこと肝要なり、使徒の自から言へる如し、曰く『爾等我に效ふ者となれ、我がハリストスに效ふが如し』(コリンフ前十一の一)又いへ『忍耐を以て我等の前にある馳場を趨りて、我等の信の首及び成全者なるイイスを仰ぎ望むべし、彼は其前に在る喜に易へて辱を意とせず、十字架を忍びて神の寶座の右に坐せり』(エウレイ十二の一、二)。

われらは神の賜を以て自から高ぶり、道德に進むの或る進歩を己の爲に高慢と稱賛の爲の緣由となして、望む所の終りに達せざる先に己の志の撓まざらんが爲、高慢により先になせる勤勞を己の爲に無益となさゞらんが爲及び神の恩寵の我等を引誘する成全に堪へざるものとならざらんが爲に、戰々兢々たらざるべからざ

るなり。故に勤勞に於るの盡力を決して弱むべからず、眼前にある所の苦行を辭すべからず、もし先に何か遂げし所あらんには、それを以て熱心を劃るべからず、乃使徒の如く後を忘れて前に進み（フィリッピ三の十三）成全を求むる者が飽くを知らずして獨り飢渴する所の義の願を有し、勤勞の爲に慮りて心肝を摧かんこと肝要なり。彼等は許約せられたる幸福を距ること猶遠くして、ハリストスの完全なる愛に多く達せざる者なるにより、謙遜なる者となり、恐れに滿てる者とならざるべからず。けだし此愛を切願して、天の約束を仰望する者は、禁食するか、儆醒するか、或は他のいかなる德行に熱心するも、以前の功勞を以て自ら高ぶらざるべく、却て神聖なる望にみたさるゝ彼は己を呼ぶ所の者に間斷なく眼を注ぎて、いくばく奮鬪するも其志す所のものに比ぶれば全く小なりと思ふべし、されば其行により己を神の前に尊敬すべき者とあらはさゞらん間は、勞に勞を加へ、德行に德行を重ぬるも、神の前に適當なる者となれりとの意思を心に懷かずして、此の生命の終に至るまで悉くの盡力を用ひん。けだし行に於て大なる者は神を畏るゝを以て自負を地に擲ちて、心を謙遜し、生活の爲に己を罪し、信じて愛するの度により許約を樂みて、自から勞するの如何を以てせざるは、これぞ哲學の最卓越せる功勞なる。けだし賜は大なるにより、これに相應する勤勞を見出すことあたはざればなり、さりながら信と望とは大ならざるべからずして、これを以て報酬を測るべく、勤勞を以てすべからざるなり。然して信の根本は心神の貧しきと神に對する無量の愛とにあり。

希望の目的に應じ、哲學によりて、生活せんと決心したる者の爲に余は充分にのべたりと思ふ。今又これに加ふるにかくの如き者はいかに互に交際して如何なる勞を愛するを要するかを示すべし、天都に達するに至る迄其進行を協力して成さん爲なり。

此世に於て尊敬すべきと認めらるゝものを斷じて尊ばず、親族を棄て、もろ〳〵地下の榮を棄てゝたゞ天上の尊榮に着眼し、神による兄弟と心神にて結合する者は、世と共に己の靈魂をも棄つること肝要なり。靈魂を棄つとは何に於ても己の旨を求めずして、反つて己の旨を矯正し、院長を以て己の爲に神の言となして、これを益用すること、善良なる舵師の如くし、兄弟社會のすべてを舉げて、同心協力して神の旨の湊に向はしむるにあり。

身體を蔽ふ衣服の外共同より別ちて何も得る所あるべからず、或は己の私有物と名づくべからず。けだしもし誰か何も己に有せずして、自己に關する慮を脫するな

ちば、共同の需用の爲に虚る者となるべく、監督者より命せらるゝものは樂みと希望とを以て熱心に遂行すること、仁心正直なるハリストスの僕の如くなるべくして、兄弟共同の需要の爲にするものに身を委ねんとす。主は此を促し、且此を勸めていへり、汝等の中に首たり大たらんと欲する者は衆人の爲に僕となるべし（マトテオ二十の廿七、廿八）。

故に役事するは人々より報酬をうけんが爲にあらざることゝ、又役事する者に何等の尊敬も榮譽も歸せざることゝ、錄していへる如く伴りてたゞ目前に於てのみ働く諂媚者の如くならず、人々の爲に働くにあらずして主の爲に働くことゝ、狹き路に由りて行くことは肝要なり。主の獨一の軛を甘んじて己の頸に擔ひ、終りに至る迄此を忍耐する者は、樂んで善なる希望を以て終りに赴むかん。ゆゑに己を衆人の屬下たらしめ、兄弟に勤むること負財ある債務者の如くし、衆人の爲の照慮を心に任ひて、愛の本分を遂ぐること肝要なり。

さりながら靈神上の隊に監督たる所の者も己に任せられたる照慮の重きに目在し、信仰に對して害意を懷く凶惡の詭計を論辨し、其監督に適當なる方法を以て闘ふべく、專權のことを想出すべからず。けだし危きは此點にあり。人あり、他を監督して、彼等を天の生活に向はしめんと欲するも、自から此點に注意せず、己を高く思ふて己を滅せり。ゆゑに院長たる者は監督の事に於て他よりも多く勞し、他よりも己を卑く思ひ、己の生活に於て役事の標準を兄弟にあらはし、己に任せられたる監督の權を視て神の委托物の如くせざるべからず、けだし此の如く行爲し親切を以て聖なる隊を形作り、各人に適當なる順序を守らしめんが爲に、各人の需要にしたがひて公に教訓を施すも、私に意中に於ては恩を感ずる僕の當然に守るべき如く、謙遜と信仰とを守るならば、此の如き生活を以ておのれに大なる賞を獲ん。彼等は屬下たる者の爲に虚ること、父より托されたる幼兒に對する善良なる教育者の如くせざるべからず。教育者は兒童の性質に注目して、或者をば打ち、或者をば諭し、或者をば譽め、又或者には他の何事をか施さんも、此を爲すは彼に對する恩愛の爲にあらず、又嫌惡のためにもあらずして、乃ち事に適當なる如くし、小兒の實質の然らしむる如くするは、兒童をして此の生活に於て尊敬すべきものとならしめん爲なり。かくの如く我等も兄弟に對して凡の嫉惡と凡の强情とを脱し、言ふ所を各人の力と傾きとに應せしめんことを要するなり。各人の要求に準じ、良醫の模範に效ひ、療法を用ひて、一者のためには譴責を爲すべく、他者には勸諭を用ふべく、或者をば慰

むべし。げだし醫は病者の苦みにより、或は輕き或は劇しき藥劑を用ひ、治療を要する如何なる者にも難儀と思はしめずして、技術を身體の疵と強さとに適應せしむるなり。しかれども汝を仰望する門徒の靈魂を汝は善く訓導して、其德行を父の前に光るものとしてあらはし、靈魂を父の賜をうくるに堪ふる當然の嗣業者となさんが爲に事を要求に適應せしむべし。もし院長も院長を己が師と認むる者も互に此の如く行爲し、一は喜んで命令に順ひ、他は樂んで兄弟を完全に進歩せしめ『互に禮儀を以て相讓るならば』(ロマ十二の十)地に在りて天使の生活を以て生活せん。汝等の中に如何なる高慢も認められずして、純直と一致と互に僞らざる敬愛とは汝等群集を結合すべし。おの〳〵共に居る所の兄弟より劣るのみならず、悉くの人よりも劣ると自から固く信ずべし。此を知る者は實にハリストスの門徒とならん。げだし『自ら高うする者は卑うせられ、自から卑うする者は高うせられん』(ルカ十八の十四)、またいふ『爾等の中先たらんと欲する者は衆の後となり、衆の役者となるべし』(マルコ九の三十五)蓋人の子の來りしは人を役はんが爲にあらず、乃人に役はれ、且己の生命を與へて衆くの者を贖はんが爲なり』(マトフェイ二十の廿八)。また使徒もいへり『蓋我等の傳ふる所は己に非ず、乃ハリストスイイスス主なり、我等はイイスに縁りて爾等の僕なり』(コリンフ後四の五)。ゆゑに謙遜の効果をも高慢の損害をも知りて、主宰に法るべし。

互の善の爲に互に相愛して、死もいかなる罰も恐るゝことなかれ、乃ち救世主が爾等の中を行きたまひし路に由りて汝等も同く救世主に行き、神を愛し互に相愛して、恰も一體一靈を以てする如く、上よりの召に急ぐべし。何となれば主を愛し且畏るゝは律法の第一、遂成なればなり。ゆゑに爾等各人は或る動かす可らざる堅牢なる基礎の如く、畏と愛とを己の心中に置きて、善良なる行と長久なる祈禱とを以て靈魂を鎖着すること肝要なり、何となれば神に對するの愛は我等に常に單純に生じ、又は自然に生ずるに非ずして、多くの勞と大なる費心の後にハリストスの助けによりて生ずることは智者のいひし如くなればなり。げだしいへるあり『銀の如くこれを探り、秘れたる寶の如くこれを尋ねば、汝は主を畏るゝことを曉り、神を知ることを得べし』(箴言二の四、五)。

然るに神を識るの認識を得て、神を畏るゝの畏を曉りしならば、次者即近者を愛するに進歩せんことは容易かるべし。第一の大なる勞の益々加はる時は、第二は小なるものとして、容易すき勞を以て第一に從はん。しかれども第一の者なくんば、第二

の者も純然なるあたはざるべし。けだし靈を全うし、心を全うして神を愛さゝる者は、兄弟を愛するに心を用ひしむる所以のものに對して愛を遂げざれば、正しく諂媚なくして兄弟を愛するに心を用ふるを得べけんや。かくの如く全靈を神に從はしめず、神を愛するに未だ進ましめざる者は、武裝せざる者として、罪の創製者は惡なる意思を以て彼を礙へて、聖書の誡命は彼の爲に難澁にして、兄弟に勤むるは堪へ難き事の如く思はしめ、或は彼をして己とひとしき僕に役事すとの高慢驕傲に至らしめ、彼をして主の誡命を行ふにより天に大なる者なりと自信せしめて、彼をたやすく占領せん。

しかれども是れ小なる過にあらず、何となれば忠順勵精なる僕は其忠順のことの審判を主宰に信任すること肝要にして、主宰に代り、己を以て自己の行の稱讃を書定むる審判者と爲すべきにあらざればなり。けだしもし眞實なる審判者をしりぞけて、自から審判者となり、彼の審判に先だち稱讃を己に歸して、自負に充ち滿たさるゝならば、彼處に於て賞を有すべからざらん。パワエルの言ふ所によるに、神の神が『我等の神と共に證して』〔ロマ八の十六〕我等の行は我等の審判にて估價せられざらんこと要用なり。けだし言ふあり、『自から譽むる者は嘉しとせらるゝにあらず、即ち主の譽むる所の者なり』〔コリンフ後十の十八〕。しかれども神の審判を待たずして、反つてこれに先んずる者は、是れその自己の勢を以て兄弟より尊敬を求め、不信者に屬する所のことを爲して、人間の榮譽を切願するなり。けだし天上の榮譽に代へて人間の榮譽を追ふ者は不信者なり、或處に於て主が自らの給へるごとし、曰く『爾等互に榮を相受け獨一の神よりする榮を求めずして豈信ずるを得んや』〔イオアン五の四十四〕。思ふに彼等は杯皿の外を潔めて、內は滿つるにもろ〳〵の惡を以てする者に類するなり〔マトフェイ二十三の廿五〕。

ゆゑに愼めよ、汝等には此の如きの事あらずして、靈魂を上に向け、主の意を悅ばせんとの一念を有して、天のことの記憶をうしなはず、此世の尊敬をうけざらん爲なり。かくの如く道德上に於ける己の苦行を聲言さずして進行すべし、これ彼の地上の尊敬を希ふ望を暗に勸め入れ、小なるものを尋出して、此を以て我等が才智を捉へ、人をして眞實なるものに從事するより虛妄にして諂媚をみつるものに眩めんとする所の者が向上に專らなる靈魂を捉ふるの時も近づくの便利も全く尋得ずして、滅亡し、死者となりて終らん爲なり。けだし邪惡の成遂げずして休止するは魔鬼の爲に死なるによる。

されば汝等に神を愛するの愛あるときは、其他のことも必ずこれに從はんたとへば兄弟の愛と、温柔と、僞善ならざること、祈禱の續くこと、及びこれに盡力すること、一言を以てこれを言へばすべての德行は必ずこれに從はん。しかれども此等の德は大なるにより、これを求むる爲には亦大なる勤勞なかるべからずして、其勤勞は表示の爲にあらずして、秘密を知る主を悅ばしめんが爲、及び我等が常に注目する主を悅ばしめんが爲に企つる所のものなるべし。靈魂の內部を研究し、敬虔なる思を以てこれを保護せんこと要用なり、敵がこれに近づくの徑路を得、或は惡を謀るの機會を求めざらん爲なり。衰弱せる靈魂の成分を練習して、善者と惡者とを識別するに昇らしむること要用なり。しかれども靈魂を練ることは神に從ひて行く才智の能くする所にして、彼は己と共に凡の靈魂を神に移し、神を愛すると、道德の神秘なる通曉と、誡命の實行とを以て腐敗せるものを療して、勇毅なるものと配合せしむべし。

けだし靈魂の爲に唯一の保護と療法とは、是即ち愛を以て神を記憶し、善なる意見を常に持するにあるにより、如此の勉强を放下すべからず、或は食ふか、或は飲むか、或は何事を爲すか、或は言ふか、すべて我等にかゝる所のものは神の榮の爲にこれを爲して、我等自己の榮の爲にせざるべく、我等が生活はいかなる汚穢或は惡者の奸計によるの不潔を有せざるべし。然のみならず誡命を行ふの勞は神を愛する者には便利にして樂しかるべし、何となれば神を愛するは苦行を容易ならしめて、大に希望せしむればなり。

故に惡者は主を畏るゝの畏を心に殄滅し、無法なる樂みと甘美なる餌とを以て主を愛するの愛を弱めんことを百方盡力し、神的武具を着ずして、自己を保護せざらん時、不意に靈魂を襲ふて、我等が勞を敗壞せんことを勉勵し、天の榮に易へて地の榮を暗に我等にすゝめて、妄想に誘はるゝ者の爲に善好なるが如く見ゆるものを以て實に美なるものに換へんとするなり。けだし番兵の油斷を見るや、彼はよく德行の勞に立入り、麥と共に己の稗を播くべき時を選出するなり、即惡言、高慢、虛誇、榮譽の望、爭論及び其他惡の製造物を播くべき時を選出するなり。ゆゑに儆醒して何處にも敵を監視せんこと肝要なり、これその耻づべき奸計を用ふるや、靈魂に觸れざる先にこれを反拒せん爲なり。

アヱリは初生の羊と其脂肪を神に献祭し、カインは地の諸果を献せり、しかれども其果は初實に非ざりしを常に記憶すべし、言ふありアヱリの献祭を神は眷みたま

ひしかど、カインの禮物をばかへりみざりきと〔創世記四の五〕此の傳記は何の益するあるか。これ神の意を悅ばしむるものは、すべて畏と信とを以て爲す所のものにありて、愛なくして爲したる或る高價なるものにあるにあらざるを敎ふるなり。それアウラアムがメルヒセデクより祝福をうけしも他にあらず、初實の果と所有中の首なるものとを神の司祭に獻じたるによるなり。しかれども所有中の首なるもの、及び最善きものと稱するは靈魂と才智とにして、これを以て神に讃榮と祈禱とを乏しからずさゝぐべきを我等に命せらるゝなり、されば主宰に禮物として供ふべきは或る尋常のものにあるに非ずして、心中の最善きものを全幅の愛と熱心とを以て獻ぐるにあり、確言すれば靈魂を全く獻ぐるにあるなり、これ我等は神の恩寵に常にやしなはれ、パリストスの力をうけて救の進行を便利に遂成し、義の要求のいよ〳〵擴廣する時にも己の爲に容易なる且はたのしきものとなさん爲なり、何となれば神は自から我等の熱心なる勞を助け、我等によりて義の行を成就したまへばなり。さて此事につきては我等こゝに言を終へんとす。

されども德行の部分に關係しては、其中何れを最高尙なるものと爲すべきか、他よりも先に何を練習すべきか、又其中何れは第二にして、他の部分はいかに相伴ふか、此事につきては言ふの必要あらず、何となれば彼等は皆互に同敬にして、一は他に依て其練習する所のものを最高顚に昇すによる。されば正直は從順に反響し、從順は信に、信は望に、望は勤に、勤は謙遜に反響して、謙遜は溫柔をおのれにうけてこれを喜悅にみちびき、喜悅は愛に、愛は祈禱にみちびかん。かくの如く一は他にかゝり、彼此互に關係結合して、これを有する者を望む所の最高顚に昇せんとす、これと同じく反對の一方に於ても姦惡は自己の黨與に依て其友を極至の惡に貶せん。されば汝等は常に祈禱に專ならんこと大に肝要なり、何となれば彼は道德の隊に於る隊長の如きものなればなり。祈禱により他の諸の德行を神に請願せん。祈禱を常に務むる者は恰も神と交通する如く、奧密なる聖德と、或る神的効力と、得もいはれざる心情とを以て神と配合せん。けだし彼は尙此世に於ても神をうけて案內者となし、及び救援者となして、主を愛するを以て奮熱するなり、されば祈禱に飽くことを知らずして、至善者を愛するを以て不斷に燃え、熱心を以て靈魂を醉はしめて、願望を以て燒くこと、錄していへる如くなるべし、曰く『我を食ふ者は更に飢ゑ我を飲む者は更に渴す』〔シラフ二十四の二十五〕又他の處にいふ『我が心に樂を滿たせり』聖詠四の八〕且主もいひ給ふ『天國は汝等の裏にあり』〔ルカ十七の二十一〕。

さて我等が裏にありと主のいひ給ひしは如何なる國を指すか。これ實に上より神を以て靈魂にあたへらるゝ樂みをいふにあらずや。けだし此樂みはいはゞ諸聖人の靈魂が待つ所の世に於て嘗みんとする永遠の喜の指示となるべく、聘質となるべし。ゆゑに主は我等を救ふて、靈神上の幸福と其賜とを我等に授け給はんが爲に、神の効力を以て我等をその諸の患難に於て慰むるなり。けだしいふあり『我等の凡の苦難に於て我等を慰む、我等が自から神より慰めらるゝ慰を以て凡の苦難にあるものを慰むるを得ん爲なり』(コリンフ後一の四)またいふ『我が心と我が身は生活の神に馳す』(聖詠八十三の三)。またいふ『我が靈の飽かさるゝこと脂肪を以てするが如し』(聖詠六十二の六)。これみな神を以てあたへらるべき樂みと慰めとを推し量りて形容するなり。

けだし神を愛するの生活を送らんと決心したる者は、己の爲に敬虔のいかなる目的を預想すべきか、彼は即心靈上の清潔と己を善行に勵ますを以て己に神を住ましむることを預想すべきことは明なるにより、汝等はおの〳〵此の目的に準じて、靈魂を預備し、神を愛するを他よりも尤も重んじて、神の旨にしたがひ祈禱と禁食とに己をさゝげ、不斷に祈禱するを勸る者の誰なるを記憶し(コロサイ五の十七)祈禱と主の許約とを守るべし、錄して言へ、ふ如し、曰く刎や神は晝夜彼に呼ぶところのものを援けざらんや『ルカ十八の七』。けだしいふあり『譬を設けて恒に祈禱して倦むべからざることをいへり』と(一)。しかれども熱心なる祈禱は我等に多くのものを賜ふて、神其者をも靈中に住ましむることを、使徒は明に證し、我等を勵まして言へることと左の如し、曰く『常に凡の祈禱と祈願とに於て神を以て禱れ、凡の儆醒忍耐を以て此を務めよ』(エフェス六の十八)。

もし此の兄弟の中己を此部分に献ぐる者あらば、即ち祈禱に献ぐる者あらば、これ彼は最美なる寶の爲に慮るなり、されば彼はたゞ光り輝く榮冠を愛する者に適當なる正しき良心に從ひ、決して意念を以て恣に罪を犯さゞるべく、又已むを得ず意に反する如くして負を返すにあらざるべく、たゞ愛と心靈上の願とに滿足せしめて、その祈禱に常なるの善果を衆人のために明白ならしむるなり。さりながら他の人々もかくの如き者に時間をあたへて、其の祈禱に常なるを喜ばんこと肝要なり、彼等自己に於ても善果に與かる者となり、如此の生活を共に樂むを以てこれが同伴者とならん爲なり。主は自ら祈禱する力を願ふ者に當然にこれをさづけ給ふことを錄する所のごとし、祈禱する者に祈禱をあたふと(イオフ廿二の二)。

ゆゑにかくの如き重要の事たる祈禱を常に務むる者は、更に大に勉勵し、全力を盡して奮闘せんことを主に願ふべく、且これを知らんこと肝要なり、何となれば大なる勝利の賞は大なる勞をも要求して、凶惡はかくの如き苦行者の爲に殊に何處にも詭計を搆へて、勉勵より遠ざからしめんことを盡力し、焦慮してこれを求むれば、なり、これにより身體には睡眠と疲勞とを生じ、靈魂の衰弱憂愁怠慢不勤忍及び其の他の劣弱と惡癖の結果とあらはれて、これがために靈魂は漸々に奪ひ去られ、敵の權中にわたされて亡びん。故に思念は智なる能師の如く祈禱に注意すること肝要にして凶惡の神の攪亂するには少しも意を傾けず、その波の爲に漂はされず、天の湊を直ちに望見して、其無玷なる靈魂をばこれを汝に托して更にこれを汝より要求する神に返還せざるべからず。

聖書に依るに祈禱の時に當りて俯伏する他の人々の例に倣ひ、膝を屈め、地に平伏するをなせども、思は遠く神より離れて漂泊するは宜しきにあらず、又喜ばしきにあらず、意志の如何なる緩慢をも如何なる不眞實の意見をも自から己より遠ざけて身體と共に靈魂を全く祈禱に付與せんことを要するなり。

ゆゑに長老は全く勉勵して、此の如き者に教訓を以て助け、祈禱する者にその預定の目的を達し、靈魂を勉めて潔うするの願を蓄へしめんこと肝要なり。かくの如くならば、心痛する所の者に示さるゝ德行の果は、たゞ大に進歩したる者に益あるのみならず、いまだ幼稚にして學習に必要を有する者にも益ありて、彼等を慰めて目擊する所に傚はしめん。眞誠なる祈禱の果は正直なり、愛なり、謙遜なり、堅固なり、温厚なり、及び凡そ此に類するものにして、祈禱に熱心なる者の勞は、永遠の果に先だち、茲に此の生活の間に於て芽を發せん。祈禱はかくの如きの果を以て飾らるゝなり。しかれどもし此等を有せずんば、勞は無益に歸せん。

されば、たゞ祈禱のみならず、凡て哲學の途も、もし前文にいふ所のものを增々長せしむるならば、これ實に義の途にして、正しき終りにみちびかん。しかれどもし、誰か此等の果をうばゝるゝならば、彼に殘るものはたゞ空名のみにして、彼は婚姻の室に於て必要の時に油をたゝさへざる愚女の如くならん、何となれば靈魂に光を有せず、即德行の果と靈神上の燈とを心に有せざればなり。ゆゑに新郎の來るに先だち德行をうしなひたるために聖書は彼等を愚者と名づくること當然にして、それが爲に此の不幸なる者の爲に天上の室の戸も閉されたり。聖書は童貞に於る勉勵を彼等の功に歸せず、何となれば神の効力は彼等にあらはれざればなり、これ最

適當なり、けだし農夫は葡萄園を耕し、果を獲んが爲に勞苦を忍耐するも、結果のあらはれざらんときは、何の益あらん。聖なる使徒が數へたる平安と愛と其他靈神上恩寵の効果のあらざる時は、禁食と祈禱と儆醒とにより何の得る所あらん。けだし天上の國を愛する者は此等の結果の爲にすべての勞を忍耐し、これを以て神を誘引し、恩寵はこれに加はりて實を結ばしむべし、されば彼は神的恩寵が彼の謙遜と事に費心するとに於て成就せしめたる行爲を欣然として樂しまん。

ゆゑに祈禱、禁食及び其他の諸行の勤勞は、大なる愉快と善なる希望とを以て忍耐して、其勤勞の花と實とは認めて神の行爲と爲さんこと肝要なり。けだしもし誰かこれらを己に屬して、すべてを己の勤勞に歸するならば、その清潔なる結果に易へて彼には高慢と或る僞智とを生長せん。しかれども此等の情は或る腐敗物の如く輕騷なる者の心に生じ、其勤勞を敗壞して、これを亡ぼさん。然らば神の爲に神を望むの望により生活する者は、如何に爲すべきか、道德の苦行を樂しんで務むれども、靈魂を情慾より救ふことと道德の最高尚なる階段に昇りて完全に達するの望みとは、これを神に委頼して、其の仁慈に信任するにあるなり。

かくの如く己を善く理め、箇樣に信任して、恩寵を味ひし者は、敵の凶惡を輕んじ、若無しに進行を遂ぐること、恰も情慾より既に離れ、ハリストスの恩寵によりてこれより救はれしものゝ如くなるべし。それ善なる生活を汗漫にするにより、己の天性に惡なる情慾を入れ、喜んで生命を慾中に送り、たやすくこれに滿足せしむることと恰も或る賦與せられたるもの、又は己の爲に固有なる色慾に滿足せしむる如くする者は、貪慾、嫉妬、詐僞及び其他の反對なる凶惡に屬するものを產出せん、かくの如くハリストスの眞實なる行爲者も信仰と道德に於るの勤勞と得もいはれざる愉快とを以て、神の恩寵の結果により、彼等の爲に超性的なる幸福を刈り諂はずして變らざる信仰と、動かす可らざる平安と、眞實なる仁慈と、凡そ其他のものとをたやすく己に成就すべくして、これにより靈魂はます〳〵己を善くし、敵の凶惡よりも更に强くなりて、崇拜すべき聖なる神の爲に清き住所を己の中に準備し、ハリストスの不死なる平安を彼よりうけ、これにより主と配して、主に附かん。しかれども神の恩寵をうけ、神に附きて、彼と一神となるときは、靈魂は敵の讒誣に勝つがために彼と戰ふことを爲すなくして自己の道德の行を易すく成就するのみならず、救世主の苦を己に感じて、これを樂むこと、世を愛する者が人々よりうくる尊敬と地下の榮譽と權威とをたのしむの比にあらざるは、これ最重要の事なりとす。けだし善

なる生活と、神の賜にしたがひ、其の己に與へられたる恩寵の神的成長の量に達したる「ハリステアニン」の爲に光榮と、慰撫と、如何なる快樂にもまさる最高尚なる樂みとは、これ即ハリストスの爲に嫉まれ、窘逐せらるゝものとなりて、神を信するが爲に諸の侮慢と凌辱の苦をうくるにあり。かくの如き者の爲には、復活と未來の幸福とに分をうけんとする完全なる希望により、凡の凌辱、鞭撻、窘逐及び其他のあらゆる苦みは、たとへ十字架の苦といへども、慰撫、安心となるべく、天の寶の聘質となるべし。けだしいふあり、『人我が爲に爾等を詬り、窘逐し、爾等の事を僞りて諸の惡しき言をいはん時は、爾等福なり、喜び樂めよ、天には爾等の賞多ければなり』〔マトフェイ五の十一、十二〕。また使徒もいへり、『第此のみならず乃亦患難を以て誇となす』〔ロマ五の三〕。また他の處にもいへり、『故に我寧甘んじて我が弱きを誇らん、ハリストスの能の我の内に寓らん爲なり、是を以て我獄に在りて柔弱、凌辱、窮乏を以て喜びとなす、蓋我が弱き時に於て我強し』〔コリンフ後十二の九、十〕。またいへり、『多の忍耐に於て己を神の役者と爲す』〔コリンフ後六の四〕。神の恩寵は自から靈魂を全く圍みて、樂みと力とを住所に滿たし、現在の苦痛の感觸は未來の希望を以て奪去りて、主の苦難を靈魂の爲に甘美なるものと爲すなり。

ゆゑに神の助によりて、かくの如き高尚なる力と榮とに達せんと欲する者は、神が汝等に來りてハリストスと共に闘ぐに適當なる者とならん爲にすべての勞と苦行とを喜んでうけ、自らも陷らずして、他の爲にも罪の原由者とならざらん爲に、決して怠惰に依り弱らず衰へずして生存すべし。しかれども、もし或者は最高尚なる祈禱の効方と事情の要求する勉勵と能力とをいまだ己に有せずして此德行に缺乏するならば、他に從順の德を以てこれを補ふべし、即力に應じて熱心に勤め、勉强して働き、樂んで他の意を喜ばしむるも、報酬として尊敬を得んが爲にあらず、人間の榮譽の爲にあらず、柔弱或は怠慢の爲に勤勞に倦まず、他の身體と他の靈魂につとむる如くせずして、ハリストスの僕につとむる如くし、及び自分の腹につとむる如くして、汝等の行は神の前に純潔にして諂はざるものと認められんことを要するなり。

善行に勉勵することに關しては、靈魂を救ふの行を遂ぐる力あらず、と誰も伴り言ふべからず、なんとなれば神は其僕に或る能はざることを命じ給はず、却て各人に其の望に從ひて或る善なることを爲し得る力を與ふる程、神性の非常に富める愛と仁慈とをあらはせばなり、されば勉勵する者は誰も救はるゝことを能くするな

くして存せざるなり。いふあり、『門徒の名によりて此の小子の一に惟冷水一杯を飲ましめん者は、我誠に汝等に語ぐ、其賞を失はざらん』〔マトフェイ十の四十二〕。此の誡命よりも行ひ易きものあるかや。一杯の冷水に天の賞は從ふ。視よ何等の無量なる仁愛なるか。いふあり、『此の至小き兄弟の一人に行ひしは即我に行ひしなり』〔マトフェイ二十五の四十〕。命せらるゝものは輕少なれども、これに從ふによりて得る所のものは大にして、豊に神を以て報いらるゝなり。ゆゑに神は力に過ぐることを促さず却て爲す所の事の小なる或は大なるに拘はらず、汝の合意に準じて賞は汝に從ふ。もし神の名により、神を畏るゝ心よりして爲すならば、賜は光り輝きてうばゝるゝことあらざらん、しかれども表示の爲又は人間の榮譽の爲になすならば、主の自から誓て言ふところのものをきくべし、曰く『誠に汝等に語ぐ、彼等は已に其賞を受く』〔マトフェイ六の二〕。ゆゑに汝等にも同くこれあらざらんが爲に其門徒に語げ、門徒により汝等にもつげていへり、『慎みて汝等の施濟又は祈禱、又は汝等の禁食を人の前に爲すなかれ、然らずば天に在す汝等の父より賞を獲ざらん』〔マトフェイ六の一〕。かくの如く此の死すべくして死すべき者を以て報いらるゝ稱賛と、此の凋衰して我等より去る所の榮譽とを嫌ひ避けて、彼の一の榮譽を尋ぬるを命じ給ふ、これ我等其美を言ひ得るも其界限を知るあたはざるものにして、これによりて我等は主イエスキリストに於ける得もいはれざる奥義を賜はるを得るなり。彼に光榮は世々に。アミン。

克肖なる我等が父埃及マカリイの説教

第一　説教

心を守る事

第一章

『我は禁食し、旅行の生活をなし、己の所有を頒つによりて、我は聖なり』と誰にても言ひ得る者ありや。内部の人を淨めずして誰か聖なる。けだし淨むるとはたゞ悪しき行爲を制するを謂ふにあらずして、完全なる清潔、良心に清潔を求め得ることなり。人よ、汝の思慮を伸ばして、罪の俘囚たり又奴隷たる此の汝の智に入りて、汝の智の奥處と、意念の深きと、所謂汝の靈魂の潜伏所とに匍匐して巣を作れる蛇を觀察せよ、彼は汝の靈の重なる部分を撃破して汝を殺せり、けだし心は測るべからざる淵なり。ゆゑにもし此蛇を殺すときは、神の前に清潔を以て誇るべし。しかれどもしこれ無んば、汝は窮乏者たり、又有罪者たるにより、謙遜して汝の隱なる者のために

神に懇求すべし。

第二章

眞實の死は內部に心中に隱れて、人は裡面に於て殺さるゝなり。ゆゑにもし誰か窃に死より生に移る（イオアン五の二十四）ならば、實に彼は永遠に生きて死せざらん。且かくの如き者等の體は或時には破るゝも、聖にせられしものなるにより、光榮を以て起きん。ゆゑに諸聖者の死は眠と名づけらるゝなり。

第三章

すべて反對者の盡力は、我等が智を神を念ふの記憶と神を愛するの愛より誘ひ去らんとするにありて、これが爲に浮世の餌をもちひ、實に美なるものより虛にして實に美ならざるものに振向かしむるなり。けだしすべて善なる行は、もし人これを爲すときは、惡者は汚し辱しめんと欲して、つとめて自己の虛誇或は自尊の心を蒔きて、誠命に混じ、爲すところの善をして神のために成るにあらざらしめ、たゞ善なる熱心より出づるにあらざらしめんとするなり。

第四章

ゆゑに未だ曾て心に入りて研究をなさゞる我等は、何事を如何に始むべきか、我は起ちて禁食と祈禱とを以て叩くこと、主の命じ給ひし如くせん、曰く「叩けよ、汝等に啓かれん」（マトフェイ七の八）。けだし主の言と、赤貧と、謙遜と、すべて誠命を以て要求せらるゝ德行とに居りて、主の靈門を日夜叩くときは、尋ぬるところのものを求むるを得ん、何となればすべて暗黑を逃れんと欲する者は此門に依りて救を得べければなり。彼は靈魂の自由を彼處に於て看破すべく、天の王ハリストスを求むるの思と其力とをうけん。

第五章

智は靈神的敬虔なる憂を忘るゝときは、誠命をも忘れんぞれゆゑ前進せんと欲して、平坦なる道をうしなひ、屈曲せる小徑によりて行き、隨て野獸を迎へん。もし我等は祈禱と希望とに專なる此勞を絕たずんば、迷に陷らざるべし。けだし心に憂ふる者のことを聖書は左の如くいへばなり「神は信なり、爾等が誘はるゝこと爾等の能

く、すべる所に過ぐるを容さず』『コリンフ前十の十三』然れども悟らざる者に惡者は追及ん』『復傳律令三十一の廿九』。

第六章

外部の眼は荊棘と懸崖とを遠くより見認めん、かくの如く透明なる智も敏捷なれば、反對なる力の姦計と預備とを先見し、靈魂のために眼となりて、これを警戒するなり。

第七章

意念を試みて、我等が弱りたる感覺を『善と惡とを別つことに』『エウレイ五の十四』久しく教習せしめんとせば、隱れて見えざる戰と勞とを多く要するなり。神の爲に智を不斷醒起して、靈魂の弱れる部分を勵ますべし、何となれば我等の智が此事の爲に呼ばるゝは、パウエルの言ふ如く、常に『主と一神とならん』『コリンフ前七の十七』ためなるによる。しかれども此の隱れたる戰と、主を默想すると、此の勞とは、誠命を實行するにあたりて我等は日夜これを有せんことを要す、我等は祈禱するか、或は食ふか、或は役事するか、或は飲むか、或は他のいかなる事をなさんも、すべて我等が爲す所の始業は神の光榮の爲に成就せんためなりけだしすべて誠命と適準する我等が行爲は、神を不斷に記憶すると神に對するの畏と愛とを以て聖にせられて、我等に清潔に成就せらるゝなり、そのときは神の誠命に依りて爲すところのものは、最早これを汚す者の影響の外にあるべし。

第八章

族祖アウラアムは捕獲物の最良のものを神の司祭メルヒセデクに獻じて、彼より祝福をうけたり、されども此によりて神は他のいかなることを推察せしめ給ふか。これ高尚なる思辨を指示し、これを以て我が天性のすべての融合より成れる最勝眞實なる骨子となすにあらずや、即其智と其良心と其心情と其意念と、其靈魂に於る愛の力と、何れの時にも神に於る同一の記憶と默想とに己をさゝぐる我等全人の初實の果とを、我等は先づ常に神に獻じ、これを以て心の聖なる祭壇となし、善なる意念の貴重極善なるものとなさんことを要するにあらずや、されば かゝる場合に於て神の恩寵に助けらるゝ者は日々に成長發達するを得べくして誠命を以て

要求せらるゝ正義の軛は我等が爲に輕くなるべし、何となればすべての誡命は、主の助けにより、主を信ずる我等の信仰を以て純全に間然する所なく實行せらればなり。しかれども有形的苦行と高尚第一なる善なる始業とに至りては、至愛者よ悉くの德行は彼此相持たれて、互に關係すること、或る聖なる靈鎖によりて彼此互に係屬するが如くなるを知るべし、即ち祈禱は愛に係り、愛は喜に係り、喜は溫柔に係り、溫柔は謙遜に係り、謙遜は役事に係り、役事は希望に係り、希望は信仰に係り、信仰は從順に係り、從順は正直に係るなり。さてこれと反對なる一方をいへば惡習も彼此互に生せらるゝなり、怨恨は激怒を以て生せられ、激怒は驕傲を以て、驕傲は虛誇を以て、虛誇は不信を以て、不信は剛愎を以て、剛愎は怠慢を以て、怠慢は懶惰を以て、懶惰は等閑を以て、等閑は煩悶を以て、煩悶は不堪忍を以て、不堪忍は奢侈を以て、生せられて、其他の惡習も彼此互に相係るなり、かくの如く善なる一方に於てもすべての德行は互に係屬するなり。されどもすべての德行の首たり、善なる行の最巓たるものは、常に祈禱に專らなるにあり、祈禱により神に願ふて、他の德行をも日々に求むることを得べし。

第九章

それ謙遜と正直と慈悲を以て我等を飾るあらずんば、祈禱の外儀はわれらに何の益も產せざるべし。我等がこれを言ふはたゝ祈禱の爲のみに非ずして、すべての苦行の爲或は功勞、或は童貞或ば祈禱の爲にも、或は又德行の爲におこなはるゝいかなる苦行と行爲との爲にも言ふなり。もし愛と平安と喜悅と謙遜と正直と誠實と信仰及び寬忍の豐なる果をおのれに見るあらずんば、我等が苦行はすべて徒然無益なるべし、何となればすべて如此の行爲と、此の悉くの苦行とは、結果の爲に成就せらるべければなり。もし愛と平安の結果が我等にあらはるゝあらずんば、すべての行爲は空しく徒らに行はるゝなり。結果なくして爲すものは審判の日において五人の愚女の如くわらはれん、彼等は心の器に靈油を取らず、即ち上文に數へたる德行を此處より携へず、ゆゑに愚者と名づけられて、天國の靈室に入るをゆるされざるなり。德行の缺乏の爲、神の顯然たる住所をおのれに有せざるために、童貞の苦行は無に歸せん。葡萄園を耕すにあたりてすべての配慮を加ふるは結果を樂まんためなり。されどもし葡萄園に結果のあらはるゝあらずんば、耕耘の勞はすべて徒

然無益となるべし、かくの如く神の作用するときにあたり、愛と平安と喜悦と謙遜と其他使徒が教へたる徳行（ガラテヤ五の二十二）の結果を心神の感覺を以て全く疑なくおのれに認識するあらずんば、霊真の苦行は徒然なるべくして、祈禱と唱詩と禁食と儆醒との勞は何の益にも立たざるべし、何となれば此等の霊と形との勞は霊果を望むの希望によりて成るべければなり。然して徳行に於て神の果を結ぶは、霊神上の樂なると共に、神が作用する信者の心の爲に不朽なる満足なり、信と希望とにより、適當なるものに聖神を以て行はるゝ行爲と勞とすべて天然の苦行は大なる瞭解と辨別とを以て價を定めらるべし。禁食と儆醒と旅行の生活は最美しき行にして、併て善なる生活の花なり。さりながら「ハリステアニン」の最内部なる職分のあるあり、されば何人もたゞ此の一事に依頼すべからざるなり。人あり恩寵に與かる者となるあらんに、彼に居る所の悪習は狡猾にして、随意に地位を譲りて働かず、人をして其智は清潔になれりと思はしめて、彼を最早自負にみちびき入れん、ゆゑに彼はいへり『我は完全なる「ハリステアニン」なり』と。しかれどもその後人が己のことを『我はすでに自由なる者なり』と密に思ふて、己を等閑に委するや、其時潜伏するところの悪習は強賊のごとく人を襲ひ、これを誘ふて、幽暗の地に落さん。しばしば賊を働き、或は兵人となりし者は敵に對して能く詭り、伏を設け、身を潜めて敵の背後に廻り、俄に圍みてこれを殺すならば、まして、かくの如く霊魂をはろぼさんとする凶悪は能く心中に隠れ、時を待ちて働かず、霊魂を自負にみちびき入れて、その完全に誇らしめん。

第十章

ハリストス教のために基礎となるべきものは左の如し。人はたとへ義の行を成就すとも、これに安心せず、己を大なる者と思はずして、神の貧しからんこと是なり、またたとへ恩寵をうくるものとなるとも、己を以て得る所ありしものゝ如く思はず、己を或る重要なるものと認めず、人を教ふるを始めずして、善なる旅行と宜しき生活とを以て多く禁食し、旅行し、祈禱しつゝ、恩寵をうくる者となりて、己の霊魂を高く値せざらんこと是なり、特に恩寵の初實を委托せらるゝ時は勞と渇とに止まりて、飽満したる者の如く己を義なる者或は恩寵に富みしものと認識せず、哀みて涙を流さんこと是なり。たとへば母あり、獨生の子を有して、これに學問をなさしめたらんに、成人に至り不意に死せしならば、幾人の慰問者ありて、母を慰むるとも、みな

みな彼を愈々悲ましむるのみにして、母は慰なきものとして存せん、かくの如くヘリヤファエルも己の墮落を哭して、不斷に涙を流すべく、殊に傷める心を有すべし。

第十一章

それ帝王の家は多くの居所と、種々なる第宅と、許多の前庭及び內部の室を有するありて、かしこに王はみづから居り、彼處には王の紫袞衣と財寶の守らるゝわらんは外庭に入りしものは、最早王の光榮と紫袞衣と財寶のある處なる內部の室に入りたりとは思はざらん。靈神界に於てもかくの如し。禁食して儆醒と歌頌と新禱とを務むる者は、己を以てすでに慰安に入りたりとは思はざるべし。何となればたゞ前庭と第宅に入りたるのみにて紫袞衣と財寶のある處に入りしにはあらざればなり。ゆゑに兄弟は生活の外部の狀態に多く依賴し、己を以て「我は或る價値を有す」と謂ふべきにあらず。たとへ誰か恩寵に與かる者となれりといへども己を以て最早目的を達せりとか、又は王に最昵近なる者となれりと思ふべからず。何となれば外部の院に止れば、なほ〳〵彼は寶を瓦器の中に發見したるか、神の紫袞衣を被たるか、王の物を得て自ら慰安したるかと穿鑿すべからず。何となれば靈きとを明白に認識するにあるのみ。もし靈魂は己に有する疵と情慾の痂とをたのしまず、己の有罪なるを恕するなくんば、主はこれを不具ならしめざるべく、來りてこれを痊し、これを療じて、これに無欲と不朽なる美とを依復せしめん。たゞ彼はすでにいひし如く情慾が促す所のものと任意に交るをなさず、情慾によりて生ずるものに同意をなさずして、善なる神によりあらゆる情慾より免るの自由をたまはちんが爲に全力を以て主に呼ぶならば可なり。故にかかる靈魂は福なり。しかれども己の疵を自覺せずして、大なる限りなき惡習の故に、何等の惡習を有することをも思はざる靈魂は禍なり。善なる醫師は彼を眷みざるべく、又療せざるべし。何となれば彼は己を以て傷はれざる健全なるものと思ふて、己の疵を慮らざればなり。いふあり「康强なる者は醫師を需めず、病を負ふ者はこれを需ひ」（マトフェイ九の十二）。

第十七章

凡そ德行に對する熱心なる愛にみちびかれて、天に屬する神の秘義を識るの認識を實驗により聰敏に求得て、己の住處を天に有する者は、生活に於ても、超性の業に於ても、實に福にして驚嘆すべきものなり。これぞ彼等が悉くの人類に超越する明

白の證左なる。有力なる、或は有智なる、或は善智なる人類中誰か倘地に居りて天に登り、彼處に神的なる行を成し、神の美麗を直觀したる者ありや。しかれども今や外貌によれば或る貧しき者、極めて貧しく賤しくして、鄰人にさへ全く知られざる者は、主の前に其面を俯伏し、神にみちびかれて天に昇り、其心に疑なき信を有して、彼處の奇跡をたのしみ、彼處に行動し、彼處に居處を有すること神聖なる使徒の言へる如くならん。けだしいふあり、『我等の居處は天に在り』〔フィリッピ三の二十〕またいふあり、『神が彼を愛せし者の爲に備へし事は目未だ見ず、耳未だ聞かず、人の心にいまだ入らず』〔コリンフ前二の九〕其後使徒は又加へていへり、『たゞ我等には神己の神を以て之を顯はせり』〔同上十〕彼等こそは實に有智にして有力なる人なれ、彼等こそは尊貴にして善智なる人なれ。

第十八章

さりながら彼の天に屬するものによらずして、現在の賜に依り聖者を虐らんも、彼等は惡くの人類より一層上なりと言ふを訝るなかれ。此事は左の如く考ふべし。ヴィロンに王たりしナウホドノソルは曾て其彫刻したる偶像を拜せしめん爲に屬を以て自から誇らんとす。又或者は五「オンス」の罪をおのれに有すれど、これを半「オンス」と爲すことしばゝこれあり。彼等に此事あるは或は無知による、何となれば恩寵に關係し自から欺かれて、事理を辨へざるによる、或は虚誇により、彼等に惡の働くを言ふを耻づるによる、何となれば彼等は既に己を完全なる者と宣言したるによる。人は眞實を爲し且言ふべく、恩寵の賜をも罪の行爲をもおのれに承認むべし。清き心を有すと言ふ者は僞るなり。恩寵の降るや、即時に人が最早清潔なる者となるやうのことは實際之あるに非ず。人が練習と教訓との爲に敵と誘惑とに付さるゝは、イオフも曾て誘惑の中にありし如し、何となれば惡者もたとへ善意に出づるにあらずといへども、善なるものに助ぐればなり。しかれども「ハリステアヤン」は五「オンス」の罪を有するも言ふべし『二十「オンス」を有して、惡に溢る』と。また例へば二十「オンス」の善をおのれに有するも、言ふべし『我にはたゞ半「オンス」あるのみなり』と。さりながらもし虚誇により此を言ふを耻づるならば、眞實をいふべし、恩寵の靈驗なるを承認むべく、尚一方には罪をも承認むべし。しかれども我が前にいひし如く、靈魂は深きものなるにより、比喩の助を借りて其組織をあらはさん。彼はたとへば太陽の如く、これより光線を多く發す、或は喬木の如く、多くの枝あり、或は大なる市

の如く境を接する多くの方面を以て環らさるかくの如く聰明なる本質不死なる靈魂もあらゆる造物よりも更に尊敬すべき美にして神の像たり又肖似たるなり。今來るところの恩寵が二の光線を以て靈魂に輝き始まるは或は全樹の中二枝を照す如く或は全市の中境を接する二の方面に輝く如くにして靈魂の最多なる部分はなほ罪に占領せらるゝなりしかれども靈魂はすべて全く善なる部分に屬して全く恩寵と光明の中にありと思ふこれ例へば誰か金五斤を得たらんに己を安想して百斤を得たりと思ふが如し。豈胎兒は母腹に於て最早成人となりしや。或は一石を基礎に置きし者は最早建築を竣りしや或は土中に埋まりたる種子は最早穂となりしや。豈商人は僅に貿易し始めて直に其庫を滿たしたりしや。かくの如く恩寵の小部分をうけし者も最早これによりて「パリスチアニン」となりしや。第一偉大なる者といへども完全に關係すれば下等の官吏の首長に對する如く或は小川のエウフラト河に於ると同樣なり。三十里程を隔つる市にゆかんと志す者は二三里をゆきすぎんとき最早市に到着せりと思はざるべし。けだし反對の力はたゝ慫慂するのみにて強て爲さしめざる如く神の恩寵も天性の自由と墜落との爲に奮鬪するなり。もし今サタナに慫慂せられたる人が惡を爲すあらんも人の爲に

力が罪せらるゝにあらず自己の自由にしたがひ惡習に從屬したる者として人は自から拷鞫と罰とをうけんこれと同樣もし人が善に歸して神の恩寵の勝を奏するあらんも恩寵は善を己れに歸せず却てこれがために人に報いて人を稱揚せん何となれば人はみづから己の爲に善の起原者にして人の天性はかくの如し人に來る恩寵は强制する力を以て人の自由を少しも束縛せず人をして欲する欲せざるに拘はらず善にありて變せざるものとなさしめざればなり。これに反して人に存する神の力は自由に餘地をあたへて人が靈魂を貴重するか或は貴重せざるか恩寵と合致するか或は合致せざるか其自由の顯露せしむるを致すなり。多くの者は貴重と合致とをあらはせども或者は背離せり。けだし使徒はいへり「神を以て始めて肉を以て終るか」(ガラティヤ三の三)律法は天性の爲に置かるゝにあらずして善にも惡にも離れ去るべき自由なる意志の爲に置かるゝなり。ゆゑに主はいへり「我火を地に投せんために來れり此の火の已に燃えんことを我望むこと幾何ぞ」(ルカ十二の四十九)主は人の心に天の火の燃えんことを望み給ふといへども或者はこれを望み或者は望まざるなり。主は亦同くいへり曰く「我幾次か母鷄が其雛を翼の下に集むる如く爾の諸子を集めんと欲したれども爾等は欲せざりき」(マトフェイ廿

三の三十七、主は望み給へども、人々は尙主に近づきて憐を得んことを望まざるを見るか。

第十三章

主に就きて永生を蒙ひり、神の住所となりて、聖神を賜はらんと欲する者は、主の誡命にしたがひ、正直清潔にして果を結ぶを得んがために、左の如く始を置かざるべからず。第一、人は主を堅く信じ、主の誡命の言に己を全く献げ、すべてに世を棄てゝ、智はいかなる有形物にも全く占有せられざらんこと肝要なり、また人は主の惠みと助とを不斷に待ち、何れの時にもこれを其才智の目的となして、常に祈禱に居り、失望せざらんことを要するなり。次に人は其存する所の罪の故に、たとへ心は願はずとも、すべての善と主の悪くの誡命を守るとに常に己を強ふべし、例へば悪くの人の前に謙遜なるものとなり、尊敬或は稱讃或は榮譽を何人よりも求めずして、己を衆人より劣等なるもの、且は悪しきものと思ふこと、福音經にしるさるゝが如くし〔イオアン五の四十四〕、獨一の主と其の誡命を常に目前に有して、彼れ獨りに容ばれんを願ふことに己を強ふる是なり。これと同樣たとへ心は望まずといへども、温柔に己を強ふることと、主の言ふごとくすべし、曰く〔我に學べ、我は心温柔にして謙遜なればなり、汝等は其靈に安息を獲ん〕〔マトフェイ十一の二十九〕且又力に準じて憐憫なる者となり、寛容なる者となり、仁愛なる者とならんことに強て己を習はすこと、主のいふ如くすべし、曰く善良寛容なること〔爾等の天の父の慈憐なる如くすべし〕〔ルカ六の三十六〕、又言ふ〔我を愛する者は我が誡を守れ〕〔イオアン十四の十五〕、また己を強て力を用ふべし、何となれば〔力を用ふるものは天國を奪へばなり〕〔マトフェイ十一の十二〕、またいふ〔力を竭して窄き門より入れ〕〔ルカ十三の二十四〕、然れども人は主の謙遜と生活と人々と交際したることを常に目前に有し、忘れざる鑑となして、常にこれを記憶すべし。而して力のあるだけ己を強て常に祈禱に居りて、主が來りて人に居り、人を成全にして、その悪くの誡命に固め給はんことゝ、又己の靈魂がイエスキリストの住所とならんことを何れの時にも信仰を以て願ふべし。されば、かくの如く何れの時にも己を善に習はし、つねに主を記憶して、時々刻々主の大なる慈悲と愛とを待つを盡力しつゝ、今は心の願に反するも、強て爲すわらば、主はその如此の任意と善良なる勉勵とを以て主を記憶すると、すべての善行と謙遜と温柔と愛とに不斷己を強ふるを見、又欲せざるの心を苦しめて、力のあるだけ前進

するに己を強ふるとを見ば、人に其憐を施し、これをその敵とその居るところの罪より救ふて、聖神を滿たしめ給はん。かくの如くなれば最早強ふることなく、又何等の勞もなくして、常に人は主の誡命を實に成すを得ん、確言すればもし人が清潔に果を結ぶならば、主は自から人に於てその誡命と神の果とを成し給はん。さりながら主に就く者は常に疑なき信仰を以て主の憐を待ち、心の願に反すと雖、先づ善に己を強ふること肝要なり、憐憫なるものとなり、慈悲の心を有することに己を強ひ、侮辱を忍耐し、大量なる者となり、卑しめ或は辱めらるゝときは、怒らずして、錄する所の如く、己の讎を報いざる（ロマ十二の十九）ことに己を強ひ、聖神上の祈禱をいまだ有せずんば、祈禱に己を強ふること肝要なり。かくの如くなる時は、神は人のかく盡力して鬪ひ、心の望に反してさへ己を善に向はしむるを見て、人に眞實なるハリストスの祈禱をあたへ、宏慈の心と眞の善心とをあたへ給はん、十言にていへば人の爲に聖神上の果を守り給はんじかれども、もし誰か祈禱を有せずして、恩寵の祈禱をうけんが爲に、たゞ己を祈禱に強ふるのみにて、謙遜と愛と其他主の誡命を守ることに己を強ひずんば、時としてその願のごとく恩寵の祈禱をあたへらるゝことあり、かつ稍々慰安と喜樂とに居るありといへども、品性に於ては依然として舊の如く異なる所なからん。けだし彼は溫柔を有せざるべし、何となれば勞してこれを求めず、溫柔なる者となるに己を習はさゞればなり、又謙遜を有せざるべし、何となればこれを願はずして、これに己を強ひざればなり、衆人に愛を有せざるべし、何となれば此を慮らず、盡力して祈禱の願を以てこれを尋ねざればなり。けだし心の願に反すといへども、無理にも己を祈禱に強ひ、これに力を用ふる者は、おの〳〵亦愛にも溫柔にもすべての忍耐及び大量にも、錄する所の如く喜んで己を強ふることと肝要なり、しかしてまたかくの如き卑遜に己を強ふべく、己を衆人より惡なる劣等なる者と爲し、無益なることを談せずして常に主の言を學び、口を以ても心を以ても、これをいひのぶることに己を強ふること肝要なり。また激怒せざることに己を強ふべし、錄していへるごとし、曰く、『凡の苦很、瞋恚、誼譟は凡の毒惡と共に汝曹の中より去らるべし』（エフェス四の三十一）此の如くなれば、主は人の自由なる意志を見てこれより先存する所の罪の故に強ひて力を用ひて、僅に守るを得たるところのものをすべて勞することもなく強ふることもならして成就せしめ給はん。然らばすべて此の德行の企始は人の爲に天性の如くなるべし、何となれば主は終に人に來り給ふべく人に來り止まりて、その聖神上の果を實現せしめつゝ、自から其誡命

を容易く人に行はしめ給へばなり。

第十四章

もし誰か神より賜をうけざる間は、祈禱に己を強ふれども、此徳行に、即謙遜と、愛と、温柔及び其他の徳行に同じき分量を以て己を強ひず、これに力を用ひざるときは、時として神の恩寵はその祈禱と願求の如く彼に在ることあらん、何となれば神は善良にして慈悲なれば願ふ者にその願ふところのものをあたへ給へばなり。さりながら前文に數へたる徳行に己を備へず、又習はさずんば、或は恩寵を失ふべく、或は受けて而して陷るべく、或は高慢の故に進歩せざらん、何となれば全くの任意により主の誡命に己を委ねざればなり。神の居る處或は安んずる處は、謙遜と愛と温柔と其他主の誡命なり。ゆゑに實に神の意を悦ばしめ、神より天の恩寵をうけ成長して聖神に於て成全ならんことを欲するものは、先づ心の望に反すといへども、悉くの徳行を守るに己を強ひざるべからず、錄していへるごとし「我爾が悉くの命を承認めて皆之を正しと爲す」(聖詠百十八の百廿八)。或者は祈禱に上進せざる間は、祈禱を常に務むるに己を強ひて、これに力を致さん、かくの如く徳行の悉くの企業に

も己を強ひて、これに力を致すべく、善良なる習慣に己を習はすべし。さればかくの如く堅固にして主に願ひ、懇求して願ふところのものをうくるならば、聖神上の賜は成長して彼に花咲くべくして、彼にあたへられたる此賜はその謙遜と他の徳行とに止まりて、彼に眞實なる謙遜と眞實なる愛と眞實なる温柔とを教へん。即先に己を強ひて切願したる所のものを教へん。かくの如く成長し、神に於て成全を得る時は天國の嗣者となるを賜はらん。けだし謙遜なる者は永く墮ちず、然り彼はすべてより下からば、何處にか墮つべき。大なる高きは謙遜なり、尊敬と價値は謙徳なり。ゆゑに我等も信と望と愛とを以て神に願ひ、懇求して其神を我等が心に遣はし給はんことを不斷待望し、心の願に反すといへども、己を謙徳に習はして、これに力を致さん、又神を以て父に祈り、且拜せん、然らば神は自から我等の中に在りて祈禱すべく、神は自から我等に眞實の祈禱と謙遜と温柔と愛と、今日力を用ふるも爲すあたはざる所のものと、憐憫と慈悲とを教へ、主の悉くの誡命を勢せず強ひずして、實に遂ぐることを我等に教へん、即神が自から知り給ふ如く其果を我等に滿たしめて教へ給はん。さればかくの如く主の誡命が獨りハリストスの旨を知る神を以て我等に遂成せられて、我等を罪の汚れより潔ひるときは、彼は我等を最美はしき清

潔無玷なる新婦となして、ハリストスに顯はさん、然らば我等は神に慰安すべくして、ハリストスも我等に止まりて無窮の世にあらん。

光榮は彼の我等を兄弟と名づけ、天の父の子と爲して、かくの如き尊敬を人間に賜ひし鴻恩と憐憫と愛とに歸す。光榮は父と子と聖神に世々に歸す。アミン。

第二　說教

靈神上の完全

第一章

我等各人は神の恩寵と神聖なる賜によりて救を受く、然れども又た信と愛とを以て、自由なる意志の盡方により、德行の完全なる域に達するを得べし、これ恩寵による程は、義によりても、永生を闘がんが爲にして、充分なる上進を賜はるは、自己の勞を添へずしてたゞ一の神聖なる力と恩寵とを以てするにあらざる如く、自由と清潔の完全なる域に達するも上より神の手の助なくして、たゞ自己の勉勵と力とを以てするにはあらざるによる、何となれば『若し主は家を造らずば、造るもの徒に勞し、若し主は城を守らずば、守る者徒に儆醒すればなり』〔聖詠百二十六の一〕。

第二章

問、使徒が我等各人を呼び且勸めて認識せしめんとする神の旨は如何なるものか〔ロマ十二の二〕。

答、罪より全く清潔になり、耻づべき情慾より免れて、高上なる德行を求め得ることとなり、即完全なる神の神をうくるによりて必ず成就せらるべき心の清潔と聖にすることなりけだし言ふあり『心の清き者は福なり、彼等神を見んとすればなり』〔マトフェイ五の八〕又いふ『汝等純全なること、爾等の天の父の純全なるが如くなるべし』〔同上四十八〕。又言ふ『願くは我が心は爾の律に玷なからん、我が羞を得ざらんためなり』〔聖詠百十八の八十〕又いふ『其時我爾が悉くの誡を視て羞ぢざらん』〔同上〕。また『誰か能く主の山に陟る』との問に答へていへり『唯罪なきの手と潔き心あるもの』〔聖詠二十三の三、四〕これ行に於ても思に於ても罪の全滅を示すなり。

第三章

聖神は顯然ならざる隱なる情慾より救はるゝの難きと、情慾が靈魂に固着して根

を張る如くなるとを知りて、これより清潔になることの肝要なる所以をダワイドにより證示すゞけだしいへり『我が隱なる咎より我を淨め給へ』(聖詠十八の十三)これ即多くの祈願と信仰と神に全く向ふの助を以て、神の協力により、我等これを成すを得べく、かつ我等はこれに力を倶ばし、すべての守りを以て其心を守るならば、成すを得べしとなり。

第四章

福たるモイセイは靈魂が善と惡の二の意見に從はずして、一の善なる意見に從ふべきこと、善と惡との二樣の種子を播かずして、一の善なる種子を播くを要することを比喩により示して、左の如くいへり、即爾の納屋に異種なる動物を共に繫ぐなかれ、例へば牛と驢馬とを共につなぐ勿れ、同種類のものを繫ぎて、爾の刈穗を打つべしといふ(復傳律令二十二の十)これ我等が心の納屋に德行と惡習と二の行爲の共に居るあらずして、一の德行の行爲のみならんことを要するなり。また毛と麻とをまじへ織りたる衣服を着るべからずといひ(十一)、一の地區に二の種子を播くべからずといひ(九)、異類の家畜を異類のものと交らしむべからず、同類のものを同類のものと交尾せしむべしといふ(利未記十九の十九)これ皆すでに述べし如く、我等は德行と惡習とを共に己れに播かずして、一の德行の果のみを產すべきことと、靈魂が二神即神の神と世の神とに親與すべからざることゝを奧密に了解せしむるなり。げだしいへり『我爾がことゝくの命を承認めて、皆これを正しとなし、惡くの詭の途を疾む』(聖詠百十八の百二十八)。

第五章

神と配合せんとの望を起す處女たる靈魂は、たゞ顯然たる罪より、即淫行、殺人、偷盜、嗜甘、誹謗、貪銀、貪慾及びこれに類するものより清潔にならんことを要するのみならず、我等が前に述べし如く、隱然たる罪より、即肉慾、虛誇、容悅、僞善、貪欲、詛詈、惡性、怨恨、不信、嫉妬、自愛、高慢及び其他のこれに類するものよりは特に清潔にならんことを要するなり。げだし聖書にいふ如く、主は此等の隱然たる靈魂の罪を以て外面にあらはれたる諸罪と同等にすればなり。いふあり、曰く『爾を攻むるものゝ骨を散さん』(聖詠五十二の六)またいふあり、『殘忍詭譎の者は主之を惡む』(同上五の七)これ神は詛詈と殺人とを同等に惡むをあらはすなり。またいふ『其隣と和平を語り』云々

〔聖詠二十七の三〕、またいふ、『爾等心の中に不法を地に設く』〔聖詠五十七の二〕、またいふ、『人々爾等に善を言ふ時は爾等禍なり』と、これ即汝等自己のことにつきて人々より善なることをきかんとの望ありて、名譽と人の稱讃とにつながるゝ時は禍なりとなり。けだし善をなすものは全く隱るゝを得べきか。且主も自からいひ給ふ、汝等の光を人々の前に輝すべしと。さりながらすでに述べし如く神の光榮のために善をなすを力めて、自己の名譽の爲にせざるべく、又人の稱讃を好む者とならざるべし、けだし主はかくの如きものを不信者と名づけて、左の如くいひ給ふ、曰く『爾等互に榮を相受け獨一の神よりする榮を求めずして豈信ずるを得んや』〔イオアン五の四十四〕。見よ、使徒も食ひ且飲むことをさへすべて神の光榮のために行ふべきを命ずるなり、けだしいへり、『或は食ひ或は飲み或は何事を行ふに論なく皆神の光榮の爲に行へ』〔コリンフ前十の三十一〕。然して神聖なるイオアンは憎惡を殺人と一樣に並べていへり、『其兄弟を憎むものは殺人者なり』と〔イオアン一、三の十五〕。

第六章

『愛はすべてを庇ひ、すべてを忍ぶ。愛は永く墮ちず』〔コリンフ前十三の七、八〕。『永く墮ちず』とはこれ即前文にいへる如くなる神の賜をうけたれど、充分靈活なる靈神上の愛の爲に情慾よりまぬかるゝ高き自由を賜はらざる者は、未だ安然の地位に到り達せず、反つて其行はなほ危險の中にあり、而して凶惡の諸神よりする畏懼の下に立つを意味するなり。しかれども愛の尺度は使徒の示す如く最卑墜に屬せずして、他にかくの如くなる狀態はあらざるなり、ゆゑに天使の舌も預言も悉くの知識も病を癒すことも愛に比ぶれば何も無きなり。

第七章

此を以て使徒は完全の標的を示せり、これ人おの〳〵己を如此の富より極貧になりし者と自覺し、熱心と張膽とを以て此の最終なる尺度に急ぎ、且かくの如くして これに達せざる間は靈界の道場を經過し去らんためなり、錄していへる如し、『得んこと事を期して趨れ』〔コリンフ前九の廿四〕。

第八章

知るべし、己を捨つるとはすべてに己を兄弟社會に付し、何に於ても己の意旨の爲

に導かれず、一の衣服の外いかなる事にもその主人とならざるの謂なるを、これ人は全く獨立なる者となりて、たゞその命せらるゝ所を喜んで守持し、衆人に對し、殊に長老に對しては、僕のごとくに己をみちびき『爾等の中に首たり大たらんと欲する者は』衆人の役者となるべく、最後者及び僕となるべしとの給ひしハリストスに從ひ〔マトフェイ二十の二十六、二十七〕尊敬も榮譽も稱讃も強て求めず『人の悅を取るものゝ如くたゞ目前に於て』のみ働かず、すべてに於て愛と正直により兄弟につとむるの義務ある者と己を思惟するを得んが爲なり〔コロサイ三の二十二〕。

第九章

兄弟社會の長老は大なる事に附置かれたる者として、反對詭譎なる凶惡の姦計を倒さんことを要す、けだし高慢の情により、兄弟の上に權を執ること屬下に於る如くし、大なる益に易へて己を害せざらん爲なり。これに反して彼は慈悲深き父として、神の爲に己を以て靈形共兄弟社會の勤に献げて、兄弟の爲に盧り、何れの時にも注意を加へ、彼等を神の子となして、必要あれば何處にも規責すべく、當然なれば慰諭すべし、長老と屬下との間の緊要なる秩序を守らず、謙遜と温柔とを口實にして、修道院を亂脈に至らしめざらんためなり。しかれども心の奥底に於ては長老たる者は己を衆兄弟の不當なる僕と思ふべく、又神子を托せられたる保育者として、すべての善意と敬神の心とを以て各人を凡の善に向はしめんことを盡力すべくして、大にして奪ふべからざる、何等の勞にも超越する所の賞がかれらの爲めに守らるゝことを知らずんばあるべからざるなり。

第十章

少年の保育者たり、又或る時には自己の主人の爲にさへ保育者たる責任を負ふ者は、教育のため、及び品行の監督の爲に、全くの自由を以て彼等に鞭撻を加ふるを憚らざるべし、かくの如く長老等も怒と高慢との故にあらず、又己の爲に復讐するにもあらずして、或る瞭解を爲さしむるに必要有る兄弟を罰せざるべからざるなり、たゞ全くの善心により、彼等を導きて改善に至らしむる靈神上の益を目的とすべし。

第十一章

大なる勉勵と辛勞と專心致意と苦行的生活とは我等の中に形づくられたるハリ

ストスの恩寵と賜によりて我等に神に對する愛を得しむべし。此の誡命の後には、第二の誡命、即近者に對する愛の誡命を實行すること難きにあらざるなり。第一の誡命を他のすべての誡命よりも特に尚ぶべし、此を他よりも尚勉むべし、然る場合には第二も第一に隨はん。しかれどもし誰か此の大なる第一誡命、神に對する愛の誡命、即我等が内部の心情と善なる良心と神に於ける健全なる記憶とを以て、神の助力と救援とにより成立つべき誡命を疎にして、たゞ第二の誡命、即外部の勤を慮ることにのみ己を献ぐるならば、彼は此の誡命をも健全清潔に實行するあたはざるべし。けだし狡猾なる凶惡は、もし智が神を念ふの記憶と神に對するの愛と志望とを奪はるゝを見るや、或は神の命令を以て實行し易からざる至難なるものゝ如く想はしむべく、兄弟に對する勤に向つて不平と怨訴とを心に起さしむべく、或は己を義とするの自負自尊を以て人を誘ひ、己を以て尊敬すべき者大なる者、及び誡命を全く實行する者と思はしめん。

第十二章

人が自から己を以て誡命の勉勵者と爲すときは、顯然として罪を行ひ、誡命を誠實に守らざるべし、何となれば自から己れに審判を下して、眞の審判を與ふる者を待たざればなり。〔ハワエルの言ふ如く〔ロマ八の十六〕神の神は我等の神と偕に證する〕ならば、たゞ其時には眞實にハリストスに應ずる者となるべく、神の子となるべけれども、自己自尊によりて己を義とせんとする時はこれあるべからざるなり。けだしいへり、『自から譽むる者は嘉しとせらるゝにあらず、即主の譽むる所の者なり』〔コリンフ後十の十八〕。神を念ふの記憶も敬神の心も人にこれあらざる時は、人の爲に名譽を好み、承奉する者の稱讃を捉へんとする大なる必要は近づき來らん。主はかくの如き者を不信者と名づけしこと、すでに説明せしごとし、けだし言へり、曰く『爾等互に榮を相受け、獨一の神よりする榮を求めずして豈に信ずるを得んや』と〔イオアンフ五の四十四〕。

第十三章

智の大なる戒と勞苦との時に際し、聖なる默想とすべて美なることに於ける不斷の專心致意とに由り、神の愛に大に進歩するを得るはすでにいひしごとし、何となれば敵は我等の智に妨げ、すべて美なることを記憶するにより神聖なる愛を守ら

んことを許さず、此世の欲望を以て、智覺を誘へばなり。惡者のために死或は絞殺ともいふべきは、智が神を愛すると神を記憶するとに留まりて、引誘せられざらん時にあるべし。これより兄弟に對する眞誠なる愛と眞の正直とは流れ出づべく、同じく亦溫柔、謙遜、誠實、慈悲、眞實なる祈禱、及びすべて大に飾られたる德行の冠は、一ありて二あらざる神に對する愛の第一誡命によりて完全をうくるなり。ゆゑに大なる戰と隱れて顯はれざる勞苦と意念の試練と我等が靈魂の弱れる感覺を善と惡とを分つに習はすと、靈魂の疲れたる部分を堅め、智を神に勉めて向はしむるを以てこれを活潑にすることは要用なり。けだしかくの如くして常に神に附く我等が智はパウエルの言ふごとく主と一神となるべし。

第十四章

此の隱然なる戰と勞苦と默想とは、德行を愛するものに於て不斷にこれを有すべし、すべて誡命の實行に着手して、或は祈禱するか、或は役事するか、或は食ふか、或は飲むか、いかなる善の成るありとも、すべて神の榮の爲にして、我等の榮のためにあらざるを致すべし。すべて誡命の實行は神を愛するの愛がこれを助けて凡ての困難を解くときに、我等の爲に便利にかつ容易なるべし。

第十五章

すべて敵の爲に能くし得るものにおける盡力と勉勵とは、此世の誘惑と餌とを以て智を眞に善なるものより空しく美なるものに離れしめて、神の記憶と敬神の心と神を愛するの愛とより誘ひ去るにあることは、すでに説明したる如し。

第十六章

德行は彼此互に相關係して、互に相持たるゝこと、或る聖なる鏈鎖の一の環が他の環にかゝると同じ。例へば祈禱は愛に持たれ、愛は喜に、喜は溫柔に、溫柔は謙遜に、謙遜は役事に役事は希望に、希望は信仰に、信仰は從順に、從順は正直に持たるゝ是なり。これ猶これと反對なる惡習も彼此互に關係するが如し、例へば怨恨は激怒に關係し、激怒は驕傲に、驕傲は虛誇に、虛誇は不信に、不信は剛愎に、剛愎は怠慢に、怠慢は懶惰に、懶惰は等閑に、等閑は煩悶に、煩悶は不勘忍に、不勘忍は奢侈に關係する是なり。かくのごとく惡習の他の部分もまた彼此互に相持たるゝなり。

第十七章

すべて人はいかなる善き行を爲すとも、惡者はこれに己の種子を混じて黑め且汚さんと欲するなり、たとへば虛誇自負を混じ、又或時は不平又はこれに類するものを混ずるは、其爲すところの善をして或は神のために成るにあらず、或は熱心より出づるにあらざらしめん爲なり、けだし錄していへり、アヱリは『羊の肥たるものと初生』とを携へ來りて供物となし、カインも同樣『地の諸果』を携へ來りて禮物となしたれど、初實なるものを以てせざりき、故に神はアヱリの供物を眷みたまひしかど、カインのをば眷みたまはざりき（創世記四の三、五）これによりて知るべし、他の善きものも善からずしてこれを成し得べきを、たとへば或は怠忽を以てし、或は輕侮を以てし、或は何か他の爲にして、一の神の爲にするにあらざるの類是なり、されば善き行も神にうけられざることはこれより生ずるなり。

第三　說教

祈禱の事

第一章

凡そ善なる勵精の中に於て首要なるものと進歩の頂上とは祈禱に沓勉なるにあり、我等が祈禱に於て呼ぶ所の者が手を伸ばして我等に助くるときは、他のすべてのものをも求むるを得べし、何となれば不可思議なる能力の親與は、これを賜はる者に祈禱を以て成るべく、神の前にありて聖事に於る心情と才智との配合は、主に對する言ひ難き愛に賴りて成れば なり。けだし言ふあり、『我が心に樂みを滿つ』（聖詠四の八）また主は自からいへり、『神の國は爾等の裏にあり』（ルカ十七の二十一）『國は汝等の裏にあり』とは天に屬する神の樂みが適當なる者の心に顯然とあらはるゝを謂ふにあらずして何ぞや。けだし適當なる靈魂は、神の靈驗なる親與により、諸聖人がハリストスの國に於て永遠の世に受けんとする其樂みと、其喜びと、其靈神上の愉快の聘質及び初實を倘此世に於てうけん。言ふあり、『我が心と我が肉は生け

る神に馳す』（聖詠八十三の三）また『我が靈の飽かさるゝこと脂油を以てするが如し』（聖詠六十二の六）といひ、及び其他これと符合する訓言もこれと同意義にして、神を以てあたへらるゝ靈驗なる樂みと慰めとを謂ふなり。

第二章

祈禱の行爲は他の行爲より一層上なる如く、祈禱に勉勵する者に於ても配慮の大ならんことを要す。凶惡が見えずして竊み去らざらん爲なり。げだし大なる善事の爲に配慮する者を惡者は大なる誘惑に服せしむればなり。ゆゑに覺醒は大に要用なり。愛と謙遜と正直と仁慈と明斷の諸結果が祈禱を務むる者に日々に成長せんため、及び神聖なる事に於る顯然たる進歩と成長とが彼自己に生せし如く他人をも呼んで等しく熱心に至らしめん爲なり。

第三章

輟めずして祈り常に祈禱を務むべきことは、神聖なる使徒自からも（フェサロニカ前五の十七）又主の言ふところのものも、我等に教ふるなり、いへらく、矧んや『神は晝夜彼に顧ぶところのものを援けざらんや』（ルカ十八の七）又いふ『儆醒せよ、祈禱せよ』と（マトフェイ二十六の四十一）ゆゑに『祈禱して倦むべからざるなり』（ルカ十八の一）さりながら常に祈禱に居る者は自己の爲にあらゆる行爲中の首要なるものを選びし如く、彼は大なる苦行と弱らざる努力とに居らんことを要す、何となれば祈禱に勉勵するを凶惡を以て阻せんとする妨礙を多く見んとすればなり、たとへば睡眠、煩悶、身體の重さ、思の擅なる、智の定らざる、衰弱及び其他兇惡の企計の類の如し、次は憂愁及び惡神の蜂起なり、此等は吾人と頑強に戰ひ、吾人に抵抗して、眞に連綿として神を呼祈する靈魂をハリストスに近づかざらしめんとするなり。

第四章

祈禱の爲に配慮する者は悉くの勵精と、覺醒と、忍耐と、心中の戰と、身體の勞とを以て踏堪へんを要す、これその思の散亂、或は長眠、或は閉鬱、衰弱及び擾亂に己を委して、喧嘈不適當なる言を弄し、或はかくの如きものに意を轉じ、一の堅く立ちて膝を屈るのみに滿足し、心を外形に行はるゝ所のものより遠く何處にか漂はしめて、精神を弱めざらんためなり。げだしもし、誰か無用なる思念の多きに抵抗して、おの〳〵

これを試驗と分析とに付し、常に主に懇願し、嚴なる覺醒を以て己を預備せざるときは、或は惡が種々なる手段を以て見えずして彼を捉へんも、或は彼れ自ら祈禱に常に專なるあたはざる者に對して高慢せんも、これを禁むるものは絶てあらざらん。然してかくの如くなる惡の狡計により、人は美なる行爲を敗壞して、これを凶惡なる魔鬼に付さん。

第五章

もし謙遜と愛と正直と仁慈が我等に於て祈禱と密に連合するあらずんば、其祈禱は、否確言すれば祈禱の此假面は、われらを益すること甚少なかるべし。而してこはたゞ一の祈禱の爲にかく證定すべきのみならず、すべての苦行、勤勞、童貞或は禁食、或は儆醒、或は唱詩、或は役事、或は德行のために行はるゝ如何なる行爲の爲にもこれを證定すべし。もし我等は己れに於て愛と平安と喜悅と溫柔の結果を見ず、加ふるに謙遜と正直と誠實と信仰の結果を見ずして、當然に大量と友誼の結果を見ざるならば、我等は勞して益なし、何となれば結果を益せんが爲に勤勞をも企つれば なゞしかれども我等に愛の結果のあらはれざるときは、疑なく行爲は徒然なり。故にかくの如き者等は五人の愚女と何も擇ぶところあらず、彼等は尙此世に於て靈神上の油を心に有せざるが爲、即前文に數へたる德義の靈神上の能を有せざる爲に、愚者と名づけらるべくして、童貞の苦行により何も益する所なく、王の婚姻の室の外に憫むべく棄てられん。たとへば葡萄園を耕すにあたり、すべての配慮とすべての勤勞とは結果を望むの希望と相合せん、されどもし結果のあらざるときは行爲は徒然ならん。かくの如く、もし神の作用により愛と平安と喜悅と凡て其他使徒が數へたるもの（ガラティヤ五の二十二）を己れに見ずして、靈神上の感覺に於ても此等を己れに全く疑なく認むる能はずんば、童貞と祈禱と唱詩と禁食と儆醒の苦行は無用なるものとならん。けだし此等の勤勞と靈形の苦行は、我等すでにいひし如く、靈神的結果を望むの希望によりて成就せらるべし、然して德行の豐なる結果は篤信謙遜なる者の心に神を以て言ひ難く生せられ、不朽の滿足を以て樂む靈神上の樂なり。ゆゑに勤勞と苦行は實際如何なるも勤勞及び苦行と認めらるべく、結果は結果と認めらるべし。さりながらもし誰か知識の足らざるにより己の行爲と苦行を神の果と思ふならば、これ彼は自から己を欺き、かくの如くなる己の意見を以て實に大なる神の果を自から奪ひて、顯然と誘惑せらるゝものなること見るべし。

第六章

樂み且喜んで己を全く罪に委ねたる者は、天性に悖る恥づべき情慾、たとへば放蕩、邪淫、貪欲、嫉妬、詐譎及び其他のよこしまなる始計を己れに有すること、天性と融合するものゝ如くならん、かくの如く實に完全に「ハリストアニン」たる者も大なる樂みと心神の愉快を以て、すべての德行とすべて超性的なる靈果、たとへば愛、平安、忍耐、信仰、謙遜及びその他の實に貴重なる凡百の德行を最早勞せずしてたやすく求め得ること、天性自然なるものゝ如くなるべくして、有害なる情慾の爲に最早勝たれざらん、何となれば彼はこれらより主を以て全く救はれて、善なる神によりハリストスの充分なる平安と喜とを心に受くればなり。彼は主に附きて、主と一神になれり。

第七章

靈神上の幼稚により、靈神上の愛に己を全く献ぐる能はざるものは、虔恭と信仰と敬神の心とを以て、兄弟に對する役事を己に擔當すべく、而してこれを勤むること、神の誡命の如く、又神的行爲の如くして、報酬或は尊敬、或は感謝を人々より己れに期待せず、不平或は高慢或は等閑と怠惰との爲に餘地を全くあたへざらんことを要するなり、此の普なる行爲の汚されず、傷はれずして、我等の虔恭と寅畏と喜びとによりいよ〳〵神を悅ばしめん爲なり。

第八章

かゝる仁愛と慈悲とを以て(神の憐みは實に大なり)主は誰をも善行の爲に賞なくして遺さず、凡の人を小なる德行より大なる德行に昇せ、一杯の冷水の爲にも報賞を失はせざらんことを慮りて、人々を寛恕し給ふなり。けだしいふあり『門徒の名によりて此の小子の一に惟一杯の冷水を飲ましめし者は我誠に爾等に語ぐ其賞を失はざらん』(マトフェイ十の四十二)、またいふあり『此の至と小き兄弟の一に行ひしは即我に行ひしなり』(マトフェイ廿五の四十)。たゞ爲す所のものを神の爲にして、名譽の爲にあらざらしめよ、けだしこれに加へて『門徒の名によりて』といへるは、これ即敬神の心をもてハリストスを愛するによりてとなり。しかれども表示のために善を爲す者を主は詰責し、斷然たる宣告を以て其言を確定し、これに添へていへり『誠に

汝等に語ぐ、彼等は既に其賞をうく。〔マトフェイ六の五〕

第九章

まづ第一に正直と誠實と相愛と喜悅と謙遜とは凡その方法により、兄弟の間に置かるゝこと、或る基礎の如くなるべし、我等互に相誇り、互に不平を鳴して、苦行を無益なるものとなさゞらんためなり。不斷に祈禱を務むる者は、いまだ同くこれを爲すあたはざる者等に對して自から誇らざるべし。また己を役事に捧ぐる者も祈禱を務むる者に對して、不平を鳴さゞるべし。かくの如き正直とかくの如き心情を以て兄弟等互に相待つときは、祈禱を務むる者の有餘は役事する者の不足を償ふべく、これに反して役事する者の有餘は祈禱を務むる者の不足を補ふべし。かくの如くならば、平等均一は尤善く守らるべし、錄していへる如し、『多く欲めし者にも餘ることろなく、少く欲めし者にも足らぬところなかりき』〔出埃及記十六の十八〕。

第十章

すでにいひしごとく、我等は互に相誇らず、たゞに美望するなきのみならず、正直と愛と平安と喜悅との交際により互に親和し、近者の進歩を以て當然に自己の進歩と思ひ、これを奪ふを以て自分の損失となす時は、神の旨は『天に行はるゝごとく地にも行はるべし』。祈禱と、兄弟に對する役事と、其他神のためにおこなはるゝ如何なる事にも怠りて、懶惰と等閑とに日を送る者を使徒は直ちに遊惰なる人と名づけて、麵麭を食ふにも當らざる者と宣言す、けだしいへり、遊惰なる者は食ふべからずと〔テサロニカ後三の十〕。また他の所にもいへり、遊惰なる者を神は憎み給ふと、また いふ、遊惰なる者は信者ともなる能はずと。また智慧書にいへり、『遊惰は多くの惡を教へたり』〔シラフ三十三の廿八〕。ゆゑに神の爲に行はるゝものはいかなる事たりとも、おの〳〵果を結ばんことを要す、〔たとへ何か一の善事に傾きて熱心すといへども〕、然らずば全く無結果なる者となりて、永遠の幸福にすべて與からざる者となるべし。

第十一章

たとへ善なる神をうけてこれに滿たさるゝを賜はりしといへども、完全に到達して情慾より充分免るゝを得る能はざるべし、とかくの如く主張する者の爲には、神

の書より證據をあらはして、彼等が事を惡しく了解し、誤りて說を爲すと共に、彼等自己の爲にも危險なるを必ず證せざるべからず、主はいひ給ふ『故に爾等純全なること爾等の天の父の純全なるが如くなるべし』〔マトフェイ五の四十八〕と、これ即完全なる潔淨を示すなり。またいふ『我が居る所に我と偕に居らんことを望む、我の榮を見んが爲なり』〔イオアン十七の廿四〕。これ『天地は廢せん、然れども我が言は廢せざらん』〔マトフェイ廿四の三十五〕との給ひし者の言なり。また使徒のいひし左の言も其意これに同じ、曰く『凡の人をハリストスに於て完全なる者として立たしめん爲なり』〔コロサイ一の廿八〕又いふ『我等皆信と神の子を識る知識の一なるに、成全の人となるに、ハリストスの全き成長の量に至るに迫ふ』〔エフェス四の十三〕。かくの如く完全を目ざす者は二の最美なる德を得ん、即彼等は盡力して間斷なき苦行を以て、此量に達せんとするの希望と、併て向上の希望により、終極に進行せん、されば高慢のために捉へられずして、己を謙遜し、己を小なる者と認めて、完全に未だ達せざる者とするなり。

第十二章

前文に言ふ所を主張する者は三の有樣を以て靈魂に最も大なる害を被らしめん、第一は神の書を信せざる者とあらはるゝなり。第二はハリストス教の高尙完全なる目的を自から豫想せずして、これに達するを盡力せず、勤勞と勉勵とを有して義に飢渴すること能はず、却て外部の狀態と、慣行と、或る小なる功勞とに滿足して、福なる希望と完全と悉くの情慾より全く潔くなるとを奪はるゝなり。第三はすでにいひし如く、小なる德行に進歩したるを以て己を頂上に達せりと思ひ、完全に進向せずして、謙遜と神の貪しさと中心の悲傷とを有すること最少なきのみならず、既に目的を達したるものゝ如く自から己を義として、日々の進歩と成長との爲には無力ならんとす。

第十三章

人々に神を以て行はれ、清き心の新造物となるを得る此大なる進歩を以て不可能事と思ふ者等を使徒は明に夫の不信のために約地に入るあたはずして、其屍の野に仆れたる者等に比するなり〔エウレイ三の十七〕。けだしこゝに明々に約地といへるはこゝに情慾より救はるゝを奧密に示すものにして、使徒のいふ如くすべて

の誠命の終なり。これぞ眞の約地にして、このすべては比喩によりて授けられたるなり。ゆゑに神によりて智なるパウエルも門徒の安然を慮り、不信の意見の爲に捕へらるゝ者のあらざらん爲に左の如くいへり。『兄弟よ慎みて爾等の中に不信の惡しき心を懷く者なからしめよ、活ける神より離れざらんためなり』〔ヘウレイ三の十二〕。離るといふ言は拒否の義に用ひしに非ずして、神の約束を信せざるを意味す。これ即ちイウデヤ人の爲に前表なりしものを比喩的にあらはし、これを眞實に適用するものにして、言ひ續くること左の如し、『蓋聞きし者の中に怒を激せし者あり、然れども〇イエイに從ひてエキペトより出でし者皆然せしに非ず、然らば彼は四十年間誰に向ひて憤りしか、罪を犯して其屍の野に仆れし者に非ずや、誰に向ひて彼の安息に入らざらんと誓ひしか、順はざる者にあらずや、是を以て我等は彼等が不信に由りて入るを得ざりしを觀るなり』〔ヘウレイ三の十六至十九〕。使徒は又これに加へていへり『故に我等畏るべし彼の安息に入る許約の尙存する時に於て恐くは汝等の中に之に及ばざる者あらん蓋我等にも福音せられしこと彼等に於けるが如し、然れども彼等には聞きし所の言は益を爲さゞりき、聞きし者の信を和せざるに由りてなり、安息に入る者は我等信せし者なり』〔ヘウレイ四の一至三〕。而して少しく後に又いへり、曰く、『我等其安息に入らんことを勉むべし、何人も彼の例に倣ひて不順に陷らざらんが爲なり』〔同上十二〕。されども「ハリステアニン」の爲に罪なる情慾より救はるゝと、潔き心に善なる神の充分靈驗に止居するとを除くの外他にいかなる慰安ありやゆゑに彼等を再び信仰に昇せていへり、曰く『誠の心と全き信とを以て心は惡しき意念より灑がれ、身は清き水に洗はれて、近づくべし』〔ヘウレイ十の廿二〕。またいへり『況んやイエスの血は汝等の良心を死の行より潔めて活ける眞の神に奉事せしむるをや』〔ヘウレイ九の十四〕。ゆゑに我等は恩を忘れざる僕の如く、神が人々に對しこれらの言を以て約せられたる限なき仁慈を信認し、此等の約束を以て眞實確固なるものとなさんを要す、蓋し我等はたとへ意志の不活潑と薄弱とにより己を造成者に全く献げず、德行の高上完備なる階段に達するに汲々として進まずといへども、少なくも思想の正しくして不愛なる狀態にあるが爲、及び健全なる信仰の爲に或る憐といへどもうくるを得ん爲なり。

第十四章

適當におこなはるゝ祈禱と傳道の行爲はすべての德行と誠命とより一層上なり。

主は自からこれが證者たりけだしマルファとマリヤの家に來り給ひしや、マルファは役事に忙しかりしも、マリヤは主の足下に坐して、其の神妙なる口より出づる美言を樂めり、ゆゑにマルファが彼の己を助けざるを責め、パリストスに就きてこれを訴へしとき、主は第二者に對し第一者に特典をあたへて、左の如くの給へり、曰く『マルファよ、マルファよ、爾は多の事を慮りて、心を勞せり、然れども需むる所は一のみ、マリヤは善き分を擇びたり、是は彼より奪ふべからず』〔ルカ十の四十一、四十二〕。しかれども主が此の如くの給ひしは我等すでに認めし如く、役事を非難したるにあらずして、小なる者に對し大なる者に特典をあたへしものなること疑なし。然らずんば何故に主は此役事をゆるし給ひしや。また何故に自からも門徒の足を洗ひて此事の實行者とあらはれ給ひしや。然のみならず、主が役事を禁せんとする意のなかりしことは門徒等にも互に同じく行爲すべきを命ずるにて知らるゝなり。しかれども最初食卓の事をつとめたる使徒等もみづから祈禱と傳道とを以て更に高上なる行となしたること亦見るべし、けだしいへり『我等神の言を舍きて食卓の事に務むるは宜しからず。故に兄弟よ爾等の中より善き證を得、聖神と智慧とに滿てられし者七人を擇べ、我等之を立てゝ此の事を司らしめ、我等は專ら祈禱と傳敎とを務めん』〔行實六の二―四〕。見るべし彼も此も二の善根よゝ發ずる萌芽なるを知りたれど後者よりも前者を特に重んじたるを。

第四　説教

忍耐と細心

第一章

神の言に從はんと欲して善果を結ぶ者には、左の徵候を伴ふ、即嘆息なり、憂愁なり、俯視なり、默なり、俯首なり、祈禱なり、穩靜なり、一處に在留するなり、悲痛なり、敬虔の爲に苦心するなり、而して其行事は、似醒なり、禁食なり、節制なり、溫柔なり、大量なり、不斷の祈禱なり、神の書を講習するなり、信仰なり、謙遜なり、兄弟の愛なり、從順なり、勞苦なり、艱難なり、愛情なり、慈悲なり、正直なり、及び完全なる光なり、即主なり。しかれども生命の果を結ばざる者の徵候は次の如し、閉塞なり、高慢なり、謬見なり、不謹慎なり、不平なり、愚昧なり、而して其行事は貪食なり、忿怒なり、憤激なり、好んで人を議するなり、高慢なり、時ならざる多言なり、不信なり、不定なり、遺忘なり、擾亂なり、

貪利なり、貪銀なり、嫉妬なり、奸計なり、侮慢なり、空談なり、時ならざる嗤笑なり、自恣なり、及び全くの闇黑なり、即「サタナ」なり。

第二章

神の照覽によりて惡者が嗣ぐ所の地獄に直に遣はされず、人を誘ひ且試みんが爲に殘さるゝは、これ彼の爲に欲せざるも、諸聖者をして、忍耐により、更に義なる者とならしめんが爲にして、彼等の爲には大なる光榮の原由者となり、彼自己の爲には惡に固執すると諸聖者に對する陰謀とを以ていよ〳〵義なる罰を備へんが爲なり、神の使徒のいふごとし、曰く『罪の極めて罪なる者とならんが爲なり』〔ロマ七の十三〕

第三章

敵はアダムを誘惑して彼の主人となり、彼より權をうばひて自から此世の君と稱せり。しかれども最初に主は人を立てゝ此世の君となし有形物の主人となしたり。されば火も人に勝たず、水も溺らさず、猛獸も人を害せず、有毒なる動物も其勢力を人に加ふるわたはざりき。さりながら誘惑に一歩を讓りし後、人は其主權を以て誘惑者に與へたり。ゆゑに巫者及び妖術者は反對なる力の働により、神の寛容に乘じて妖人となり、有毒なる動物に權を有して、火と水とを往來するを能くせしこと、モイセイに敵したるイアンニイ及びイアムブリイの如く、〔ティモテ二の三の八〕又長坐たる使徒ペトルと爭ひしシモンの如くなりき。

第四章

思ふに敵はモイセイの面に輝ける光榮がアダムの最初の光榮に似たるを見て、これにより己の國の敗滅のことを推知し、少なからず驚かされしならん。されば「死はアダムよりモイセイに至るまでアダムの如き罪を犯さゞりし者にも王たり」〔ロマ五の十四〕といふ使徒の言をもこゝに關係して言ふは何も妨げざるなり。けだし我意ふに表揚せられたるモイセイの面は神の手を以て造られたる第一の人の像と肖とをおのれに留めしならん。されば死、即死の原因者たる魔鬼は當時此を見て最早己の國の滅亡を察したりし如く、此滅亡を實に主よりうけたりき。ゆゑに眞實なる「ハリステアニン」は今も猶此光榮を衣るべくして、神的光榮が適切に且全く疑な

く其靈魂に輝き始まるときは、死又は耻づべき情慾は彼等に對して最早力を有せずして、彼等の內部に於て活動せざるものとならん。

第五章

敵はアダムを誘惑するに婦を以てしたること、或る同じきものを以てしたる如くして、其衣たる所の光榮を彼よりうばへり。かくて人は裸體なる者とあらはれて、これより先に見ざりし己の醜狀を認めたり、何となれば人の意思は天の美麗を以て樂みたりしによる、けだし犯罪の後人の意念は地に屬するものとなり、地下に御匐するものとなりて、純善なる才智は人に於て肉に屬する邪惡なるものと混じたりき。しかれども樂園が閉されて、ヘルツィムに炎劍を以て人のこれに入るを禁ずるを命ぜられたることは、これ實に錄する所の如く顯然にこれありしを信ずると共に、各人の靈魂には此事の隱然に行はるゝを見るべし。けだし心は暗黑なる覆を以て周圍を包まる、(暗黑とは世の神の火をいふ)されば心は才智に神の前に立つをゆるさいる如く、靈魂にも自己の意志により或は祈禱し、或は信じ或は主を愛するをゆるさいるなり。此のすべてに於て經驗は夫の不斷祈禱を務むる時にも、又格鬪する所の敵に向つて猛進する時にも、實に己を主に從はしめたる者の爲に師となんとす。

第六章

此世の君は卽教鞭にして、精神の幼稚なる者に傷を負はしむる笞とも云ふべし、彼は先にもいひし如く、此憂愁と試誘とを以て、大なる光榮といよ〳〵大なる尊敬とをそなへん、何となればこれにより人々は最完全なる者となるべくして、己の爲に愈大なる最苦しき教訓を備ふればなり。けだし總て彼によりて或る最大なる攝理は建設せらるべくして、或處に言ひし如く、惡者は己が不善なる意旨を以て善なるものに助くるなり、何となれば善にして善なる意旨を有する靈魂の爲には憂ふべき如くなるものも轉じて終に善なるものとなればなり。使徒が「神を愛する者には凡の事助けて善に進ましむ」(ロマ八の廿八)といひし言も亦此義を有するなり。

第七章

此の教鞭をゆるさるゝは、たとへば火爐の中に燒かるゝ器の如く、試錬に堪ふる者

は、これによりいよ〳〵堅固なる者となれども、堪へざる者は火の烈しく燒くを忍耐し得ざるにより、其弱質を證せられん爲なり。しかれども主宰の僕たり又造物たる魔鬼は其意の願ふだけ誘ふにあらず、又自から欲する量にしたがひ患難をかうむらしむるにあらずして、主宰の旨の寛容してこれをゆるすだけに止まるなり。神はすべての人の狀態と、各人に幾ばくの力あるを確に知り、其量にしたがひ放任して試誘にかゝらしむるは、使徒もこれに注意する如し、けだしいへり、「神は信なり爾等が誘はるゝこと爾等の能する所に過ぐるをゆるさず、乃試誘と共に逃るべき法を備へん爾等の堪ふるを得んためなり」〔コリンフ前十の十三〕。

第八章

主の言ふ如く尋ねて門を叩き、終に至る迄願ふ者は求むる所のものをうけん、たゞ彼は勇氣を有して、思を以ても口を以ても不斷に切願すべく、世事のためにつながれず、有害なる情慾を樂しまずして、身體の勤めに弱らず止まるべし。けだし「凡そ祈禱の時信じて求むる所は悉くこれを得ん」〔マトフェイ廿一の廿二〕といひし者は誠らざるなり。しかれどもし誰か誠命せられし所のものをすべて行へども期する所の恩寵をうけずんば、此世に於て何の益もあらざるべしと、かくの如く稱說する者は、事を惡く了解して、言ふ所は神の書と合はざるなり、何となれば神に不義なければなり、もし我等は當然なる事を成さば、神よりする所のものを神は忽にし給はざるなり。たゞ汝の靈魂が此の不幸なる身體より脫する時に當りて、奮鬪する者、敏速なるもの、許約を待つ者、堅固なる者、篤く信ずる者、謹慎して尋ぬる者と認められんことを慮るべし、ゆゑに汝に告ぐ、確信すべし、喜んで逝くべし、勇氣を有すべし、さらば天國に堪ふる者とあらはるべしされば、「我れ弱きに於て信と熱誠とにより言ふ、かくの如き者は最早神と親與せん。」凡そ慾を懷きて婦を見る者は心の中已に之と淫せしなり〔マトフェイ五の廿八〕といふ、然らば彼はたとへ身をけがさずといへども、最早姦淫に罪せられん、かくの如く心にて惡者に遠ざかり、願ひ且尋ぬるを以て、即懇切に止まると愛神の情とを以て主に附く者は、最早神と親與を爲すべくして、此の時より大なる賜を神よりうけん、即善なる勉勵と德行の生活を以て懇切に祈禱に止まるを得ん。それ一盃の冷水を與ふるさへ賞なくして存せずんば、まして神に忠順にして日夜願ふ所の者には、約する所のものを與へ給はざらんや。

第九章

『余は兄弟に對して怨を懷かざる、或は他の惡者の爲に時として不意に陷れらるゝを自覺せざらん日はあらず、これ何ぞや』とかく言ひて疑ひ惑ふ者には、左の如く告ぐべし、人に於てすべての苦行とすべての勉勵は惡者と惡なる意念とに抵抗せん爲なり。さりながら情慾の暗と肉體の念慮とにかくるゝ死は、陰に陽に其の或る結果をあらはさゞる能はず、即邪惡をあらはさゞる能はざるなり。たとへば身にうけたる疵は、全く愈されざる間は、これが爲にすべて注意し、これを療するが爲に必要なるものを少しも辭せざる時といへども、幾分か膿におはれざるあたはずして、不注意により放棄せられたる疵は時として全身に腐爛敗壞を生せん、心の情慾をも此の如く想ふべし。それ大なる勉勵の際にも情慾は內部の火を以て腐爛するを續けん、さりながら續て注意して懈らざるときは、パリストスの恩寵と助とにより完全なる愈をうくるなり、けだしアダムの犯罪により人の潔き天性に悖りて全人間に輸入したる情慾の或る秘密なる汚穢と、或る多大なる暗のあるありて、これは身體をも靈魂をも共に暗ましし且汚すなり。さりながら鐵は燒くと打鍛ふるとによりてきよめられ、或は銅或は鐵に混じたる金は一の火にて分析せらるゝ如く、救世主の至淨なる苦を以て燒かれ、善なる神を以て打碎かるゝ靈魂もすべての情慾とすべての罪より潔めらるゝなり。

第十章

一の油に滿たされ、一の火を點せられたる或る多くの燈は、火の光を一樣に發せざること屢なり、かくの如く恩賜も善なる行の差異により善なる神の種々なる照燿を有するなり。或は市に同一の餅と同一の水とを用ふる多くの住民あらんに、一は肥者にして一は嬰兒、一は童子にして一は老人、其間に大なる不同差異あらん、或は同一の田に蒔かれたる麥は自から種々の穗をあらはせども、其後一の物置にあつめて、一の倉に持込まるゝなり、かくの如く死者の復活に於ても、種々なる光榮を以て表揚せらるべくして功勞の價値により、尙此世に於て彼等に居りたる神の神をうくるにより、復活は種々に異なるを想ふべし『星と星と其榮を異にす』(コリンフ前十五の四十一)といふは亦此意を示す。

第十一章

それ此一事は人の聖神により更生して、人に居る所の罪より覺醒するがために注意の歸する所となるべし、何となれば聖神によりて生るゝ此更生も或る程度により成全の狀態を有するは、形狀と肢體とに於てして、能力或は智力或は勇氣に於てするに非ればなり。けだし成全の人となり成長の齡に達したる者は幼期に屬する事を息むるは常なり。『預言は息み方言は絶ゆ』〔コリンフ前十三の八〕と使徒のいひしも亦これを意味す。それ成人となりし者は童子に適當なる食物も言語もうくるに堪へずして、最早これを見て不快に思ふべし、何となれば生活の他の狀態に入りたればなり、かくの如く成長して福音の德行の成全に達せし者も、幼期に屬するものを成全に進めん、神の使徒はいへり『人と成りて後は童子の事を息めたり』〔コリンフ前十三の十一〕。

第十二章

神によりて生れし者は、我等がいひし如く、或る意味に於ては成全なり、是れ猶或る嬰兒をも成全なる者も名づくる如し、けだし悉くの肢體を完全に已れに存すればなり。且神が神と恩寵とをあたふるは、人の罪に陷らんが爲にあらず、かへつて人々はみづから恩寵にみちびかれず、隨て惡の爲に捉へられて、其惡行の原由者となるなり。人はもし懈怠し、或は侮慢し、或は自誇の爲にみちびかるゝならば自己天然の意念に依ても陷るべし、けだしパウロの言ふ所をきくべし、曰く『我が高ぶらざらん爲に一の刺は我が肉體にあたへられたり、即サタナの使なり』〔コリンフ後十二の七〕。見るべし如此の階段に達せし者も警戒に必要あるを。しかのみならず、もし人は自からサタナに手綱をあたへずんば、サタナは強て人を統御せざるべし。故に此行爲は人に於て神的生活を伴はざる、即善行を伴はざる神的生出ハリストスの部分にも反對者の部分にも數へ入れられず、たゞ終に至るまで恩寵に忠なる者となりて存する者はハリストスの部分に屬する者となるべし、されどもかくの如くならざる者は、たとへ神を以て生れたりとも、即聖神に與かる者となりたりとも、サタナの旨に從ふの權を已れに有するなり。しかれどももし主は自から已の權を強て執り、サタナも已の權を強て執るならば、人は自から已の爲に或は「ゲエンナ」に陷り、或は天國を受くるの原由者とならざらん。

第十三章

德行を愛する者は優勝なる思慮を有せんを心惡くると肝要なり、善と惡とを分つに誑されずして、惡者の多種多樣なる奸計を察せんためなり、けだし誠らしき表現を以て多くの者を誘惑し、少なくも全く安然有益なりと人に會得せしむるは惡者の慣手段なればなり。故に其誘惑と無形なる力の暗示とには、たとひ天使等の自から爲す所といへども、輕騷に且急遽に從ふなかれ、徐々としてこれを最詳細に試むべく、美なるものをば取りて己れに有じ、惡なるものをば斥くべし。けだし恩寵の働は公明ならざるなし、然るに罪は善の假面を己れに被むるといへども、此働を生ずるあたはず。使徒の言ふ如く、サタナは人を誘惑する爲に光明の天使にさへ變化するを能くすれば、(コリンフ後十一の十四)彼は光明なる現象をもあらはさんしかれどもすでにいひし如く、善なる働を生ずるあたはざるなり、これ彼の確なる徵候と爲すべし。彼は神又は近者に對する愛も、溫柔も、謙遜も、喜悅も、平安も、思の齊整も、世に對するの嫌も、靈性の慰安も、天上の果を願ふことも、情慾及び奢侈を抑ふることも、生ずるあたはずして、此のすべては明に恩寵の生ずる所なり。けだしいへり、神の果は愛なり、喜悅なり、平安なり云々(カラティヤ五の廿二)サタナは驕傲と高慢とを迅速に勸め入るゝに妙を得、且これを能くす。ゆゑに汝の靈魂に輝き始めたる神的の光は神よりするか、或はサタナよりするかを眞實に辨別すべし。さりながらもし靈魂は健全なる思慮を有するならば、神的感覺により此區別は直ちに明白となるべし。酢と酒とは形に於て一樣なれども、喉は味覺を以て彼を此との性質を分つ如く、靈魂も神的觸覺と作用とによりて、神の賜と他の空想とを區別するを得るなり。

第十四章

靈魂の爲に注目し且預覺することは大に肝要なり、反對者の力が甚だ暫時に靈魂を捕へざらんためなり。動物はその一肢體が網にかゝるならば、必ず全く自由を失ひて、捕者の手にわたされん、かくの如く靈魂もこれと同樣なる禍を常に敵よりうくるなり。されば預言者はこれを明にあらはしていへり、曰く『彼等は我が足のために網をまうけたり、我が靈は弱れり』(聖詠五十六の七)

第十五章

狹き路によりて强者の家に入り、其器をうばはんと欲する者は、身體の强壯を以て

足れりとせず、左に言ふ所を記憶して、善なる神にて堅められんこと肝要なり、曰く『血肉は神の國を嗣がず』(コリンツ前十五の五十)しかれどもいかにせば神にて堅めらるべきか、使徒のいふところに注意すべし、曰く『神の智慧は人々愚と爲す』(コリンツ前一の廿三)また預言者もいへり、我人の子を見しに『其の貌はみにくゝすべての人の子より劣れり』(イサヤ五十三の三)、故に神の子とならんと欲する者は、人見て愚者となし、不正者と爲す時は、まづ第一に主の如く謙遜し忍耐し、其面を唾汚より避けず、此世の榮譽美麗又はこれに類するものを捜さず、首を枕する所を有せず、辱めと卑めとを忍び、衆人に輕侮蹂躙せられ、陽に陰に攻擊をうくるも智を以てこれに抵抗せんこと肝要なり。然る時は『汝等の中に居り且行かん』(コリンツ後六の十六)と自からの給ひし神の子は、自から彼の心に現れん、されば彼は強者を縛りて、其器をうばひ、毒蛇と蜥蜴と蛇と蠍とを蹂躙するために力と強さとをうけん。

第十六章

死を挫折する大なる苦行は我等が前にありげだし言ふあり『神の國は汝等の中にあり』(ルカ十七の廿一)しかれども自から我等とたゝかひてわれらを虜にする者も、或る狀態を以て我等の中に居ること現然たり、ゆゑに靈魂を捕ふる者を死に定めざらん間はいかにしても靈魂を弱はらすべからず。しかるときは凡の病と哀と嘆息は逃れ去らん、何となれば『乾ける地に水は衝突し』『荒野も變じて多水となればなり』(イサヤ三十五の六)。

第十七章

煩悶の爲に易すく捕へらるゝ靈魂は不信にも勝たるゝこと明なり、ゆゑに救の言をうけずして、日々に遷延し、內部の戰をおのれに認めず、自負のために圍む所となりて、夢を見てさへ己を惑はすこと稀なりとせず、しかれども自負は靈魂を昏まし、如何しても己が弱きを認識せしめざるなり。

第十八章

新に生れたる嬰兒は成全なる人の像をおのれに存す。かくの如く靈魂もこれを造れる神の或る像なり。兒は漸々に成長して漸々に父を認識すべく、而して年齢に達するときは、父と子と、子と父との間の一致が定まりて、父の財寶は子に打明かさる

ゝなり、かくの如く靈魂も悖逆に至る迄は進歩して成全の人に達すべかりき。しかれども悖逆によりて靈魂は遺忘の海と迷謬の深きに沒して、地獄の門に居れり、されば大なる距離の隔たる如く、神より離れ遠ざかりたれば、神に近づきてこれを造りし者を全く識るあたはざりき。さらながら神は先づ第一に預言者によりて靈魂をおのれに歸せしめ、これを呼び、これを誘引して、神を認識せしめたり、終に彼は自から來りて、遺忘を除き、迷謬を去り、其後地獄の門を破りて、迷ひし靈魂に入り、其前に己を置て標準となし給ひしは、これにより靈魂をして年齢の量に神の完全に達するを得しめんためなり。ゆゑに神の言は攝理によりて惡者の爲に試みられ、其後讒毀侮蔑、凌辱をうけ、狂妄なる人々の手にて頰を打たれ、終に十字架の死をうけ、これを以て我等が既にいひし如く、我等を讒毀侮蔑し、或は死を以てさへ脅かす者に對していかなる心情を有すべきかを示し給ふ。これ彼の聲なる者等の爲に人は自から聲なき者となり、己の口を啓かざる者とならん爲なり、又惡謀の働きと巧なるを見ては、釘を以て十字架に貫かれし者の如く『大なる聲を以て彼を死より救ふを能くする者に』呼んで（エウレイ五の七）『我が隱なる咎より我を淨め給へ』といはん爲なり（聖詠十八の十三）又『我を制せしむるなかれ、然せば我玷なからん』（同十四）といは、ん爲なり。其時には我等玷なき者となりて『萬有を彼に服せしめたる者』（コリンプ前十五の廿七）を有すべく、ハリストスと共に王となりて、安息せん。けだし悖逆の結果により物質的なる不潔の意念の爲に呑まれたる靈魂は無智なる者の如くなり、故に靈魂は無始なる智と融合するを得んがために、如此の物體より脱し、惡謀の巧なるを悟りて、これより自由にならんには少なからざる勞を要するなり。

第十九章

人よ、もし汝は自から思變へて、先きに汝が有したれど悖逆により失ひし榮譽を己れに挽回せんと欲せば、先に神の誡命を忽にして敵の命令と勸言とを勉めて聞きし如く、今はその服從する所の者を棄てゝ主に歸すべし。然れども知るべし、汝は大なる勞と共に、錄していへる如く、汝の面に汗するにより、己の富を求め得べきを、何となれば勞なくして幸福を得るは汝のために益なければなり。けだし勞なくして受れば、汝は受けたるものをうしなひて、其嗣業を敵にわたすべければなり。ゆゑに我等各人はいかなるものを何時うしなひしを認識して、預言者と共に大に哀んでいふべし『われらの產業は外國人に歸し、我等の家屋は他國人の有となれり』と（イエ

レミヤ哀歌五の二)何となれば我等は誡命に背き、己の欲望に輸け、不潔なる此世の意念を以て樂しめばなり、ゆゑに我等が靈魂は當時神より大に遠く離れて、われらは父を己れに有せざる孤子の如くになれり。これにより靈魂の爲に慮る者は力ある丈努めて惡なる意念と『凡て神の知識に逆ふ高慢』とをしりぞけんを要す(コリンつ後十の五)されば如此の盡力を加へ、神の殿を汚さずして守る時は、許約せし者は我等の中に居り且行かん。其時靈魂は己の闘業をうけて、神の殿となるを得ん。けだし主は自から其軍を以て惡者を逐ふて、最早我等に王とならんとすればなり。

第二十章

造物主が直接明白にカインにつげて『汝は地に吟行ふ流離子となるべし』(創世記四の十二)といひし言は、神秘なる意義に於ては、悉くの罪人の或る前兆と狀態となりきゞだしアダムの族も誡命にそむきて有罪者となり、かくの如くして翻覆不定なる意念のために動搖せられて、畏懼援亂にみちみたされ、これと同時に敵は自から神より更生せられざるすべての靈魂を欲望と種々なる快樂とを以て煽動して、これを振撼すること篩中にある麥の如くせんとす。ゆゑに主は自から惡者の望に從ふ者等につげて、彼等がカインの奸計の有樣を自から己れに存するを示し、彼等を責めていへること左の如し、曰く『汝等はなんぢらの父の慾を行はんと欲す、彼は始より殺人者にして眞實に立たざりき』(イオアン八の四十四)。

第二十一章

此世の王の顏を見るは人々の爲に幾何希望する所にして、いくばく其心を引くを思ふべし、されば凡て王の居る所の城市に來らん者は、少なくも貴重にして美麗なる王の衣服を見んを希ふ、たゞ神的に生活する者は此事に注意せずして、これを高く價値せざるべし、何となれば他の美の感に刺されて、他の光榮を希望すればなり。それ肉に屬する人々のために死すべき王の顏を見るをかくの如く希望するならば、矧んや善なる神の或る滴の注ぎて、神聖なる愛を以て其心を刺されたる者に於ては、不死なる王の顏を見るを特に大に愛すべきにあらずや。ゆゑに彼等がすべて此世に於るの愛情より脫するは、此の神聖なる愛を不斷心に有して、これよりも重んずべき他のいかなるものをも有せざらんためなり。さりながら善なる始にかくの如きの終を適用し、終に至るまで躓づかずして止まるものは甚だ少し。多くの者

は悔悟の情を發し、多くの者は天の恩寵をうけて、神聖なる愛の爲に刺されども、遇ふところの勞と惡者が種々樣々なる奸計を以て構造する試惑とを忍耐せず、精神の懦弱と無力との故により、或は地に屬するものに懸々たるにより、世に止まりて、世の深きに沒するなり。しかれども終りに至るまで危險なく進行を遂げんと志す者は、此の天上の愛に他の戀情と他の愛の混ずるを容忍せざるべし。

第二十二章

神が許約せられたる幸福の大にして測るべからざる程は望と信とにより行はるゝ多くの勞と苦行とを要するなり。こは左の言に依りて明かに見ゆ、曰く『人もし我に從はんと欲せば、己を捨て其の十字架を負ひて我に從へ』(マトフェイ十六の廿四)又いふ『人もし我に來りて其父、母、妻子、兄弟、姉妹、又己の生命を惜まずば、我が門徒となるを得ず』と(ルカ十四の廿六)。しかれども人は大概天國をうけ、永生を嗣ぎ、パリストスと共に水遠に王たらんを願へども(こは尤高尚にして凡の觀念より一層上なり)、自己の望のまゝに生活して、これに從ふ程愚なり、確言すればかくの如く虛妄にして明に有害なる意思を播く所の者に從ふ程愚なり。

第二十三章

凡そ世の欲望と、自己と世のすべての虧散と快樂と世事の憧擾を全く嫌ふ者は終りに至るまで躓づかず進行を成し遂げん。けだしこれ卽己を捨つるなり。ゆゑに勞苦を寶に己れに任はずして己を捨つれども、彼の神聖なる愛と共に世に何を以てか樂まんを願ひ、其意志の向ふ所を全く神に捧げさるにより、おの〳〵自己の意志の爲に天國より投出さるゝなり。我等が研究する事は一の例を以て說明せらるべし。凡そ人は其遂げんと欲する所の事の如何なるにせよ、何とも適應せざるを善く辨別すべくして、こは彼より隱れざるなり。けだし先づ彼の心中內部に疑は顯はれん。彼の良心に於て秤量と秤量の指針は、或は神を愛し、或は世を愛するの顯然たる重量を最初內部にあらはして、其後外部の事に關しても同く露出するなり、何となればすでに述べたる如く凡の人はこれを善く辨別するによる。例へば己の爲に反駁していはん『我れ言ふべきか、否、言はざらん、我を責むる所の此詰責に答ふべきか、否默するに若かじ』と。神の誡命を操持すれど、自己の名譽をも側に置かず。己を全く捨つるを決意する者あらざるなり。もし世に對する愛の偏向はたとへ多からずと

いへども、心中に於て過重するあらば、直に惡言は口頭にも出で來らん。然して其後智は內部に張る弓の如く、舌を以て近者を射て、惡は手に達し、或時は傷を負はせ、且は殺すにも至らん。此の暫時の間なる心の發動が何を以て始まりて、如何にも恐ろしきに至るは此により察するを得ん。ゆゑに知るべし各自の罪と企とにつきても、これと同じき場合のあるを。惡習は此世の慾望と肉體の快樂とを以て靈魂の意志に媚びてこれを誘はん。されば、かくの如くして姦淫は預備せられ、かくの如くして偸盜、かくの如くして貪利、かくの如くして虛誇、かくの如くして凡そいかなる惡しき所爲も預備せらるゝなり。

第二十四章

最美なる企業も虛榮の爲に成就せらるゝこと屢々これあり、神はこれを偸盜、頑鬧及び他の大なる諸罪と同樣に罪するなり。げだしいふあり、「神は佞者の骨を散さん」〔聖詠五十二の六〕。かくの如く敵は最善なる行事を以ても人に媚びて其意を悅ばせんを欲す、何となれば彼は欺騙者にして、奸計において種々熟練すればなり。

第二十五章

人が現世に於て最愛する所のものは、人の意思を苦しむること、恰も引て下に推し、人をして躍起するをゆるさゞるが如し。かくの如き者等には心意の平稱もあり、偏向もあり、過重もありて、これに係屬するものゝ如し、而してこは、ハリスアニン」が或は市に、或は山に、或は修道院に、或は田間に、或は曠野に居るに拘はらず、全人間の爲に試となるべし、何となれば愛する所のものゝ爲に隨意に捉へらるゝ者は其愛をいまだ全く神にさゝげたるにあらざること明なればなり。例へば或者は財產を愛し、他者は金を愛し、或者は腹を滿たし、又は肉體の大欲を悅ばすを愛せん、されど或者は暫時にして亡ぶべき榮譽の爲に該博なる智慧を愛すれども、或者は權勢を愛し、或者は人々より尊敬をうくるを愛し、或者は怒と憤激するとを愛せん、其意謂へらくこれ其友に忠なるを證するものなりと。他者は無用なる談話を愛し、或者は たゞ 醉散し、又は空談を聞き、又は師となるを愛せん、これ人間の名譽の爲なり、或者は安樂と怠慢に耽り、或者は衣服の裝飾を喜ぶ、此は睡眠を喜び、彼は頓智をたのしむ、或者は世に小なる或は大なる事のために繫がれて、それが爲に占領せらるゝ、其者を養休せしめざるなり。げだし人は如何なる情慾とも勇氣にして戰はず、凡ての方法を以て抵抗せずんば、其情慾は人を引て此を執ふること、或る械繫を以てす

る如くならん、されば屈服せられたる彼は其意思を神にあげて、彼獨りに事ふるあたはざるなり。さりながら己の志望を實に主に向はしめたる靈魂は、すべての願を主に向け、己を捨てゝ、自己の智の望む所に從はざるなり。

第二十六章

人が己の意志によりて亡ぶることは例を以てをしふるを得べし。けだし世には或物を愛するにより、火に投じ、海に溺れ、己を捕虜となすあり、人あり家或は里が偶然に燒けたりと想ふべし。これにより己を救はんと欲する者は失火と知るや、たゞ己の生命の外何も慮らず、裸體にして奔りぬ、しかれども他者は一家の或什物をも火より救はんとの意を生ぜしにより、これを取らんがために止まりしが、そのこれを取らんと欲したる時、火は最早全家を圍み、彼自身を捉へて、これを燒けり。見るべし彼は自己の意志にしたがひ、此世の物體に懇々くして、現に自己よりも多く愛したるにより、火に亡びたるを。また人あり難船に遭ふあらんに、己を救はんと欲する者は、衣を脱し、裸體にして水に投せん、かくの如くして其生命を救ふことは彼の爲に能くし得らるゝなり、しかれども自身と共に或る衣服をも救はんを願ひし者は、水に溺れ、小なる利欲（いかなる災難ぞ）のために自から己を亡ぼせり。また敵の來襲せしことの風聞が傳はれりと想ふべし、一者はこれを聞くや、何も慮らず、直ちに足力にまかせて奔りぬ、しかれども他者は風說に信を置かず、自身と共に或る物件をも携へ去らんと欲し、其後躊躇して侵入したる敵の爲に執へられたり。見るべし人は自己の意志にしたがひ、油斷により、及び世に屬する或物に懇々たるにより、身體と靈魂と共に滅亡にかゝるを。

第二十七章

神に對する完全なる愛を全く求め得て、浮世の快樂と欲願とをすべて無視し、惡者の誘惑を大量に忍耐するは少數の人なり、さりながらこれがために落膽して怠慢と共に善なる希望を棄つべからざるなり。多くの船艦は難破の危きに遇ふありといへども、海を渡りて港に入るものも疑なくこれあり。ゆゑに信と忍耐と謹慎と苦行とは我等に多く要用なり、然のみならず大なる善智を以て、又大なる思慮を以て善に飢渴することも必要にして、熱心と願に切なることも亦同く要用なり、けだし我等が先にいひし如く、多くの人々は勞と汗となくして、天國をうけんと欲す。彼等

は諸聖人を讃美し、其の光榮と賜とを願へども、諸聖人と同樣なる艱難勞苦及び辛酸を共に與にするを欲せず。然のみならず、姦淫者も稅吏も如何なる人々もみなこれを希ふ。しかれども誘と試とのこれに先だつは、主宰を實に愛する者の顯然としてあらはれん爲なり。然らば彼等は當然に天國をうけん。

第二十八章

許約と榮譽と天の幸福をうくるとは艱難、辛苦、忍耐、及び信仰の中に隱るゝを悟るべし。それ地に投せられたる麥粒或は絢接せらるゝ樹は必ず先づ腐敗と汚辱とをうけざるべからずして、其後彼は己の美麗なる衣服の果をしば〳〵受けん。しかれども、もし彼等は此の腐敗と此の汚辱ともいふべきものを經由せずんば、此の最後の美麗と此の美はしき形狀とを衣ざらん。使徒も此意味をいへり、けだし曰く『我等多くの艱難を歷て神の國に入るべし』〔行實十四の二十二〕また主もいひ給へり、曰く、『忍耐を以て汝等の靈を救へ』〔ルカ二十一の十九〕又いふ『世にありて艱難をうけん』〔イオオン十六の三十三〕。

第二十九章

我等各人は信仰と勉勵とにより聖神に與かる者となるを賜はりし量にしたがひ、身體も彼の日に於て表揚せられん。けだし今日內部に我が靈魂の中にあつめたる實は、外部に即其身體にあらはるゝなり。これが例證を我等は樹に於て見ん。冬過ぎて、太陽輝々として大なる勢力にて照し、適當に風吹き渡る時は、樹は其外部に萠芽を發して、枝葉花實を衣ること衣服の如くならん。これと同じく草花も此時に地の懷より生じて、地はこれに掩はれ、これを衣ること美麗なる褸を衣る如くならん。身體もかくの如く、今日其中に居る所の得も言はれざる光と神の力とを以て榮せられん。此等のものは其時に身體のために衣服となり、飲となり、食となり、樂となり、喜びとなり、平安となり、及びすべてとならん、即永遠の生活とならん。

第五　説教

智を高尙にする事

第一章

福たるモイセイは其面に照り輝きて、一人も見るあたはざりし神の光榮を以て、我

等に傚をあらはせり、即義人の復活に於て聖者の身體が今日尚聖者の信誠なる靈魂の内部の人に有するを賜はる所の光榮を以て表揚せられんとするものをあらはせりけだしふあり『我等は露れたる面(即内部の人)を以て主の光榮を覩て、其像に變せられ光榮より光榮に進む』(コリンフ後三の十八)またモイセイの事をしるしていへり、彼は四十晝夜食をも飲をも思ひ出さゞりしと、しかれどもこれ人間の天性に屬するにあらずして、これたゞモイセイが神的食飲をうけたるに外ならず、即聖なる靈魂が今日尚神よりうくゝる所の其物をうけたるなり。

第二章

諸聖人の靈魂が尚此世に於て己を富ます所の光榮は、復活に於ては裸なる身體をおほひ、且これに着せて、彼等を天上に取去らん、されば其時に彼等は相共に身體を以ても靈魂を以ても神の國に於て不斷に安息せん。神はアダムを造りしも鳥の如き有形なる羽翼は彼にあたへ給はざりき、何となれば復活の後、彼に神的羽翼をたまふ、これにより彼は騰上して、疑なく神が取去る所に取去られんとするによる。しかれども此の智なる羽翼は今日も尚諸聖人の靈魂にわたへられて、此羽翼は諸聖人を天の智慧に引上せん、けだし、ハリステアニンは他の世界と他の衣服と他の食卓と他の樂あればなり。けだしハリストスは神の書にをしふる如く世の始より死せし者を復活せしめむために天より來るべくして、ハリストスが復活せし者を二部に別つ等の事も我等の知る所なり。

第三章

「ハリステアニン」の生活に出來る丈愈完全に進歩せんとの慮を有するものは才智の事、理性の事、及び靈魂の主宰力の事を特に全く勉勵して慮らんことを要す、これ善と惡とを精確に辨へ、天性に逆ふて輸入したる情慾を潔き天性より區別し、理性を目の如く益用して躊かず生活し、惡の引誘に同意せざるを得んためなり。けだし靈魂には願あり、即身の肢體を五感の爲に壞られずして潔く守り、己を世の引誘より防ぎ、心を守らんとの願あり、これ其意念を世の廣きに散らさず、これを八方より集中して、此世の慮りと快樂とを遏めんためなり。ゆゑに主は人のかくの如く生活し、如此の嚴重を以て己をみちびき、恐懼戰慄して主に事へんと欲するを見る時は、彼に其恩寵の助をあたへ給はんさりながら恋に己を世に委し、其快樂を追ふて行

く者には、神は何をか爲し給はんや。

第四章

己が天性の爲に非常の油なる神の恩寵を心の器に取りて覺醒したる彼の五人の童女は、新郎と共に婚姻の室に入るを得たりき。しかれども他の愚にして惡なる童女等は自己の天性に滿足し、覺醒せずして、其心に喜の油を同く取らんことを勉めず、却て不注意と怠慢と己の義に自負するとにより、睡眠に耽りし如くなりき、ゆゑに天國の室も彼等のために閉されたりっげだし彼等は或る此世の械繫と此世の情誼とに引留められしこと明なり、ゆゑに其の完全なる愛と服從とを天の新郎にあらはさゞりき。しかれども天性の爲に非常なる此の神の聖物を尋ね、其全愛を以て主に附く靈魂は、すべて他より離れ遠ざかりて、彼處に祈禱し、彼處に審思し、彼處に默想せん。けだし靈魂の五感即明悟と認識と思慮と忍耐と憐憫とは上より神の恩寵と聖賜とをうくるならば、實に智なる童女とならん。しかれどももし己の天性と共に留まるならば、實に愚者となりて、世の子と認められん。

第五章

惡習は我等が天性の爲には奇怪なるものなり、即彼は、初人の犯罪の結果により我等の中にひそみ、我等これを受けて、漸々に彼は我等のために天性の如くなりたりき、かくの如く我等も此の我が天性の爲に非常なるものを以て(即天の神の賜を以て)惡習を我等の本性より逐ふて、己を元始の潔きに恢復せんこと肝要なり。ゆゑにもし多くの祈禱と信仰と謹慎と世に屬するものより遠ざかるとを以て此目的を達せずして、惡習の爲に汚されたる我等が天性は、彼の愛を以て聖にせられず、即主を以て聖にせられずして、其神聖なる誡命を實行して、終に至る迄躓かざるものとならずんば、天國をうくるあたはざるべし。

第六章

微妙にして深遠なる或教旨を及ぶだけ講解せんと欲す。無限にして無形體なる主は、無限なる仁慈により、己を肉體と爲す、大にして常に萬物の先にある者が或人のいひし如く、自から己を抑損し給ふは、これ其の聰明の造物たる諸聖者及び天使の靈と一致融合するを得んがためにして、彼等の爲にも主の神性の不死なる生命に與かるを得る者とならん爲なり、何となればもろ〳〵の造物は天使も靈魂も魔鬼

も自己の天性によれば即體なるによる(第四講話第九條の注參看)げだし彼等は幾微なる者といへども、其實在に於ては、特質に依るも狀態によるも其天性の幾微なるに應じて幾微なる體なり、これに反して此の身體は其實在に於て粗大なるなり。かくの如く靈魂も微妙なる體にして、此身の肢體を以て掩はれ、且これを衣る、即視る所の目を衣、又此の聽く所の耳をも手をも鼻をも衣るなり。一言にてこれをいへば靈魂はすべて身の肢體を衣て、これと融合一致したるなり、而してこれにより生涯其前にある所の行動を悉く成さんとす。かくの如く言ふあたはず、思ふあたはざるハリストスの仁慈が己を抑損し、肉身となしてハリストスを愛する篤信なる靈魂と融合一致し、これをうけて、パウエルの言ふ如くこれと一神となる(コリンフ前六の十七)言はゞ靈魂は靈魂と實在は實在と一神となるは、これかくの如き靈魂が彼の神性を以て生活し、不死なる生命に達し、不朽なる快樂と得もいはれざる光榮を以て樂ひを得んが爲なり。

第七章

かくの如き靈魂の爲に、主は自から欲する時は、全く不用なるものと外より輸入したるものとを焚盡す火となるべし、預言者もいふ如し、曰く『神は燒盡す火なり』と(復傳律令四の廿四)しかれどもある時には得もいはれざる安息とならんも、或時には又喜びと平安とを以て靈魂を温め、且圍まん、たゞ靈魂は彼を愛して善なる品性を以て彼の意を悅ばすを盡力せんこと肝要なり。しからば靈魂は實驗によりて、彼の『目未だ見ず耳未だ聞かず人の心に未だ入らざる』(コリンフ前二の九)得もいはれざる善福を感覺の爲に愈切に見んとす、これ主の神が主に適當なるものと認めたる靈魂の爲に或は安息となり、或は喜び樂みとなり、又生命となる所のものなり、何となれば神的糧食とならん爲にも、衣服及び言盡されざる美麗とならん爲にも、己を肉身となし給へるは、かくの如くして神的歡樂を靈魂に滿たしめん爲なるによる。けだしいへり『我は生ける餅なり』(イオアン六の五十一)又いへり『我が與へんとする水は其中に於て永遠の生命に湧く水の泉とならん』(イオアン四の十四)。

第八章

神は各祭司及び聖人に其意の欲する如く、又其の見るを賜はりし者に有益なるにしたがひ現はれ給へり、例へばアウラアムには別にあらはれ、イサアクには別にあ

らはれ、イアコフノ・イダニイルモイセイダワィド及び各預言者には別にあらはれて、既にいひし如く、己を抑損して肉身となし、變容して、其の彼等に對して有せる大にして思ふ能はざる愛により、此の神を愛する者等に己を見せしめたまへり、然れどもその自から己にある所のまゝを以てせざるは、神は容るゝ能はざるものなるにより、たゞ彼等が容るべきの量と能力とに適合するなり。

第九章

上より能力と彼の神聖なる火とを己に入るゝを賜はりし靈魂は、天の善なる神の融解したる愛を其肢體に有して、世のもろ〳〵の愛より全く脫し、惡習の鏈鎖をまぬかれて、自由を得ん。火中に置かれたる鐵或は鉛或は金銀は鎔解して其性の剛さを變じて柔ならしむべく、火中にある間は、火力により其天然の堅さを自から脫し、頑强ならずして從順なるものとならん、靈魂もかくの如く、神的愛の天の火をおのれにうけて、世の神に對する凡の偏愛に遠ざかり、惡習の鏈鎖をまぬかれ、すべて世に屬するものを小なるもの、尊敬に足らざるものと爲して、其天性の罪なる剛愎を除き去らん。我いふ、もし彼に極めて愛する所の兄弟あらんに、彼の爲に此愛を妨げんとするならば、かくの如き愛に捕へられたる靈魂は、彼等をも絶たん。けだし肉體の愛は婚姻の契約を結ぶ者をして父母兄弟を離れしむべくして、彼等の中誰を愛するも、少しく愛して、すべての心情とすべての愛慕とを其妻に注がん、されば肉體の愛情が凡そ世に屬する他の愛情より脫せしむることかくの如くならば、彼の無欲なる愛に己を捧げたる者は、或る世に屬するものゝために引き留められるゝことあるべきにや。

第十章

神は善にして人を愛する者なれば、寬忍耐久して、罪を行ふ各人より悔改を甚待望し、悔者の反歸を以て天の祝賀たらしめんとす。けだし神はいふ「天には一の悔改む る罪人の爲に喜あらん」と（ルカ十五の七）。さりながらもし誰か此の仁慈と寬忍耐久とを見、我等の既にいひし如く、神が悔改を待ちて各自の罪を罰せざるを見て、誠命と其仁慈とを輕んずるならば、哀哉、罪に罪を添ひ、一の犯罪に他の犯罪を作り、怠惰に怠惰を加へ、これを以て侮慢に至るの因由とするならば、彼は罪の量を滿たし、既に罪の爲に捕ふる所となりて、起つ能はざるべし、悔心により徒らに免るゝも、惡者

に全く己を委ねたる彼は亡びん。ソドム人もかくの如くなりき、彼等は罪の量を滿たし且超過せり、されば汝たとへば悔改の閃光が彼等に殘らざらんとき、神の審判により火の獲物となりぬ。ノイの時にも此の如し。惡に赴く止むべからざる趨勢に任じ、何等の悔改をも己にあらはさずして、人々は己の爲に全地を併せて全く敗壞せしむる程なる罪の重きを集めたりき。また多く罪を行ひて神の民を辱めたる埃及人に對しても神は善にして彼等を全滅に付さず、種々の罰を以て悔改にみちびけり。しかれども僅に神に歸して、再び惡に戻り、以前の不信に陷りて、終に引出されたる神の民を窮迫したる時、神の裁判は彼等を全く殄滅せり。イズライリが多く罪を行ひて神の預言者を殺したる時もかくの如し、即神は通常の如く寛忍耐久を守り給へり。しかれどもイズライリ人が惡に大に進歩して、主宰の尊貴に耻ぢず、彼に兇殺の手を加ふるに至りし時、彼等は永久に斥け且貶せられ、預言と神品と奉神禮とを彼等よりうばふて、確信したる異邦人にあたへられたりき。

第十一章

我等はハリストスを呼び、其前に心を注ぎて、熱心に趨り附くべく、頑固にして己の救に絶望せざるべし。けだし從前の罪を記憶して絶望に至らしむるはこれ惡者の姦策なればなり。さりながら我等は想ふべし、主は來りて瘸者、癱瘓者、及び聾者の醫となり、治愈者となり、すでに腐敗にかゝりたる死者を復活せしめしならば、矧んや才智の瞽と靈魂の癱瘓と怠慢なる心の聾とを癒し給はざらんや、何となれば身體をつくりし彼は自から靈魂をも造りて、他の何者も造りしにはあらざればなり。それ敗壞して死するものにさへ、かくの如く惠を垂れて憐み給ふならば、矧んや惡習と無知の病にをかされ、其後彼に趨り、就きて彼に願ふ不死なる靈魂を彼は仁愛を以て愈し給はざらんや。けだし我が天の父は晝夜彼に籲ぶ者を終に援けざらんや。

〔ルカ十八の七〕とは是れ彼の言なり。又いふ『求めよ、然らば汝等に與へられん』〔マトフェイ七の七〕また『もし彼は友なるが故に起きて彼に與へざれども其切迫に依りて起きて其需むる如く彼に與へん』〔ルカ十一の八〕といふ、これ彼は倦まずして堅固に願ふべきを勸むるなり、何となれば罪人の爲に來り給ひしは、彼等を己れに歸せしめんが爲なればなり。たゞ我等は從前の惡しき行より離れて主に從はん、しからば主はこれを輕んぜずして、我等に助けを與へ給はん。

第十二章

病と衰弱の爲にをかさるゝ者に就ていはん、もし彼の身體は最早食と飲とをうくる狀態にあらざらんときは、人をして絶望せしむべくして、これ死の徵候たるなり、ゆゑに朋友及び親戚は此時に泣き始めん、かくの如く神と天使等も天の食をもて養はるゝ狀態にあらざる靈魂を大なる悲愁と涙とに當るべきものと認めん。ゆゑにもし汝は神の寶座となりて神が汝に坐し給ふならば、また汝の靈魂は全く屬神の目となり、全く光となり、彼の神の食を以て飽かしめられ、活ける水と心を樂ましむる屬神の酒とを飲ましめらるゝならば、また汝は得もいはれざる光の衣を靈魂に着せるならば、また此のすべてのものを汝の內部の人は實驗により疑なく確知するならば、最早汝は永遠の生命を以て生きて、現時にもハリストスに於て慰安しつゝあるべし。しかれどももし汝はこれをうけず、これを領有せずんは、熱涙をそゝぐべく、如此の富を未だ有せざるを嘆息すべくして、汝の貧しきが爲に、心配も不斷の祈願も汝に必ずこれあるべしア、もしかゝる狀態にある者に於て己が貧しきを知るの感じと雖もあらはるゝあうて、神聖なる富を以て大に飽かしめられたる者の如く、無事閑散に日を送るあらずんば幸ならん。けだしいふあり「尊ぬる者は遇ひ、叩く者は啓かれん」（マトフェイ七の八）。

第十三章

彼の合成したる膏さへ、これを傅けられし者は既に王たる光榮に入るを得る程に力を有するならば、知んや智と內部の人にこれを聖にする喜びの膏を傅けられて、善なる神の聘質をうけし者等は、完全の域に登らざらんや、即王の意に適するときは、王の機密に參與する者となり、父の所に出入するの權利を有してハリストスの國と義子たるとに昇らん。けだし彼等は肉體の重きに尙包まれて、完全なる闘業をうけずといへども、神の聘質の故に、望む所のものは彼等のために疑なうして、ハリストスと共に王となりて、神の富と充滿とに居らんことは彼等これに疑を容れざるなり、何となれば尙肉體に居るも、最早彼の能力と彼の樂みを試みたればなり。けだし降る所の恩寵が內部の人と智とを潔うするにより、悖逆により人々に被らせたるサタナの覆を全く除き、凡の不潔なる意念とを靈魂より取り去るは、其意靈魂が清きものとなり、自己本來の性をうけて、眞實なる光の榮を明なる眼

にて自由に觀るを致さんがためなり。されば かくの如き者等は尙此處に在りて彼の世に取去られ、彼處の美と奇跡とを直觀せん。身體の目は何を以てもそこなはれずして、强壯なるときは、太陽の光線を敢て見ん、かくの如く彼等も光照せられたる淸き智を有して、何れの時にも主の近づくべからざる光輝を直觀せん。さりながら如此の階段は人々易く達し得らるゝにあらずして、反つてこれが爲に長久の勞と數ふべからざる苦行と汗とを要するなりけだし作用する恩寵は臨在すれど、隱るゝ惡習も亦毫も退却せずして、反つて二の神、即光の神と暗の神とが同一の心に作用する所の者多し。しかれども『光と暗と何の交ることのあらん』(コリンツ後六の十四)といひ『光は暗に照る』云々(イオアン一の五)といふ言は種々の關係によりて取用すべく、一樣一片に解すべからざるなり。或は己を制して、居る所の罪に勝を讓らざるを得る程神の恩寵に自から安んずる者あり、されど或時には熱心なる祈禱に在りて、自から安んずれども、其後不潔なる意念の作用するに遇ひ、恩寵の在止するに拘はらず、罪の爲に竊み去らるゝ場合あり。ゆゑに輕騷にして、神聖なる恩寵の幾ばく作用するを精密に理會せざる人は、罪は全滅せられたりと思ふ、しかれども熟慮と才智とを有する者は、神の恩寵の居るあるときも不潔にして不適當なる意念のために動搖せらるゝことを否定せざるなり。

第十四章

兄弟の或者等豐なる恩寵を受けて、五年或は六年の間肉慾の働は彼等に全く蔡微消失したりしが、其後港に着して安穩なりと思ひし時、惡習は恰も埋伏所よりあらはるゝ如く、遺恨と猛烈とを以て彼等を襲擊して、懲愕、疑惑せしむるは、我等の往々見る所なり。ゆゑに智識の透明なる人は誰も己を左の如く、言ふを敢てせず、即『恩寵が我と共に居るにより、我は罪より既に自由になれり』といふを敢てせざるなり、何となれば前文にいひし如く同一の智に二の神の作用するによる。されば輕騷なる人及び無智なる者等は或る過敏なる神經を己に有して、最早『我等は勝てりと』言ふといへども、意ふに事の實際は次の如くなるべし。太陽が淸く照す時といへども、その周圍に集まれる深氣或は霧を以て太陽の美なる光を暗ますことあり。神の恩寵を賜はりしも、己を全く充分に潔うせずして、罪に尙深く占領せらるゝ者等も殆んどこれと同じき有樣にあり、ゆゑに最完全なる實驗を以て此を證せんには實に多くの思慮を要するなり。

第十五章

目や、舌や、耳、及び足なくんば、視或は言ひ、聽き或は行くことあたはざるべし、かくの如く神と神よりあたへらるゝ能力なくんば、亦同樣神聖なる機密にあづかる者となりて、神の叡智を認識し、或は精神上富まさるゝことあたはざるなり。エルリニの智者等は詞章の學を研鑽し、勉勵して時を論辯に費す。然るに神の諸僕は詞章の學に不知なりといへども、神聖なる智識と神の恩寵にて成全せらるゝなり。

第十六章

善なる撫恤者に充ち滿たされし彼の使徒等も憂虞を全く免れしにはあらずして、恩寵により樂みと言ひ難き喜びとに或る畏懼を伴ひしことを余は同く信じて言はんとす、しかれどもこは彼等に惡の作用するを彼等が分疏したるによるにあらず、けだし恩寵は彼等を正しき路より少しく離れしむることさへあらざる危險なき地位に立たしめたり。それ小兒は小石を壁に投ずるも何の損ふ所あらざらん、或は弱き箭は堅甲を少しも傷けざらん、かくの如く惡習の或る部分も彼等を打擊して、無效なるもの及び徒然なるものと認められたり、何となればハリストスの力を以て善く防禦せられたればなり。しかれども全く完全なる際にも彼等には意志の自由のあるあり。されば恩寵の後に憂虞を脫して自由を得るありと或人が說を爲すは理に合はざるなり。主は完全なる者にも神に事ふる中心の所望を促すは互に同意するあらん爲なり。げげし使徒はいふ、『神を熄すなかれ』（フェサロニカ前五の十九）。

第十七章

單純なる言を以て事を傳ふるは凡の人の能くする所にして、且易きなり。例を以ていはんに餅は麥より準備せらるゝものなりとは凡の人易すく言ひ得べし、さりながらこれを準備する所以を詳細に說きあらはさんことは、誰にも知識の足れるにあらずして、たゞ熟練なる人のみこれを爲し得るなり。これと同じく無慾と完全の事も、單に言ふは難からずして、易きなり、しかれども實驗を以て事情を審知するは、是れ即完全を得らるゝ所以を實際に且眞實に理會するに同じ。

第十八章

神的敎旨を實地に味へず、且嘗めずして述ぶる者等は、譬へば人夏日正午の時に方

り、荒漠たる水なき原野を行き、其後強く燥く所の熱により、其附近に清涼なる泉と甘くして且澄める水のあらんことを思ひ出し、何の妨もなく飽くまで水を飲んで樂まんことを想像するに似たり、或は人蜜を一滴も味へずして、其甘味の如何を他に説明せんと試むるに比せん。完全と聖徳と無慾との如何なるを實際に且己の確信を以て審知せずして、これを他に説明せんと欲する者も實にかくの如し。げだし神は其論議する所の事に於ける少しの認識と雖も彼等に得しむるならば、眞實と實際とは其講ずる所と同からずして、甚多く異なるあるを確知せんこと疑なし。

第十九章

仁愛なる王の意に適する者とならん爲には、一を爲すべくして、他を爲すべからざるを、福音經は凡の人に確として命ず。げだし怒るなかれ、願ふなかれといひ、又『もし人爾の右頬を批たば他の頬をもこれに向けよ』といふ（マトフェイ五の三十九）然れども、使徒は誡命せられたるものを逐次に説明し、潔淨の行の漸々に成るべき所以のものを教ふ、即忍耐と大量とを以て最初は嬰兒の如く乳を以て養ひ、其後成長して終に完全に達するを教ふるなり。例を以て言はんに、福音經は命ず、完全なる長下衣は剪毛よりして作るべしと。しかれども使徒は剪毛を紡ぎ且これを織りて長下衣を備ふべき所以を最好く説明せり。

第二十章

或者等は顯然たる姦淫、偷盜、貪食及びこれと同樣なる惡行を禁じ、これにより己を諸聖人の數に列せんとす、さりながら實際に且眞實に聖者とならん爲には彼等に多く足らざるあり、何となれば惡習は尚心中に隱れ、生活して徇匿することしばしばにして、全く彼等より遠ざからされば、聖人とは内部の人を聖にして、完全にこれを清めたる者是なり。兄弟の或者は他の兄弟等と共に祈禱して、神聖なる力の捉ふる所となり、大悅して天都イエルサリムと、彼處の光明なる住所と、無限にして得もいはれざる光とを見て、言ふ所の聲をきけり、『視よや義人等の安息の處』と。其後彼は自から高慢し、己を高しとする意見を懷抱して、罪の深きに陷り、終に大なる惡の獲る所となれり。しかれども彼にしてかくの如くならば、況んや常人は左の如く言ひ得べきか、曰く、『我は禁食し、旅行の生活をなし、所有を散じ、前記の惡行より己を守りしにより、我が爲に聖人とならんに最早殘る所あるなし』といひ得べきか。顯然水

る惡行を禁ずるはいまだ所謂完全にあらず、心を清くするはこれぞ即完全なる。

第二十一章

此事を預想する汝は己の意念を儆醒して監視するに當り、汝の智が罪の囚虜たり及び僕たるを思ひ、其奥底に汝の意念の深きに何物あるを研究せよ即汝の靈の所謂潛伏所なるものに巣を作りて、汝の靈の首なる部分に於て汝を殺さんとする此蛇を研究せよ。けだし心は實に圍むべからざる淵なり、ゆゑにもし汝は此蛇を殺すならば、もしすべての不法より己を清め、罪を己より斥くるならば、神の爲に清きを以て誇るべし、しかれどもこれと反對なる場合に於ては、汝は倘窮乏者たり、及び有罪者たるにより、自から謙遜して汝の隱なる罪の爲に祈り、ハリストスに就くべし。けだしすべて新舊約聖書は見たる所潔淨の事に論及し、又潔淨のことの言論は悉くの人に實効あるにあらずといへども、イウデヤ人の爲にもエルリニ人の爲にも凡の人の爲に切に願ふ所なり、しかれども此に、に達する即心の潔淨に達するは唯一のイイスを以てするの外能はざるなり。けだし彼は實在眞正なる眞理にして、此の眞理なくんば、眞理を認識することも救を捉ふることも能はざるなり。

第六　說教

愛の事

第一章

此の有形なるものに關しては、汝は財産を分ち散じて、外部の人を棄てたり、かくの如く從前の品性をも、汝は棄てんことを要す。されば汝は肉體の智慧或は物體の知識を學びしならば、これをも棄つべし。もし肉體の義の行に依賴せしならば、謙遜し、己を卑うして此を絶念せよ。けだしかくの如くならば、傳道の愚を學ぶを得て「コリンフ前一の廿一」これと共に眞の智慧を獲ん、これ即艶言にあるに非ず、十字架の力にありて、此の力を受くるを賜はりし者は實にこれを所有するを得るなり、何となればパウエルのいふ如くハリストスの十字架は『イウデヤ人の爲には礙、エルリン人の爲には愚なれども、我等救はるゝ者の爲には神の能及び神の智慧なればなり』「コリンフ前一の十八、廿三」。

第二章

汝は天の趣味を得たりと雖彼の智慧を領する者となりて已に其心中に安息を有したりと雖、かゝる場合に於ても、一切の眞理を最早曉り且了解したる者の如く誇るなかれ、自負するなかれ、汝も左の言を聞かざらん爲なり、曰く『爾等は已に飽き足れり、爾等は已に富めり、爾等は我と偕にせずして王となれり、嗚呼願くは爾等の實に王たらんことを、我等も爾等と偕に王たらん爲なり』（コリンフ前四の八）これに反して、パリストヱ教を味ひしならば、己を以て未だこれに關係せざるものゝ如く思ふべし。而してこは汝に於て皮相の考にあらずして、恰も汝の智に常に植付られたる且は固められたる如きものとなるべし。

第三章

富を愛する者は幾千の財を積むといへども、これを以て足れりとせずして、其望はいよ〳〵飽かざらん、或は甘美なる飲を未だ飽かざる先に奪はれし者は更にます〳〵渇を起さん、かくの如く神の甘美を味ふは如何なる飽滿よりも高し。反つて人

は此富を以て富まさるゝ程はいよ〳〵己を貧なるものと思ふなり。かくの如きパリステアニンは自から己の靈魂を高く價値せずして、主の前に極めて卑微なるものと思ひ、己を悉くの人の僕と爲さん。かくの如き靈魂の事は其謙遜の故に主は大に喜びてこれを慰安し給ふなり。ゆゑにもし人は何物を有するあるもこれにより己を以て價値あり、或は何物をか有すると思はざるべし、何となれば自負は主の前に厭ふべきものなればなり。自負は最初に人が『神の如くならん』（創世記三の五）といへるをきゝて、此の空望に信任したるや、人を樂園より逐出せり。認識せよ、汝の神及び王、神の子はいかに『己を虛くして僕の貌をうけ』（フィリッピ二の七）、いかに自から貧くなり、いかに不法なる者と共にせられ、いかに苦難をうけ給ひしを。然るに彼は神たるも、汝は血肉より成れる人、土及び塵なるに、哀哉、何の善にも全く關係せずして、眞の不潔なる汝は己を高く思ひて高慢するか。もし汝は裁智あるものならば、神よりうけたるものについては寧ろ左の如く言ふべし、曰く『これ我が所有にあらず、他よりうけてこれを有す、されば彼もし欲する時は、其與へしものを必ず我より取返さん』と。かくの如くすべて善なるものを主に歸して、惡なるものをば己の劣弱に歸すべし。

第四章

使徒がいはゆる土器に藏むる寶とは、(コリンフ後四の七)知るべしこれ人を聖にする神の能力にして、使徒が尙肉體にありて受くるを賜はりしものなることを。けだし使徒は他の所においてもいへり、曰く『我等の爲に神に由る智慧となり、義及び成聖となり、贖となれり』(コリンフ前一の三十)。此の天に屬する神の寶を得て、これを己に有する者は、誠命にて要求せらるゝ凡の義を爲し、惡くの誠命を純全に聞然する所なく遂ぐるを得るのみならず、これより先勞なくしては成す能はざりしものをさへ、勞も疲倦もなくして遂ぐるを得るなり、何となればたとへ人は欲するにもせよ、善なる神をうけざる間は、靈神上の果を實に育成するあたざればなり。さりながら凡の人は忍耐と信仰とを以て進行を成して、恒に己を勉むべく、此の天の寶をうけんことを熱心を以てハリストスに祈るべし。さらば其時にハリストスにより、ハリストスを以て、凡の義を清潔に、完全に、併て無瑕且無難に遂ぐるを得るなり。

第五章

神聖なる神の富をおのれに有する者が靈神上の訓言を他人に傳ふる時は、自己の寶の中より、取出すものゝ如くにさづくるなり。しかれども神聖なる思想と奥義と最高尙なる言說の善を自己より流し出すべき此富を心の寶庫に集めざる者は、兩約書中より若干の花を集めて、これを己の舌端に載せ、或は屬神の人の說をきゝて、其敎道を以て自から誇り、これを呈すること自分のものゝ如くして、他の製作を己に占有せんとす。されば彼等は其授くる所の他人には容易なる樂みを得しむれども、自分は其講話の後、貧者の如き者とあらはるゝなり、何となればその各言は恰もこれを借られたる者に歸りて、その所有となるが如く、彼等自分には先づ自から樂みて其後他人にも傳へて益せしむべき己の寶を有せざればなり。ゆゑに此の眞實なる富を己に有せんことを我等は先づ神に願ふべし。然る時は我等は他人にも益をあらはして、神秘奥妙なる敎旨を容易に授くるを得べし。けだし神の仁慈は凡の信ずる者に居住せんことを悅び給へり。主はいへり『我を愛する者は我が父に愛せられん、我も彼を愛し、且己を彼に顯はさん』(イオアン十四の廿一)。又他の所にもいへり『我と父とは來りて彼に住居をなさん』(イオアン十四の廿三)。

第六章

神の子となるを賜はりて、これを光照するハリストスを己に有する者を、神は種々多樣に統治し、其の心の秘密に於て恩寵は彼等を煖むるなり。さりながら此事を了解せん爲には世の或る見ゆる樂みを顯はし、これを以て靈魂に於ける恩寵の神聖なる慰藉に譬ふるに如くはなし。けだし此等の慰藉を賜はりし者は、或時には恰も王の或る晩餐にあるが如く樂みて、或る言盡されざる得もいはれざる喜を以て喜ばん、或は精神上偖に樂むこと新婦の新郎に於ける如くなるべく、又は或る無形體なる天使等の如く、自から己を形體に包まれたる者とは思はざらん程身の動かし易きと輕きとを感せん、或時には恰も或る飲料を飲むが如く樂みて、神秘なる奥義の言ひ難き醉を以て酣醉せん、然れども或時には悲嘆の中にありて、衆人の救のために涙を以て祈禱せん、何となれば衆人に於る神聖なる靈神上の愛を以て燃え、全アダムの哀みをおのれに感得すればなり、しかれども或時には言語にていひあらはされざる心神の樂みにより、もし能くするを得ば、善者と惡者との間に如何なる區別もなさじ、凡の人を憐みて自己の懷に隱さんとする程愛を以て燃始めん、或時は人の己より下からんことをさへ思浮ばず、己を以て衆中の末小なるものと爲す程己を卑しめん、或は神の得もいはれざる喜の爲に呑まるべく、或は王の全備なる武具を被たる勇士の出陣して敵を敗走せしむる如く、彼等も同樣神的鎧甲を以て己を防衛し、出でゝ見えざる敵に對して、これを其足下に貶せん、或時には大なる安靜と沈默とは彼等を繞り、平安ならしめて、彼等は奇異の樂に圍まれん、しかれども他時には明悟と、神聖なる智慧と、神の測るべからざる認識とを以て、ハリストスの恩寵により、いかなる舌を以ても言ふ能はざる程に智慧付られん、しかれども彼等は外形によれば如何んしても人類各自と異ならざるを見るの時あらん。かくの如く神聖なる恩寵が彼等に種々變化して、殊異多樣なる働を爲すは其意恰も靈魂を完全無玷清潔にして天の神に見えしめん爲にこれを養ひ、且練習せしむるに似たるなり。

第七章

こゝに數へ來れる神の作用は、高き階段に立ちて完全に最近き者にこれあり。此の殊異多樣なる恩寵の慰藉は神を以て彼等に生じ、種々同からざるありといへども、

間斷あらざるべし、けだし神の一の作用に次で他の作用生ずればなり。人がすべての情慾より充分己を潔めて、得も言はれざる親與により、撫恤者たる神と全く合一して靈神上の完全に達し、靈魂は恰も神を以て融和せられたる如く、神となるを賜はる時は、すべては彼に於て光となるべく、すべては愛となるべく、すべては喜となるべく、すべては慰安となるべく、すべては善良となるべし。されば靈魂は善なる神の能の德行に沈沒すること、恰も海底に在て八方より水に圍まるゝ石の如くなるべし。かくの如くなれば彼等は神の神と全く合一して神の僞らざる德行を己れに有し、衆人にも此結果をあらはして、パリストスに似ん。神は彼等を內部に於て無玷清潔なる者となせり。故に彼等は惡習の結果を己の外に生ずるあたはざるべし、反つて神の結果は常にすべてに於て彼等に光らん。神的完全の非常なる進歩即使徒が我等に到り達せんことを勵む『パリストスの充滿』なるものはかくの如し、いへらく『すべてにパリストスの充滿にみてられん爲なり』（エフェス三の十九）又いへらく『成全の人となり、パリストスの全き成長の量にいたるに迄ぶ』（同上四の十三）

第八章

時として人は入りて膝を屈めんに、其心は神聖なる能力に滿てられ、靈魂はすでに説明せし如く主と偕と樂むこと、新婦の新郎を喜ぶ如くなることあり。大なるイサイヤ此事をいふ、曰く『新郎の新婦をよろこぶ如く主は汝を喜ばん』（イサイヤ六十二の五）或は亦かくの如き者が終日何事にか從事して、一時祈禱に向はんに、其時內部の人は祈禱に奪ひ去られて彼世の限なき深きに圍まれ、その高く飛で奪ひ去られたる智は全く狂喜する程得もいはれざる愉快を感じて、此世の念慮を思忘るゝことあらん、何となればすでにいひし如く、其思は祈禱にみちみてられて、恰も囚人の如く、無限にして測るべからざる處に引去らるればなり、ゆゑに此時に於ては彼の祈禱により祈禱と共に靈魂も出去らんとする情況の人に生ずることあらん。

第九章

しかれども常にかくの如きの情況に居らん爲に、其力は人に足れるか、との問を發する者には、左の如く答ふべし、恩寵が人と共に居らずして人に根付かざらん時は

あらざるなり、されば恩寵はその共に居る所の者に於て或る天然なる奪ふ可らざるものゝ如くなるべく、恩寵は人と合一して、其欲する如く種々に人を攝理して其益を致す。火は或時には更に強く人に燃ゆれど、或時には更に弱く燃ゆることあり、又光も或時には大に照せども、或時には減少して暗くなることあり、これ疑なく神聖なる照覽によるなり、又燈は消えずして燃ゆといへとも、或時には更に光明なることあり、其時人は祝賀して、恰も神の愛を以て大に醉ふ如くならん。しかれども或時には心中にあらはるゝ其光が更に最内部にして最深奥なる光の爲に戸を啓くことあり、因りて彼の甘美と直覺との爲に全く呑まれたる人は、最早自身の外に居るべく、愛と愉快とを以て新に心神を奪はるゝにより、及び其賜はりたる奥義の深きによりて、或は世の爲に愚なる者の如く、又は害ある者の如くなることあらん。而して人は彼の時に於て完全の量に達し、凡の罪より自由を得て、責むべき所なきものとなること屢これあり、しかれども其後恩寵は或は減少するありて、反對なる力の復は人に降らん。

第十章

恩寵の作用のことを左の如く思ふべし、たとへば第十二段に登る、即完全に登ると假定せよ、而して如此の程度は時あり達し得らるれども、恩寵は復び弱く行爲するを始めん、されば一段を下りて、譬へば第十一段に止る如くならん。此等の奇跡を人に示されて、人の實地にこれを試みるや、もし此事が常にかくのごとくして續かんには、人は傳道の職務と責任とを己れに負ふこと能はざるべく、何事を聞くことも言ふことも能はざるべく、甚だ暫時といへども何なりとも慮るの配慮を己に負擔せざるべく、たゞ一隅に伏して、大なる喜の園む所となり、高く飛んで、大に酩酊しつゝあらん、ゆゑに人に兄弟の事及び傳道に勤むるの事を慮りてこれに從事する時を有せしめん爲に完全なる程度は人にあたへられざるなり。

第十一章

天國の事の説話をきゝて涙を流すまでに至るも、此の己の涙に礙へらるべからず、又己の耳に於ても善く聞きし者の如く、己の目に於ても善く見し者の如く、己を以て十分なる者と爲すべからず、何となれば他の耳と他の目と他の涙と、同じく亦他の明悟と他の靈魂とあればなり、即此の神聖なる天の神のあるありて、彼は聰き且

哀み、且祈禱し、且認識して、實に神の旨を行へばなり。げだし主は使徒等にも神の至高なる賜を約して、次の如くいひ給へり、曰く、『撫恤者即聖神、父が我の名によりて遣はさんとする者は、彼凡の事を汝等に教へん』〔イオアン十四の廿六〕又いへり、『我尙多く汝等に言ふべき事あれども、爾等今容るゝあたはず。然れども彼即眞實の神來ら ん時、爾等を凡の眞實に導びかん』〔同上十六の十二〕。彼は祈禱すべく、彼は哀しまん。神聖なる使徒はいへり、『神も亦我等の弱きを助く、蓋我等は宜しきに合ひて何を求むべきを知らず、然れども神自から言ふべからざる嘆息を以て我等の爲に求む』〔ロマ八の廿六〕。何となれば神の旨はたゞ神にのみ顯然と知らるればなり。いふあり、『神の事は神の神の外之を知る者なし』〔コリンフ前二の十一〕。されば五旬節日に當り、約束の如く撫恤者降り來りて、善なる神の能力が使徒等の靈に止まり、罪の覆は彼等より全く取外され、情慾は止息して、彼等に心の目の啓かるゝや、其時には最早神を以て完全に昇せられたる彼等は睿智に滿てられて、此の彼等が靈魂に主宰となり王となりたる神に因りて神の旨を行ふを學び、神を以て凡の眞實にみちびかれたりき。ゆゑに我等も神の言を聽きて哀みを生ずるときは、疑なき信を以てハリストスに祈願せん、ハリストスの旨に從ひて聽き、且祈禱する神がこれを實に希望する我等にも來らんが爲なり。

第十二章

事情は左の如くなりと想ふべし、即或る能力は稀薄なる空氣の如く、輕き智に掛りて、これを掩はん。燈は先にいひし如く常に燃え且光るといへども、此光に或る覆の如きものゝ掛るあらん、ゆゑにかくの如き人は未だ不完全にして、罪より全く自由を得たる者には非ざるを打消すこと能はざるなり。されば彼は自由なる者とも不自由なる者ともいひ得べし。しかれどもこは神に拘はらざるに非ずして神の照覽によるものなること無論なり。或時には彼の防禦の中壁が破壞挫折せらるゝことあれども、或時には全く破壞せらるゝにあらざることあり。されば かくの如き祈禱の狀態は常に一樣なるにあらずして、或時には恩寵は大に燃えて慰め且安んぜしむることあれども、或時には少しく光り弱くなりて、人を益する爲に恩寵が自から此を節限する如くなることあり。さりながら或時には余は完全なる程度に達し、彼世を味ひ且試みしことあり、しかれども完全なる或は自由なる一の「ハリスチアニン」をも未だ見ざるなり。或者は恩寵に安んじ、奧義と啓示とにあづかる者となり、大

なる恩寵の甘美を覺ゆる迄に到り達すといへども、しかれども彼にも罪は同ぐ存するなり。我いふ、かくの如き者等は大に豐なる恩寵と彼等を照す光の故に、無經驗によりて己を以て完全なる者及び自由なる者と思へり。ざりながらすでにいひし如く余は一の全く自由なる者を未だ見ざるなり。げだしすでにいひし如く、余も或時には彼の程度に稍到達したる場合ありしにより、經驗を以てをしへられたる我は完全なる人の如何なるを知るなり。

第十三章

汝は新郎と新婦の親與の事、喜悅と祝宴のことを聽かんときは、一も物體的なるもの或は地に屬するものを想像するなかれ、何となればこれ例の爲に取りて適用するものなるによる。げだしこれ皆得もいはれざる神的なるものにして、肉眼の爲に觸るゝあたはず、たゞ信にして聖なる靈魂の爲に曉り得べきものなるにより、聖神の親與も、天の寶も、聖なる天使等の喜悅と祝宴も、たゞこれを試みたる者には明に見ゆれども、聖にせられざる者には心に想像することだも全くあたはざるなり、ゆゑに信によりて如此の認識に達するを未だ賜はらざらん間は恭謹にして此事を聽くべし、さらば其時は實驗により心靈の眼を以て見るべく、これらの善を、パリストファニンの靈は尙此世に於ても受るを得んげだし復活に於ては身體も如此の善にあづかるものとなるを得べく、身體が神に屬するものとなるときは、これを見るを得て恰もこれを領するが如くならん。

第十四章

自己の心靈上の美と善良なる結果、例へば祈禱、愛、信、儆醒、禁食、及び其他の德行の企業は神と合一親與するときは、火中に置かれたる香の如く、自らも盛なる芳香を發せん、然らば神の旨に遊ひて生活せんことは、最早我等の爲に容易なるべし、何となれば先にすでにいひし如く、聖神なくんば誰も神の旨を悟るあたはざればなり。げだし夫と結婚する婦の如し、配耦するに至る迄は自己の心情を以てみちびかれ、己の意のまゝに擧動をなせども、夫と合する時は、注意を自己に向くるをやめて、全く夫の指導の下に生活するを始めん、かくの如く靈魂も自己の意旨と自己の法と自己の行爲とを有すれども、もし天の夫なるハリストスと配合するに堪ふるものとなるときは、夫の法に屬すべくして、最早己の旨には從はず、新郎たるハリストスの

旨に從ふなり、

第十五章

婚姻の服とは、知るべし聖神の恩寵をいふなり。これを服するに當らざる者は、天の婚姻と神的の晩餐にあづからざるべし。此の神的神聖なる酒を嘗め、此の惺々なる醉を以て醉はしめらるゝことに力を用ひん、酒を飽くまで飲みし者は多辯になる如く、我等も此の神的なる酒に全く充ち滿たされて、神聖なる奥義に悟り徹せんためなり。げだしダヴィドはいへり、『我が爵は滿ち溢る』〔聖詠廿二の五〕

第十六章

己の疵を認識し、己を圍繞する情慾の暗きを認識して、常に主に救助を願ひ、勞を忍耐して、此世のいかなる幸福をも喜ばず、ただ一の最良なる醫と其療法に依頼する靈魂は神の貧しきものなり。しかれども多くの疵を負へる此靈魂はいかにしてパリストスと共に同居するに堪ふべき最勝れたる美容なるものとなるを得べきか。これ他にあらず、靈魂が元始如何樣に造られたるに注目すると、己の疵と己の貧しきとを明白に認識するにあるのみ。もし靈魂は己に有する疵と情慾の痂とをたのしまず、己の有罪なるを恕するなくんは、主はこれを不具ならしめざるべく、來りてこれを痊し、これを療して、これに無欲と不朽なる美とを恢復せしめん。たゝ彼はすでにいひし如く情慾が促す所のものと任意に交るをなさず、情慾によりて生ずるものに同意をなさずして、善なる神によりあらゆる情慾より免るの自由をたまはらんが爲に全力を以て主に呼ぶならば可なり。故にかかる靈魂は福なり。しかれども己の疵を自覺せずして、大なる限りなき惡習の故に、何等の惡習を有することをも思はざる靈魂は禍なり、善なる醫師は彼を眷みざるべく、又療せざるべし。何となれば彼は己を以て傷はれざる健全なるものと思ふて、己の疵を慮らざればなり。いふあり、『康强なる者は醫師を需めず、病を負ふ者はこれを需む』〔マトフェイ九の十二〕

第十七章

凡そ德行に對する熱心なる愛にみちびかれて、天に屬する神の秘義を識るの認識を實驗により聰敏に求得て、己の住處を天に有する者は、生活に於ても、超性の樂に於ても、實に福にして驚嘆すべきものなり。これぞ彼等が悪くの人類に超越する明

白の證左なる有力なる或は有智なる、或は善智なる人類中誰か尙地に居りて天に登り、彼處に神的なる行を成し、神の美麗を直觀したる者ありや。しかれども今や外貌によれば或る貧しき者、極めて貧しく賤しくして、鄙人にさへ全く知られざる者は、主の前に其面を俯伏し、神にみちびかれて天に昇り、其心に疑なき信を有して、彼處の奇跡をたのしみ、彼處に行動し、彼處に居處を有すること神聖なる使徒の昔へる如くならん。げだしいふあり、『我等の居處は天に在り』〔フィリピ三の二十〕またいふあり、『神が彼を愛せし者の爲に備へし事は目未だ見ず耳未だ聞かず、人の心にいまだ入らず』〔コリンフ前二の九〕其後使徒は又加へていへり、『たゞ我等には神己の神を以て之を顯はせり〔同上十〕彼等こそは實に有智にして有力なる人なれ、彼等こそは貴にして善智なる人なれ。

第十八章

さりながら彼の天に屬するものによらずして、現在の賜に依り聖者を度らんも、彼等は惡くの人類より一層上なりと言ふを訝るなかれ。此事は左の如く考ふべし、ヅロンに王たりしナウホドノソルは曾て其點刻したる偶像を拜せしめん爲に屬下の民を惡くあつめたりしに、こは神の聖明なる慮りにより、童子の德行が衆人に明かに知らるゝ緣由となりて、衆人は天に在す眞實の神の一なるを認識せり。捕虜として自由を奪はれたる三人の童子は、王の前に勇氣を有せり、されば人皆大なる恐れを以て偶像を拜し、いかんしても從はざるを敢てせずして、殆ど弊なき家書の如く引去らるゝや、童子等は他の人々の如く行動するを甘んせざるのみならず、其敬度の知られずして己まんことをだに欲せず、其敬度の隱れてあらはれざるに得堪へずして、衆人の耳につげて左の如くいへり、『我等は汝の神々に事へず、また汝の建てたる金像を拜せず』と〔ダニイル三の十八〕彼の恐ろしき火爐は彼等を罰せん爲に彼等をうけたれども、彼等に其働をあらはさず、却て其前に崇拜するものゝ如く、彼等を守りて禍にかゝらざらしめたり。衆人及び王も自ら彼等によりて眞の神を認識せり。たゞ地に在る者のみならず、諸の天軍も彼等に驚嘆せり。しかれども天に在る者等も聖人の剛毅なる苦行のときにあたり、遠ざからずして、これに注目することは、神聖なる使徒もこれを我等に示す、げだしいへり、『天使等及び人々の爲に觀玩となれり』〔コリンフ前四の九〕これと同樣なることは、イリヤの例に於ても見るを得ん。彼は獨り天火を降して、最多數の者に打勝てり。またモイセイも全エギペトと

苦虐者ファラオンとに打勝てり。同じく亦ロトノイ及び其他多くの人々の例に於ても見るべし、現に彼等は人々より大なる輕侮をうけたれども、多くの有名なる且有力なる者に勝てり。

第十九章

凡そ有形なる物體は、もし他のこれと異なる天然物の來りてこれに助くるあらずんば、自から不活動なるものとなり、昏亂なるものとならん、けだし得もいはれざる神の睿智は有形物體に於て我等に秘義と狀とをあらはす、即人性はもし神の手のこれに助くるあらずんば、德行の完全なる美麗と聖德の神的莊嚴とを自からあらはすあたはざる所以を示す、例へば自然に任せられたる地は、もし農夫のこれに勉勵を用ふるなく、亦雨と太陽の助を添ふるあらずんば、何も利する所なくして、豐饒を致す力は最少なからん、また凡の家もこれと一樣の性にあらざる此の太陽の光に必要を有す、しかれども光なくんば、家は暗黑に滿てられて、住むに便ならざるべし。これと同く言ふべき他の物體をも汝は多く見んかくの如く人性も善行の果を完全に產し得べき力を自から有せずして、たゞ我等が靈魂の神的農夫たるハリストの神に必要を有するなり、彼は實に我等が天性の爲に非常なるものなり、何となれば我等は受造物にして、彼は造られしものにあらざればなり、而して彼は其熱練を以て心を耕す、即全くの所望により己を此當事者に托する信者の心を耕して、これに神の完全なる果を成長するの備をなさしめ、情慾の爲に暗まされたる我等が靈魂の家に其光を照し始めん。

第二十章

「ハリステアニン」には、二樣の戰と二樣の角逐の其前にありあり、第一は此目を以て見らるゝ物體と戰ふにあり、何となれば物體は靈魂を刺衝し、感動し、且呼起して、これに耽り且これを樂ましむればなり、而して第二は恐るべき世界統御者の首制及び權柄とたゝかふにあるなり。

第二十一章

モイセイの面にあらはれたる光榮は至聖なる神の眞實なる光榮の像なりき。彼處に於ては誰もモイセイの面を瞻るあたはざりし如く、今も情慾の暗は、ハリステア

ニン」の靈魂を輝かす此光榮に堪へ得ず、其光線の爲に逐はれて逃走せん。

第二十二章

義を愛する者と神を愛する者即天の甘美を味ふて、其靈魂には植付けられたる及び融解せられたる恩寵を有し、恩寵の旨に全く己を托したる者は、すべて此世に於て嫌はれん、何となれば彼は凡て世にある所のものより上に立てらるればなり。金或は銀、或は尊敬と光榮、或は讃美と名譽とを稱せんか、いかんしても彼はかくの如きものゝ爲に捉へらるゝあたはざるべし、何となれば他の富と他の尊敬と、他の光榮とを實地に試み、不朽なる樂を以て靈魂をやしなひ、神の親與によりて感應と充分の保證とを有すればなり。

第二十三章

彼は明悟を以ても、認識と思慮とを以ても、人々に異なること、靈智ある牧者の無智なる羊に異なるが如し、如何となれば彼は他の神と、他の才智と、他の明悟と、此世の智慧に異なる他の智慧をうくればなり。いふあり、『我等は智慧を練達者の中に語る、惟斯の世の智慧、亦此の世の過ぎ易き有司の智慧に非ず、乃神の奥妙にして秘密なる智慧を語る』（コリンツ前二の六、七）ゆゑにかくの如き者は、すでにいひし如く、凡そ世の神を有する人又は聰明なる者又は智慧ある者とはすべての點に於て異なるありて、錄していふ如く、『度らざる所なきなり』（コリンツ前二の十五）彼は各人の事を知り、其何くより取りて言ひ、何に止まりて、いづくに在るを知る、されば彼を認識し、彼の事を度ることは、世の神を有する者の中誰も能くする無しといへども、かくの如き神性の神を有する者はこれを能くするなり、神聖なる使徒の言によるに、曰く『神に屬する言を以て神に屬する事に當つるなり。靈に屬する人は神の神の事をうけず、其彼の爲に愚なるが故なり、然れども神に屬する人は度らざる所なし、而して己は何人にも度られず』（コリンツ前二の十三、十五）。

第二十四章

しかれども此の至聖なる神をうくることは、人たゝ凡そ此世にある所のものより遠ざかりて、パリストスの愛を尋ぬるに、己を捧げ、才智は物質的のものを慮るの諸慮を脱し、たゝ此の一の目的に進向して、パリストスと一神となるを賜はるに、非ず

んば、能はざるなり、使徒の言ふ如し『主に附く者は主と一神となる』（コリンフ前六の十七）しかれども此世に於て或物の爲に全く繫がれて、これに恥りたる靈魂、例へば富又は榮譽又は世の愛情に恥りたる靈魂は、凶惡なる力の暗を避けて、これを超ゆること能はざるべし。

第二十五章

義を愛し神を愛する靈魂は、主に對するの愛に些少の弱みもうけざるのみならず、すべてを全く主の十字架に釘して、靈魂に顯はるゝ靈神上進歩の感を自覺せん。ゆゑに此の愛に感刺せられたる靈魂は、いはゞ德行の義と、善なる神の照明とに飢ゑつゝありて、たとへ神聖なる奧義に堪ふる者となるといへども、天の樂と恩寵に與かる者となるといへども、自己に信任せず、又或る價値を有せりと思はず、靈神上の賜をうくる程は更に愈々飽かず、愈々盡力して天に屬するものを尋ぬべく、靈神上の進歩を己に感ずる程はいよ〳〵飢ゑて、此等の賜をうけんことを願ふなり、されば靈神上大に富める靈魂は、この賜に關係する程は恰も貧者に似たる、あること、神の書にいふ如くなるべし。けだし言へり『我を食ふ者は更に飢ゑ我を飲む者は更に渴かん』（シラフ廿四の廿三）。

第二十六章

かくの如くなる靈魂は、すべてに於て情慾より免るの自由をたまはり、恩寵の充滿により、神聖なる神の照明と親與とを完全にうけん。しかれども怠慢なる靈魂は、勞苦を忍耐せずして、尙體中に在るにより、心の成聖をこゝに一部うくるには非ずして全く受けんことを不易なる忍耐と大量とを以て盡力せず、ゆゑに充分なる感情と確信とを以て撫恤者たる神と親與して、彼に由り有害なる情慾より免れんことを希望せざるなり。神聖なる恩寵を賜はるといへども、惡習の爲に竊去らるゝ彼等は、自己を慮るを全く罷むること、最早恩寵をうけてこれに慰められ、靈神上の甘美を以て樂むものゝ如くならん、故に自負に極めて偏りて、悔悟の心を有せず、其思想の狀態に於ては不遲にして渴を感せず、完全なる無欲の域に進向せずして、此の小なる恩寵の慰藉を以て自から足れりとし、驕傲には進歩すれど、謙遜に進歩せずして、其賜はりし恩寵をさへ最速に失ふこと往々これあり。けだし眞に神を愛する靈魂は、前に言ひあらはせし如く、義なる行を千百成就せりといへども、嚴なる儆醒を

以て身體をつからし、神の種々なる賜と啓示と奥義とを賜はりしといへども、謙遜を以て、己をみちびくこと、恰も神に依る生活を未だ始めざりし者の如く、善なるものを一も得ざりしものゝ如くなるべし、何となれば服從と飽かざる心とを以てハリストスを愛するに傾けばなり。

第二十七章

此域に達することは、誰が爲にも俄に能くすべきに非ず、又容易すきにあらざるべし、たゞこれに先だつ多くの辛勞と苦行との後、多年の勉勵により、試練と種々なる誘惑を歴るにしたがひて完全なる無欲の域に達するを得るなり。たゞかくの如くして悪くの勞と己を疲らすとを以て、試みられ、凶悪が引入れんとするあらゆる誘惑を大量に忍耐する人は、終に大なる尊敬と、神的恩賜と、神聖なる富とを受けて其後天國を嗣ぐ者となるべし。

第二十八章

しかれども生活に於ては前文にいひし如くなる嚴重を有せずして、成聖の感をいまだ心にうけざる靈魂は、泣て熱心に主に願ふべし、得もいはれざる直觀によりて心中にあらはるゝ神が此の幸福と能力とを賜はらん爲なり。教會の法に依るに肉體の罪に證定せられたる者は、先づ司祭を以て分離せられ、其後己の悔改を適當にあらはして、親與に入るをゆるさるゝなり、然れども躓づかずして潔く生活する者に至りては、彼は神品に昇るべく、外に立つ所の者により祭壇の内に入れられて位をうけん、聖務を行ひ主の前に立つ者とならん爲なり、かくの如く使徒が言ふ所の奥密なる神の親與の事もこれと同じく思ふべし、曰く『我等の主イイスハリストスの恩寵、神父の愛、及び聖神の親與』と（コリンフ後十三の十三）されば〻こゝには次第順序の守らるゝを認むべし。けだし神聖なる三者は、神聖なる仁慈の助によりて己を清潔に守る靈魂に居らんしかれども其居るは彼が自から己に有る如きを以て居るに非ず、何となればこは凡の造物の爲に容るゝ能はざるによる、乃ち人の才能と受け易きとにしたがひて居るなり。然るにもし人は神の旨に應ずるの生活より幾分なりともはなれて、神聖なる神を辱しむるならば、人の才智は靈界の樂より拋擲して退けられん何となれば神聖なる恩寵と愛と凡そ善なる神の作用は彼に滅少して、其靈魂が再び正しく行きて神の意を悦ばすを始むるに至る迄は彼自から

凌辱と誘惑と凶惡の諸神とに付さるればなり。其後惡くの信認と謙遜とにより己の悔改をあらはして、終に恩寵の惠を新に賜はり、以前よりも更に多く天の樂をうけん、されど靈魂は凡の惡念に抵抗し、恒に主に附き、何を以ても神を厭しめずして、慇懃に生活するならば、かくのごときの靈魂は當然これと相準じて大に進歩し、得もいはれざる賜をうけ、光榮より光榮に、一の慰安より最完全なる慰安に進まん、然して其後ハリストスの完全なる量に達し、ハリストスの永遠の國に於てハリストスの完全なる當事者に數へ入れられて、間然すべからざる聖務執行者となるなり。

第二十九章

すべて此の見ゆるものに於て隱れて見えざるものゝ狀態と影とを想ふべし、即見ゆる殿に於て心の殿の狀態を想ひ、司祭に於てハリストスの恩寵の眞實なる祭の狀態を想ふべし。それ此の見ゆる聖堂に於て、もし最初に讀經唱詩及び其他聖堂の儀式と禮典のこれに先ずるあらずんば、司祭はハリストスの體と血との神聖なる機密を行ふべからず、またもしすべて聖堂の規則は實行せらるゝも、奥密なる聖體禮儀が司祭により成るあらずしてハリストスの體を領するあらずんば、教會の規定の如く聖務は完成せずして、機密の勤も不充分なり。「ハリスチアニン」のことも此の如く了解すべし。もし彼は禁食と微醒と唱詩と凡の苦行と凡の德行に進歩したれど、其心の祭壇に於ては充分なる感情と心神の慰安とにより、恩寵を以て神の奥密なる作用の成るあらずんば、すべてかくの如き苦行の秩序は成るあらずして殆んど無益に歸せん、何となれば人は心中に奥密に生ずる所の神的の喜を有せざればなり。

第三十章

禁食は美なる行なり、微醒は美なる行なり、苦行と旅行の生活もこれと同じく美なる行なり、これ神を愛する者の生活の初實なり。さりながら獨り此の如きの行に敢て依賴するは全く無智なり。我等は或る恩寵をうくれども、我等が內部に潛伏し居る惡習も前文にいひし如く狡猾なり、されば隨意に位置を讓り、其の欲する如く働かす、反つて人をして其智を既に清潔に達したるものとなし、以て自己の完全に自負せしめて、其後强盜の如く人を襲ふて、幽暗の地に落すこと往々これあり。人は二十年賊を働き或は軍務に服するあらば、敵の爲に詭計を如何に設くべきを知り、身

を隱し、豫め謀りて伏兵を置き、敵の後に廻り、不意に圍んで殺すこと屢々これあるなり。矧や世に最早數千年を經たる罪は靈魂を殺すを以て己の爲に最重要なる事と爲し、よく豫め謀りて、かくの如きの伏兵を心の隱處に置き、暫時潛みて働かず、靈魂をみちびきて己が完全に自負せしむるに巧なり。ゆゑにハリストス教の主義根本は次の如し、もし誰か義の行を惡く實行するあらんも、これに安んせず、これに多く依賴せずして、或る大なる事を爲し遂げたりと思はざるにあり、またもし誰か恩寵をうくる者とならん時は、己を以て最早目的を達して飽足れる者と爲さず、其時にも飢ゑ且渴き、哀みて涙を流し、全く傷める心を有するにあるなり。

第三十一章

靈神上の情況を左の如く想ふべし。王の家ありと假定せよ、彼には種々の第宅も若干の玄關も、他の外部の住所もあらん、其より更に順序により內部の諸室あるべくして、其內には例の如く紫衮衣と財寶の藏せらるゝあり、其より更に最內部なる室ありて王の居住の爲にあらゆる裝飾の施しあらん、然るに誰か外部の第宅と住所とに入りて、內部の室に達したりと思ふならば誤りならん、かくの如く靈神上に於ても此と同じきあり。もし誰か己の腹及び睡眠と戰ひ、唱詩と祈禱とを恒に務めんに、最早目的を達して、慰安を得たりとは彼等思はざるべし。何ぞや、尙玄關にあり、又外廷にありて、王の紫衮衣と財寶の藏せらるゝところにあるに非ざればなり。もし彼等は或る靈神上の恩寵を賜はりしならば、これ亦目的を達せりとの思を以て彼等を欺かざるべし。ゆゑに汝は寶を此瓦器の中に發見したるか、神の紫衮衣を衣たるか、王を見て慰安したるか、これを試みんこと肝要なり。けだし復想ふべし、即靈魂は或る深さと多くの部分とを有するあり、入り來りし罪は其の惡くの組織と心の意念とを占有すれども、其後人が神の恩寵を蒙ぬるときは、恩寵の來りて占有するは大概靈魂の二の部分なるを想ふべし。此により無經驗なる者は此恩寵の爲に慰められつゝ、靈魂のすべての部分が恩寵に占有せられ、罪は全く根絶せられたりとの思に陷る、しかれども靈魂の大部分が尙罪に占領せらるゝを彼は知らざるなり。けだししば〳〵說明せし如く、恩寵の不斷に作用するは目の身體に作用する如くなるべきも、才智を竊み去る惡習もこれと同じく作用すればなり。ゆゑに能く思慮せざる者は恰も或る大なるものを既にうけたる如く、己を高く思ふて、清潔の極點に達せし者の如く自から高慢す。さりながら此事に於て眞理が彼を義とせん爲

には更に多くの要するものあり。けだし先の説教にて示したる如く、これ亦サタナの詭計の一なるによる。即サタナが或る時に位置を隨意に讓りて、通常の働をやむるは、其意苦行者をして其完全に於るの自負心を起さしめんとするなり。さりながら葡萄園を作る者は同時に果實をも收むるには非ず、又種子を地に播く者は收穫を直ちに得るに非ず。何ぞや、新に生れたる嬰兒は豈直ちに完全に達するか。イエスを仰ぎ觀よ。ハリストス、神の子、及び神は如何なる光榮より降りて如何なる苦難といかなる罵詈と十字架とをうけ給ひしや。然るに此の謙遜の爲に更に稱揚せられて父の右に坐し給へり。されども姦惡なる蛇は神とならんとの望を最初アダムに播きたる爲に此の自負により彼を如何なる汚辱に落したりしや。ゆゑにこれを心に想ふて汝の能くするだけ自から己を防衛すべく、常に己を謙遜して、悔悟の心を有せんことを力むべし。

第七　説教

智の自由の事

第一章

ハリストスが地獄に下りて、かしこに抑留せられたる靈魂を救ひ給ひしをきくときは、これを以て目下行はるゝ所のものより遠き事と思ふなかれ。心は即墓にして、重く苦しき暗黑の爲に圍まれたる意念も才智もかしこに葬むられたるを想ふべし。ゆゑに主は地獄に於て主に呼ぶ所の靈魂に來り、即心の深きに來りて、かしこに於て死に命じていはん、『我を尋ねたる靈魂の繫がれたるを解くべし、我能く彼等を救はん』と。其後靈魂に横はれる重き石を突離して、墓を啓き、實に死せる靈魂を甦らし、惡くの光を奪はれて獄中に押籠められたるものを自由にしたまはん。

第二章

サタナは汝を慫慂し、汝の心中に於て談論すること屢々これあり、いへらく、汝は惡

事をなしゝこと幾ばくぞ、汝の靈魂は不法に滿てられ、多くして且最重き罪に苦しめらるゝを認識せよ』と。しかれども此の際かくの如く行動し、謙遜の狀に托して汝を絶望に落すに盡力するは何者なるを汝は知らずんばあるべからず。破誡により て汝に罪を入れたる以來サタナは日々に接近すること人の人と接近する如く、或る可く靈魂と談論してこれに盲昧なる意見を勸め入れんとす。故に汝も彼に答へて次の如くいふべし『我は聖書に於て自ら保證を有す、神はいへり、我は罪人の死するを欲せず、轉じて(悔改して)生に入らんことを欲すと』(イエゼキリ三の十一)。けだし彼の降るはいかなる目的を有するか、罪人を救ひ、暗黑に在る者を照し、殺されし者を復活せしむるにあらずして何ぞや。

第三章

反對の力も神の恩寵も勸誘するものとしてあらはるれど、強て使しむるものとしてあらはれざるは、自由と自由なる願の我等に全く守られん爲なり。ゆゑに人がサタナの煽動により爲すところの惡行の爲にも、罰に服するものは復サタナに非ずして、人なり、何となれば人は惡に强て引入らるゝにあらずして、自己の意志により引誘せらるればなり。しかれども これと同く善なる行爲に於ても、恩寵は爲しゝ所のものを自己に歸せずして人に歸す、故に人に榮を有せしめて、人は自から己のために善なる行爲の原由者となるなり。けだし恩寵はすでに述べし如く强て使しむる力を以て人の意志を束縛して變ず可らざるものと爲さず、乃ち人に止まりて其意志の善行に傾くか、或は惡習に傾くの明白なるものとならんために餘地と自由なる願とをあたふるなり。けだし律法は天性のためにあたへらるゝに非ずして、善にも又惡にも傾くを得べき意志の自由のためにあたへらるゝなり。

第四章

靈魂を守りて、これを汚穢なる且姦惡なる意念と暗談するより預誡せんこと肝要なり。身體は汚行をなさんために他の身體と相合して汚さるゝ如く、靈魂も姦惡汚穢なる意念と親み、これと相和して、其姦計に同意するのみならず、凡の惡習にも例へば不信、欺瞞、虛榮、忿怒、嫉妬、及び誹論にも同意して、敗壞せらるゝなり。凡の肉と神との汚より潔くすべし(コリンフ後七の一)とは此を意味するなり。けだし鄙猥たる意念を以て心の秘密に行はるゝ敗壞と淫行のあるを思ふべし。されば大なる